親鸞「二」（吉川英治）

女人篇

風水流転

一

暗黒の大蔵の中から光のなかへ、何ものかを自分はつかんで出たと信じた。五ヵ月ぶりで一切経の中から世間へ出た時の範宴のよろこびは、大きな知識と開悟とに満たされて、肋骨のふくらむほどであった。

（もう何ものにも迷うまい）彼は、信念した。

（もう何ものにも挫けまい）彼は足を踏みしめた。

そして心ひそかに、

我れこの世を救わん

の釈尊の信願をもって自分の信願とし、雪の比叡へ三度目にのぼったのである。

仏祖釈迦如来は、大悟の眼をひらいて雪山を下りたという。彼は、新しい知識に信をかためて伝統の法城へ勇躍してのぼってゆく。

どのくらいな心力と体力のあるものか、範宴は、不死身のように死ななかった。骨と皮ばかりになって、しかも、麓への道さえ塞された雪の日に、

「範宴じゃ、今帰った――」と、一乗院の玄関へふいに立った彼のすがたを迎えて、覚明も性善坊も、

「あっ……」と驚いたほどであった。

休養というような日はそれからも範宴には一日もなかった。おそろしい金剛心である、彼はその冬を華厳経の研究のなかに没頭して、覚明や性善坊と、炉辺に手をかざして話に耽ることすらない。

そうした範宴の日々の生活をながめて、覚明はある時、しみじみと、

「命がけということは、武士の仕事ばかりと思うていたが、どうして、一人の凡人が、一人の僧といわれるまでには、戦い以上な血みどろなものじゃ」と、心から頭を下げていうのであった。

翌年の五月の下旬であった。難波から京都の附近一帯にわたって、めずらしい大風がふいて、ちょうど、五月雨あげくなので、河水は都へあふれ、難波あたりは高潮が陸へあがって、無数の民戸が海へさらわれてしまった。

そういう後には必ず旱がつづくもので、疫病が流行りだすと、たちまち、部落も駅路も、病人のうめきにみちてしまった。都は最もひどかった。官では、施薬院をひらいて、薬師だの上達部だのが、薬を施したり、また諸寺院で悪病神を追い退ける祈祷などをして、民戸の各戸口へ、赤い護符などを貼りつけてしまったけれど、

早にこぼれ雨ほどのききめもない。
犬さえ骨ばかりになって、ひょろひょろあるいている。町には、行路病者の死骸が、乾物みたいにからからになって捨てられてあったり、まだ息のある病人の着物を剥いで盗んでゆく非道な人間だのが横行していた。
突然、召状があって、範宴は叡山を下り、御所へ行くあいだの辻々で、そういう酸鼻なものを、いくつも目撃した。
（ああ、たれかこの苦患を救うべき）若い範宴のちかいは、心の底にたぎってきた。

二

なんのお召しであろうか。
庁の中務省へゆくまでは範宴にも分らなかったが、出頭してみると、意外にも、奏聞によって、範宴を少僧都の位に任じ、東山の聖光院門跡に補せらる――というお沙汰であった。叡山では、またしても、
「あれが、少僧都に？」と、わざとらしく囁いたり、
「二十五歳で、聖光院の門跡とは、破格なことだ。……やはり引き人がよいか、門閥がなくては、出世がおそい」などと羨望しあった。
彼らの眼には、位階が僧の最大な目標であった。さもなければ勢力を持つかである。そして常に、武家や権門と対峙することを忘れない。
たれが奏聞したのか、範宴は、それにもこれにも、無関心のように見える。どんな毀誉褒貶もかれの顔いろには無価値なものにみえた。ただ、さしもの衆口も近ごろは範宴の修行を認めないではいられなくなったことである。一つの事がおこると、それについて一時はなんのかの蝉のように騒ぎたてても、結局は黙ってしまう。心の底では十分にもう範宴の存在が偉なるものに見えてきて、威怖をすら感ずるのであるが、小人の常として、それを真っ直にいうことができないで、彼らは彼ら自身の嫉視と焦躁でなやんでいるといったかたちなのである。
翌年秋、範宴は、山の西塔に一切経蔵を建立した。
（他を見ずに、諸子も、学ばずや）と無言に大衆へ示すように。
無言といえば、彼はまた、黙々として余暇に刀をとって彫った弥陀像と、普賢像の二体とを、彫りあげると、それを、無動寺に住んでいた自身のかたみとして残して、間もなく、東山の聖光院へと身を移した。
東山へ移ってからも、彼の不断の行願は決してやまない。山王神社に七日の参籠をしたのもその頃であるし、山へも時折のぼって、根本中堂の大床に坐して夜を徹したこともたびたびある。
彼が、その前後に最も心のよろこびとしたことは、四天王寺へ詣って、寺蔵の聖徳太子の勝鬘経と法華経とを親しく拝観した一日であった。
太子の御聖業は、いつも、彼の若いこころを鞭打つ励みであった。初めて、その御真筆に接した時、範宴は、河内の御霊廟の白い冬の夜を思いだした。

「あなたは、聖徳太子のご遺業に対して、よほど関心をおもちとみえる。まあ、こちらでご休息なさいませ」そばについて、寺宝を説明してくれた老僧が気がるに誘うので、奥へ行って、あいさつをすると、それは四天王寺の住持で良秀僧都という大徳であった。

この人に会ったことだけでも、範宴にとっては、有益な日であったし、得難い法悦の日であった。

この年、鎌倉では、頼朝が死んだ。そして、梶原景時は、府を追われて、駿河路で兵に殺された。武門の流転は、激浪のようである。法門の大水は、吐かれずして澱んでいる。

正治二年、少僧都範宴は、東山の山すそに、二十八歳の初春をむかえた。

時雨の罪

一

この春を迎えて、聖光院の門跡として移ってからちょうど三年目になる。

門跡という地位もあり、坊官や寺侍たちにも侍かれる身となって、少僧都範宴の体は、おのずから以前のように自由なわけにはゆかなくなった。時には省みて、（このごろは、ちと貴族のような）と聖光院のきらびやかな生活を面映ゆくも思い、

（狎れてはならぬ）と、美衣美食をおそれ、夜の具の温まるを懼れ、経文を口で誦むのをおそれ、美塔の中の木乃伊となってしまうことを懼れたが、門跡として見なければならぬ寺務もあり、官務もあり、人との接見もあり、自分の意見だけにうごかせない生活がいつの間にか彼の生活なのであった。

「お牛車の用意ができました」木幡民部が手をついていう。

民部というのは、範宴が門跡としてきてから抱えられた坊官で、四十六、七の温良な人物だった。

範宴は、すでに外出の支度をして、春の光のよく透る居室の円座に、刃もののように衣紋のよく立っている真新しい法衣を着、数珠を手に、坐っていた。

こういう折、朝夕に見る姿でありながら、坊官や侍たちは、時に、はっとして、（ああ、端麗な）思わず眼がすくむことがある。

実際、このごろの範宴は、ひところの苦行惨心に痩せ衰えていたころの彼とはちがって、下頬膨れにふっくらと肥え、やや中窪で後頭部の大きな円頂は青々として智識美とでもいいたいような艶をたたえ、決して美男という相では在さないが、眉は信念力を濃く描いて、鳳眼はほそく、眸は強くやさしく、唇は丹を噛んでいるかのごとく朱い。そして近ごろはめったに外出もせぬせいか、皮膚は手の甲まで女性のように白かった。

だが、ふとい鼻骨と、頑健な顎骨が、あくまで男性的な強い線をひいていた。肩は磐石をのせてもめげないと思われるような幅ひろく斜角線をえがき、立てば、背は五尺五寸のうえに出よう、ことに喉の甲状腺は、生れたての嬰児の、拳ほどもあるかと思われるほど大きい。

この端麗で、そして威のある姿が、朝の勤行に、天井のたかい伽藍のなかに立つと、大きな本堂の空虚もいっぱいになって見えた。

口さがない末院の納所僧などは、

「御門跡のあの立派さは、どうしても、童貞美というものだろうな」などと囁き合った。

けれど、師の幼少から侍いている性善坊は、どうしても、

「だんだん、母御前の吉光さまに生き写しだ」と思えてならない。

ただ、濃い眉、ふとい鼻ばしら、嬰児の拳大もある喉の男性の甲状腺――それだけは母のものではない、強いて血液の先をたずねれば、大曾祖父源義家のあらわれかもしれない。

「では、参ろうかの」民部の迎えに、その姿が、今、円座を立って、聖光院の車寄せへ出て行った。

ちょうど松の内の七日である。範宴は、網代牛車を打たせて、青蓮院の僧正のもとへ、これから初春の賀詞をのべにゆこうと思うのであった。

二

供には、いつものように、性善坊と覚明との二人が、車脇についてゆく。

牛飼の童子まで、新しい布直垂を着ていた。

慈円僧正の室には、ちょうど、三、四人の公卿が、これも賀詞の客であろう、来あわせていて、

「御門跡がおいでとあれば――」と、あわてて、辞して帰りかけた。慈円はひきとめて、

「ご遠慮のいる人物ではない。初春でもあれば、まあ、ゆるりとなされ」といった。範宴は、案内について、

「よろしゅうございますか」蔀の下からいった。

「よいとも」僧正は、いつも変らない。

範宴も、ここへ来ては、何かしらくつろいだ気がする。僧正のまえに出た時に限って、童心というものが幾歳に

なっても人間にはあることを思う。客の朝臣たちは、
「は……。あなたが、聖光院の御門跡で在すか。お若いのう」と、おどろきの眼をみはった。
「おん名はうかがっていたが、もう五十にもとどく齢の方であろうと思っていたが」べつな一人も同じような嘆声を発すると、僧正はそばから、
「はははは、まだ、見たとおりな童子でおざる」といった。
「御門跡をつかまえて、童子とは、おひどうございます」
範宴は、師の房のことばに、何か自分の真の姿をのぞかれたような気がして、
「師の君の仰っしゃる通りです」と、素直にいった。
僧正は、相かわらず和歌の話へ話題をもって行った。
そして、
「初春じゃ、こう顔がそろうては、歌を詠まずにはおれん。範宴も、ちかごろは、ひそかに詠まれるそうな。ここに在す客たちも、みな好む道――」と、もう手を鳴らして、硯を、色紙を、文机をといいつける。客の朝臣たちは、
（はて、どうしよう）というように、当惑そうな眼を見あわせた。そのくせ、青蓮院の歌会には、いつも、席に見える顔であり、四位、蔵人、某の子ともあれば、公卿で歌道のたしなみがない人などはほとんどないはずである。何を、眼まぜをしているのだろうか。とにかく、しきりと、もじもじして、運ばれてくる色紙や硯などを見ると、さらに、眉をひそめていた。

慈円は、いっこうに、頓着がない。好きな道なので、もう何やら歌作に余念のない顔である。
「いっそ、申しあげたほうが、かえってよくはあるまいか」
「では、そこもとから」
「いや、おん身から……」何か、低声で囁きあっていた朝臣たちは、やがて思いきったように、「ちょっと、僧正のお耳へ入れておきたいことがありますが」と、いいにくそうにいいだした。

三

「ほ？　……何でおざろう」
「実は、この正月にも、あちこちで、僧正のおん身に対して、忌わしい沙汰する者があるのでして」
「世間じゃもの、誰のことでも、毀誉褒貶はありがちじゃ」
「しかし、捨てておいては、意外なご災難にならぬとも限りませぬ。僧正には、まだ何もお聞きなさいませぬか」
「知らぬ」と、慈円はこともなげにかぶりを振った。範宴は、側から膝をすすめて、
「お客人」と、呼びかけた。
「師の君のご災難とは心がかり、して、それの取沙汰とは何を問題にして」
「やはり、和歌のことからです。――この正月、御所の歌会始めに主上から恋という御題が仰せ出されたので

す。その時、僧正の詠進されたお歌は、こういうのでありました」と客の朝臣は、低い声に朗詠のふしをつけて、

わが恋は
松をしぐれの
そめかねて
真葛ヶ原に
風さわぐなり

「なるほど……。そして」
「人というものは意外なところへ理窟をつけるもので、僧正のこの歌が、やがて、大宮人や、僧門の人々に、喧ましい問題をまき起す種になろうとは、われらも、その時は、少しも思いませんでした」
「ほほう」僧正自身が、初耳であったように、奇異な顔をして、
「なぜじゃろう？」と、つぶやいた。
「されば――僧正の秀歌には主上よりも、御感のおことばがあり、女の局や、蔵人にいたるまで、さすがは、僧正は風雅なる大遊でおわすなどと、口を極めていったものです。ところが、心の狭い一部の納言や沙門たちが、その後になって、青蓮院の僧正こそは、世をあざむく似非法師じゃ、なぜなれば、なるほど、松を時雨の歌は、秀逸にはちがいないが、恋はおろか、女の肌も知らぬ清浄な君ならば、あんな恋歌が詠み出られるはずはない。必定、青蓮院の僧正は、一生不犯などと、聖めかしてはおわすが、実は、人知れず香を袂に盗んで口を拭く類で、祇園のうかれ女の墻も越えているのだろう、苦々しい限りである、仏法の廃れゆくのも、末法の世といわれるのも、ああいう位階のたかい僧正の行状ですらそうなのだから、まことにやむを得ないことだ、嘆かわしいことだなどと、讒訴の舌を賢げに、寄るとさわると、いい囃しているのです」
　範宴は、自分のことでもいわれているように、眸を恐くさせて聞いていた。聞き終ってほっと息をつぎながら、僧正の面が、どんな不快な気しきに塗られているであろうと、そっとみると、慈円は、
「ははは」と、肩をゆすぶって笑うのであった。

四

「妙な批判もあるものじゃな、そんなことを沙汰しおるか」
「中には、僧正を、流罪にせよなどと、役所の門へ、投文した者もあるそうです」
「おどろき入った世の中じゃ、それでは人生に詩も持てぬ。文学も持てぬ。僧が、恋歌を作って悪いなら、万葉や古今のうちの作家をも、破戒僧というて責めずばなるまい」
「しかし、僧正の時雨のお歌は、あまりにも、実感がありすぎるというて、女を知らぬ不犯の僧に、かような和歌の作れるわけはないというのです」
「それがおかしい。僧とても、人間じゃ、美しい女性

を見れば美しいと思うし、真葛ヶ原の風でのうても、血もさわげば、恋も思う。まして、詩や歌の尊さは、人間としての真を吐露するところにあって、嘘や、虚飾では、生命がない」そういって、慈円は、世評の愚を一笑に附したが、客の朝臣は、

「しかし、衆口金を熔かすということもありますから、ご注意に如くはありません」

「いわしておくがよい。自体、僧じゃから女には目をふさげ、酒杯の側にも坐るなとは、誰がいうた。仏陀も、そうは仰せられん。信心に自信のない僧自身がいうのじゃ。また、僧を金襴の木偶と思うている俗の人々がいうのじゃ。われらには、自分の信心を信ずるがゆえに、さような窮屈なことは厭う。たとえば、いつであったか忘れたが、室の津へ、船を寄せ、旅の一夜を、遊女と共に過ごしたこともある。その折の遊君は、たしか、花漆とかいうて、室の時めいた女性であったが、津に入る船、出る船の浮世のさまを語り、男ごころ女ごころの人情を聴き、また、花漆の問法にも答えてやり、まことによい一夜であったと今も思うが、みじんもそれが僧として罪悪であったとは考えぬ。月は濁池にやどるとも汚れず、心浄ければ、身に塵なしじゃ、そして、娯みなきところにも、娯み得るのが、風流の徳というもの、誹るものには、誹らせておけばよい」

慈円は、筆をとって、はや、想のできた和歌を、さらさらと書いていた。

朝臣たちも、僧正のことばに感じ入って、歌作の三昧にはいり、いつとはなく、そんな話題もわすれてしまったらしい。

ほどよく、範宴は辞して、聖光院へかえった。しかし、きょうの話題は、牛車のうちでも、寝屋のうちでも、妙に胸に蝕い入ってならなかった。

そして、僧正がいわれただけの言葉では、まだ社会へ対して、答えきれていない気がするのであった。仏法と女性、僧人と恋愛、それは、決して、一首の和歌の問題ではない。

この数日、範宴はそのことについて、熱病のように考えてばかりいた。解けない提案にぶつかると、それの解けきれるまでは夢寐の間にも忘れ得ないのが彼の常であった。

それから十日ほど後。青蓮院の文使いが見えた。

師の僧正からで、頼みの儀があるから来てもらいたいという文面であった。

五

僧正は待っていた。いつもながら明快で、元気である。訪れた範宴の顔を見ると、

「よう来てくれた。実はちと頼みおきたいことがあって」と、人を遠退けた。

「何事でございますか」範宴は、何となく、青蓮院のうちに、静中の動とでもいうような波躁ぎを感じながら師の眉を見た。

「ほかではないが、ことによると、わしはしばらく遠地へ参るようになるかもしれぬ。で、留守中のことども、何分、頼みおきたい」
「突然なことをうけたまわります……して何地へ？」
「何地へともまだわからぬが、行くことは確からしい。いつ参るともさしつかえないように、これに、いろいろ覚え書をいたしておいた。後の始末、頼むはおもとよりほかにない」と書付を一通、手筐のうちから出して、範宴のまえにおいた。
「かしこまりました」何も問わずに、範宴はそれを襟に秘めた。そして、
「さだめない人の世にござりますれば、仰せのよう、いつお旅立ちあろうも知れず、いつ不慮のお移りあろうも知れず、とにかく、おあずかり申しておきます、どうぞ、いかなる時もお心やすくおわされませ」といった。
「うむ」慈円は、自分の心を、鏡にかけて見てとるように覚っている範宴のことばに、満足した。
「たのむぞ」
「はい。しかしお心ひろく」
「案じるな、わしは、身の在るところに娯み得る人間じゃよ、風流の余徳というもの。――いや、風流の罪か、ははは」玄関のほうには、しきりと、訪客の声や、取次の跫音が客殿との間をかよう。
範宴は、長座を憚って、師の居室を辞した。そして、廻廊をさがってくると、
「兄上」見ると弟の尋有だった。

尋有は、憂いにみちた顔をしていた。いつもながら病身の弱々しさと、善良で細かい神経につかれている眸である。
「――もうお帰りですか」
「うむ、近ごろ体は」
「丈夫です」
「それはよい、真心をあげて、御仏にすがり、僧正に仕えよ」
「はい。……あの、ただいま、師の御房から、どんなお話がありましたか」
「おまえも、心配しているの」
「お案じ申さずにはおられません。わたくしのみでなく、ほかの弟子一統も、お昵懇の人々も、みな、客殿につめかけて、あのように、毎日、協議しておりますが……」
弟のことばに、ふと、そこから院の西の屋を見やると、なるほど、僧正の身寄りだの、和歌の友だの、僧俗雑多な客が、二十人以上も、通夜のように暗い顔をして、ひそひそと語らっているのが遠く見えた。

六

尋有は、眼をうるませて、
「あのうちに、師の御房の和歌の御弟子、花山院の若君がいらっしゃいます」
「お、通種卿もおいでか」
「その他の方々も、兄上にお目にかかって、ご相談いた

したい儀があると仰せられますが、おもどり下さいませんか」
「そうか」範宴は考えていたが、
「お会いいたそう」
「お会いくださいますか」尋有はよろこんで先に立った。客殿の人々は、
「聖光院の範宴御房じゃ」と、ささやきあって、愁いの眉に、かすかな力づよさを持った。
「時に、ご承知でもあろうが」と花山院の通種や、弟子の静厳や、僧正の知己たちは、範宴を、膝でとりまいて、声をひそめた。
「――困ったことになりました。なんとか、貴僧に、よいお考えはあるまいか」と、いう。僧正の例の問題である。
一首の和歌が、こんなに、険悪な輿論を起そうとは思わないので、僧正はじめ、僧正に親しい人々もわらって抛っておいたところが、その後、問題は、禁中ばかりでなく、五山の僧のあいだにも起って、慈円放逐の問責がだんだん火の手をあげてきた。そして、
（青蓮院を放逐せよ）とか、はなはだしいのは、
（遠流にせよ）などという排撃のことばをかざして、庁に迫る者など、仏者のあいだや、官のあいだを、潜行的に運動してまわる策士があるし、朝廷でも、放任しておけない状態になったというのである。
で――いちど僧正を参内させ、御簾の前にすえて、諸卿列席で糺問をした上、その答えによって、審議を下してはどうかというので、この間うちから、青蓮院へ向って、たびたび、お召しの使いが立っている。ところが、僧正は、
（古今、詩歌に罪を問われたる例なし、また、詩歌のこころは、俗輩の審議に向って、説明はなし難し）と、いって、参内の召しに、応じようともしないのである。
再三の使者に、しまいには、頑然と首を振って、
「慈円は、病で臥しております」といって、居室に、籠ってしまった。
前の関白兼実の実弟にあたる僧正として、この不快、不合理な問題に対して、それくらいな態度を示したのは当然であり、歌人の見識としても、はなはだもっともなことなのであるが、そのために、朝廷の心証はいっそう悪くなって、
「さらば、不問のまま、遠流の議を奏聞すべし」という声が高まってきた。
月輪兼実が、朝廟にあって、関白の実権をにぎっている時代なら、当然、こんなことは起らないのであるが、その月輪公は、両三年前に、すでに官をひいて、禅閤となえ、今では隠棲しているので、それに代って、朝に立った政閥と、それを繞る僧官とが結んで、弟の慈円僧正をも、青蓮院から追い出して、自党の僧で、その後にすわろうという謀らみなのでもあった。
「すてておいては、僧正の罪を大きくするばかりです。範宴御房、師の君に代って、貴僧が、御所へ参って、申し開きをして下さるわけにはゆきませんか」

七

事件は複雑だ、裏と表がある。問題となった和歌などはむしろ排撃派の表面の旗にしか過ぎない、僧正があってはとかく思うままに振舞えない僧門の一派や、月輪兼実が隠棲したこの機に、旧勢力を一掃して、完全に自分たちの門閥で朝廷の実権を占めようとする新任の関白藤原基通や鷹司右大臣などの意志がかなり微妙に作用しているものと見て大差ない。

したがって、この事件に対して、範宴には範宴の観察と批判があった。大体、彼は僧正の態度に、賛同していた、僧正の覚悟のほどにも、さもあることと共鳴していた。

自分が叡山の大衆に威嚇され嘲罵されても、その学説は曲げ得られないように、もし僧正が、堂上たちの陰険な小策に怯じて、歌人としての態度を屈したら、詩に対する冒涜であり、また僧正自身の人格をも同時に捨てて踏みつけることになる。

で範宴は、師の房が、遠流になろうとも、あくまで正義を歪げないようにと心に祷り、今も、暗黙のうちに、師弟の心がまえを固めてきたところであるが、こうして、慈円の弟子や知己や、和歌の友人たちが、一室のうちに憂いの眉をひそめたり嘆息をもらして胸を傷めあっている状を見ると、あわれにも思い、また師の老齢な体なども思われて、むげに、自己の考え方を主張する気にもなれなかった。

「おすがりいたします、範宴御房、この場合、あなたのお力に頼むよりほかに、一同にも、思案はないのでございます」

花山院の公達もいうし、静厳もいうし、他の人々も、すべて同じ意見だった。範宴はやむなく、

「さあ、私の力で、及ぶや否やわかりませぬが、ご一同の誠意を負って、師の御房に代って参内してみましょう」と答えた。ちょうど、その翌る日にも、冷泉大納言から、慈円に病を押しても参内せよという督促の使者が来た。弟子の静厳から、

「先日もお答えいたした通り、僧正は病中にございますが、もし、法弟の範宴少僧都でよろしければ、いつでも、参内いたさせますが」と代人を願った。使者が、折返して、

「代人にても、苦しゅうないとの朝命です」といってきた。そして、日と時刻とを、約して行った。

その日は、寒々と、春の小雨が光っていた。

身を浄めて、範宴は、参朝した。御所の門廊をふかく進んで、

「聖光院門跡範宴少僧都、師の僧正のいたつきのため、召しを拝して、代りにまかり出でました」

取次の上達部は、

「お待ち候え」と、殿上へかくれた。

初めて、御所の禁苑まで伺候した範宴は、神ながらの清浄と森厳な気に打たれながら、また一面に、いかに

して今日の使命をまっとうするか、僧正の名を辱めまいかと、ひそかに、心を弓のごとくに張っていた。

八

「使僧範宴とは、何者の子か」関白基通が、鷹司右大臣を見ていった。

「さあ？」と鷹司卿はまた、冷泉大納言のほうを向いて、

「おわきまえか」と訊ねた。

「されば、あの僧は、亡き皇后大進有範の子にて日野三位の猶子にてとか」

「ほ。藤原有範の子か」基通は、黙った。

公卿たちの頭には、姓氏や家門というものが、人を見るよりも先に支配する。

無名の者の家の子なら、大いに蔑んでやろうと思ったかも知れないのである。

「そうか、有範の子か」囁きがその辺りをながれた。時刻を指示してあるので、公卿たちは、衣冠をつらねて、範宴の参内を、待ちかまえていたところであった。

やがて次々から、関白まで、取次がとどく。基通は、またその由を、御簾のうちへ奏聞した。

一瞬、公卿たちは、固唾をのむ。末座遠く、範宴のすがたが見えた。いっせいに、人々の眼が、それへ射た。

人々は、はっと思って、

（不作法者っ）と顔色を騒がせた。

なぜなら、ふつう、初めて参内する者は、遠い末席にある時から、脚はおののき、頸は、俯向き、到底、列座の公卿たちを正視することなどできないものであるのに、範宴少僧都は、怯じるいろもなく、砧の打目のぴんと張った浄衣を鶴翼のようにきちんと身に着け、眸を、御簾から左右にいながれる臣下の諸卿へそっと向けて、二歩三歩、座のところまで進んできた。

公卿たちが、はっと感じたのは、あまりに、彼のすがたが巨きく見えたためであった。およそどんな武将や聖でも、この大宮所で見る時は、あの頼朝ですらも小さく見えたものである。それが、まだ一介の若僧にすぎない範宴が、いっぱいに眼へ映ったことは、（不遜な）という憤りを公卿たちに思わすほどであった。

しかし静かに、座をいただいて玉座のほうへむかい、やがて拝をする彼のすがたを見ると、公卿たちの憤りも消えていた。

作法は、形ではなくこころである。範宴の挙止には真が光っていた。

天皇も仏子であり、仏祖も天皇の赤子である。仏祖釈尊もこの国へ渡ってきて、東なる仏国日本に万朶の仏華を見るうえは、仏祖も天皇のみ心とひとつでなければならないし、天皇のおすがたのうちにも仏祖のこころがおのずから大きな慈愛となって宿されているはずである。

この国のうえに多くの思想や文化を輸入たもうた聖徳太子のこころを深く自己の心の根に培っていた範宴は、

そういう常々のおもいがいま御座ちかくすすむと共に全身をたかい感激にひたせて、眩い額をいつまでも上げ得なかったのである。

御簾のうちはひそやかであったが、土御門天皇も、彼のそうした真摯な態度にたいして、しきりにうなずかせられていた。

九

やがて、鷹司卿が、

「使僧」と、よんだ。

「は」範宴は顔をあげた。

「おもと、何にても、師の慈円にかわって、答え得るか」

「師のお心をもって――」

「うむ」うなずいて少し膝をすすめ、

「さらば問うが、不犯の聖たる僧正が、あのような艶めかしい恋歌を詠み出でたは、そも、どういう心情か」

「僧も人間の子にございますゆえ――」

「なんじゃ」大胆な範宴の答えに、諸卿は色をなして、

「――では、僧正も人間の子なれば、女犯あるも、恋をするも、当りまえじゃと、おもとはいうか」

「さは申しあげませぬ」

「でも今、僧正も人間の子なればと、返答したではないか」

「いかなる聖、いかなる高僧といえ、五慾煩悩もなく、悪業のわずらいもなく、生れながらの心のまま白髪になることはできません。大地はふかく氷を閉ざしても、春ともなれば、草は萌え、花は狂う。その花もまた、永劫に散らすまいとしても、やがて、青葉となり、秋となるように。――これを大地の罪といえましょうか、大いなる陽の力です、自然の法則です」

「さような論は、云い開きにはならぬ、いよいよ、僧正の罪を、証拠だてるようなものじゃ」

「しかし」範宴の頬には若い血が春そのもののように紅くさした。

「しかし何じゃ」

「釈尊は、人間が、その自然の春に甘えて、五慾におぼれ、煩悩に焦かれ、あたら、永劫の浄土を見うしのうて、地獄にあえぐ苦患の状を、あわれとも悲しいこととも思われました。さらば弥陀は第一に、五戒を示し、五戒の条のひとつには、女色を戒めておかれたのです」

「それを犯した僧正は堕落僧じゃ、遠流に処して、法門の見せしめとせねばならん」

「僧正の身はご潔白です。あのお歌が、若々しい人間の恋を脈々とうたっているのでもわかります。密かに、女犯の罪をかさね、女色に飽いている人間ならば、あのお年齢をもって、あのような若々しい歌は詠み出られません。もう、人間の晩秋に近い僧正の肉体です。それなのに、まだあのような歌が詠まれるのは、いかに、僧正が、今日もなおお若いお心でいるかという証拠であり、そういう肉体を老年まで持つには、清浄な禁慾をとおしてきたお方でなければならないはずです。ことにまた、

ご自身に、お疑いのかかるような後ろぐらい行状があれば、なんで、情痴の惻々と打つような恋歌などを、歌会の衆座になど詠みましょうか。もっと、聖めかした歌を詠んで、おのれの心をも、人の眼をも、あざむこうとするにちがいありません」

範宴はすずやかにいって退けた。ことばの底には、人を打つ熱があった。彼は、僧の禁慾がいかに苦しいものか、自分にとって尊いものか、現在の自分に比べても余りに分りすぎている。彼は、師の弁護をするという気持よりも、いつか自分の行の深刻な苦悩に対して、思わず涙を流していっているのであった。

十

弥陀は、人間になし難いことを強いた。五戒の約束がそれである。

求法の僧衆が、最も苦しみ闘うのは、そのうちでも「女色禁」の一戒であった。女に対して、眼をつぶることは、生れながらの盲人でさえもなし難い。

肉体の意慾を、押しふせ、押しふせ、ある年月までの行を加えてしまうまでは、たいがいな僧門の若者は、この一戒だけにも、やぶれてしまう。

しかも、この至難な行をのりこえて、聖とか、高僧とかいわれるほどの人は、そのほとんどが、ふつうの人以上に、絶倫な体力や精根の持ち主であるので、その行のくるしいことも、人以上なものである。それはちょうど、一刻、一日ごとに、血まみれな心になって磨いてゆく珠玉にひとしい。磨けば磨いてゆくほど愛着のたかまるかわりに、ひとたび手から落してしまえば、十年の行も、二十年の結晶も、みじんに砕けて、その人の求法生活は、跡かたもないものになる。

――なんで慈円僧正のような人がそんな愚をなそうか、僧正はすでに珠である、明朗と苦悩の域をとうに蝉脱した人格は、うしろから見ても、横から見ても、「禁慾の珠玉」そのものである。

そのすずやかな蝉脱のすがたは、歌人としては、随所に楽しむ――という主義の下に、人生を楽しみあそび、僧としては、浄土を得て、法燈の守りに、一塵の汚れもとめない生活をしている。いかに、さもしい俗人の邪推をもって僧正の身のまわりをながめても、僧正に、それ以上なものがなければ淋しかろうとか、不幸だろうとかいうようなことは考えもつかない沙汰である。さまでの僧正を、なおも強いて穢なき臆測で見ようとする人々には、よろしく、僧正と共に青蓮院に起臥してみるがよい。いかに、僧正が、女性のない人生をとおってきても、そこに少しの淋しさも不自然さもなく、いる所に楽しんでいるかの姿がきっとわかるに違いない。

範宴は、縷々として、以上のような意味を、並いる人々へ説いた。そして、

「若輩者が、おこがましい弁をふるいたてましたが、お師の君に、あらぬ世評のふりかかるは、弟子の身としても、口惜しい儀にぞんじます。何とぞ、煌々たる天判

と、諸卿の御明断とを、仰ぎあげまする」といって、ことばを終った。
僧である以上、さだめし難かしい仏典をひきだしたり、口賢い法語や呪文で誤魔化すだろうと心がまえしていた人々は、彼の人間的な話に、
（正直な答弁である）と感じたらしく、その間に、口をさし挟む者がなかったばかりでなく、誰にもよく、僧正の人格というものが得心された。
主上は、御簾のうちへ、関白基通を召されて、何か仰せられている御様子であった。
基通は、退がって、
「範宴に、料紙と硯――を」と、側の者へいいつけた。
料紙台に、硯と、そして、主上からの御題が載って、範宴のまえに置かれた。

十一

御題を詠じてさしだすと、こんどは、堂上たちが、
「この題で、一首」と、わざと困らすような難題を、次々にだした。
範宴は、筆を下に擱かなかった。公卿たちは、
「ほ……」と、その一首一首に、驚嘆をもらして、
「なるほど、歌才があれば、僧侶でも、どんなことでも自在に詠まれるものらしい」と、今さらしく、うなずいている者もあった。
「慈円は、よい弟子を持たれたものじゃ」範宴に対する諸卿の眼は、急にものやわらかになり、そして、慈円の咎めも、不問になった。
御簾を拝して、範宴は、退がろうとした。すると、
「ちと、待とう」と基通がいった。伝奏から、
「御下賜」とあって、檜皮色のお小袖を、範宴に賜わった。
範宴は、天恩に感泣しながら、御所を退出した。
牛車の裡に身をのせてから、初めて、ほっと心が常に返った。肌着にも、冷たい汗が感じられる。
「ああ、危ういことであった」しみじみと思うのである。
もし、きょうの使命をし損じたらどうであろう。堂上たちのあの空気では、恩師の流罪もあるいは、事実として現れたかもしれない。
女色だの、食物だの、生活のかたちは、僧は絶対に俗の人と区別されているけれども、政権の中にも僧があるし、武力の中にも僧の力がある、あらゆる栄職や勢力の争奪の中にも、僧のすがたのないところはない。
もともと一笠一杖ですむ僧の生涯に、なんで地位だの官位だのと、そんなわずらわしいものを、求めたり、持たせられたり、するのだろうか。
それがなければ、法門も、少しは浄化されるだろうに。衣食や女人ばかり区別しても、根本の生活行動が、政治や陰謀や武力と混同してあるいているのでは、何にもなるまい。
「だが……」と範宴は、自分を省みて、自分のすがたに恥じないでいられなかった。自分の身にも、いつのま

にか、金襴のけさや、少僧都の位階や、門跡という栄職までついているではないか。

そして、今となっては、捨てるに捨てられない――

自己を偽れない範宴の気もちは、すぐにも、金襴や位階をかなぐりすてて、元の苦行の床へ返りたくなった。

「やがてまた、この身も、僧都となり、僧正となり、座主となり、そして小人の嫉視と、貴顕の政争にわずらわされ、あたら、ふたたび生れ難き生涯を、虚偽の金襴にかざられて終らねばならぬのだろうか」頬に手をあてて、湖のごとく静かに、しかし悶々と、心には烈しい懐疑の波をうって考えこんでいる範宴少僧都をのせて、牛車の牛は、使いの首尾を晴れがましく、青蓮院の門前へ返った。

きらら月夜

一

「火事じゃないか」廊下に立って、覚明は、手をかざしている。

空は、ぼやっと白かった。夜霞のふかいせいか、月の明りはさしていながら、月のすがたは見えないのだった。

「そうよな……」性善坊も、眉をよせて、

「五条あたりか」

「いや、川向うであろう」

「すると、師の房の参られたお館に近くはないか」

「離れてはいようが、心もとない。上洛中の鎌倉の大名衆や執権の家人たちが、一堂に集まって、夕刻から、師の房に、法話をうかがいたいというので参られたのだが……」

「おぬし、なぜ、牛車と共に、お待ち申していなかったのじゃ」

「でも先方で、夜に入れば、必ず兵に守らせて、聖光院へお送り申しあげるゆえ、心おきなく、帰れというし、師の房も、戻ってよいと仰せられたから――」

「万一のことでもあっては大変じゃ。ちょっと、お迎えに行ってくる」

「いや、わしが行こう」覚明が、駈け出すと、

「覚明、覚明、今夜は、坊官の民部殿もおらぬのだから、おぬし、留守番していてくれい」
性善坊はもう、庫裡の方から外へ出ていた。
町へ近づくと、大路には、しきりに、犬がほえている。しかし、空の赤い光をたよりに駈けてきたが、加茂川の岸まで来ぬうちに、火のいろは消えて、その後ろの空が、どんよりと暗かった。
ばらばらと、辻から出てくる町の者に、
「凡下、火事はもう消えたのか」
「へい、消えたようでございますな」
「どこじゃったか」
「六条の、なんとやらいう白拍子の家と、四、五軒が焼けたそうで」
「ははあ、白拍子の家か。――では、近くに、貴顕のお館はないのか」
「むかしは、存じませんが、今はあの辺り、遊女や白拍子ばかりがすんでおりますでな」
「やれ安心した」ほっとしたが、凡下のことばだけでは、まだ何となく不安な気もするし、もう、師の房の法話もすんだころであろうと、性善坊は、走ることだけはやめて、足はそのまま五条の大橋を北へ渡って行った。
橋のうえから北は、さすがに、混雑していた。いつまでも去りやらぬ弥次馬が、遊女町の余燼をながめて、
「また、盗賊の仕業か」
「そうらしいて。悪酔いして、乱暴するので、遊ばせぬと断ったところが、手下どもを連れて、すぐひっ返し、見ているまえで、火を放けて逃げおったということじゃ」
「なぜ、見ていた者が、すぐ消すなり、人を呼ばぬのじゃ」
「そんなことすれば、すぐあだをされるに決まっとるじゃないか。鎌倉衆のお奉行ですら、あいつばかりは、雲や風みたいで、どうもならん人間じゃ」
そんな噂をしあって、戦慄をしていた。

二

その夜、範宴が求められて法話に行った武家邸は、火事のあった六条の遊女町とはだいぶ距たっていたが、それでも、性善坊が息せいて行きついてみると、門前には高張をつらね、数多の侍だの、六波羅衆の鞍をおいた駒などが市をなしていなきあい、こもごもに玄関へ入って、火の見舞いを申し入れていた。
法話に集っていた人々も、火事ときいて、あらかたは帰ったのであろう。性善坊は、混雑のあいだをうろうろしながら、家の子らしい一人の侍に、
「うかがいますが」と、腰を下げた。
「こよいの法筵にお越しなされた聖光院の御門跡は、どちらにおいで遊ばしましょうか」
「御門跡？　……。おお、あのお方なら、今し方、戻られた」
「ははあ、では、もうご帰院にござりますか」
「たった今、お館の牛車に召されて」

「お供は」
「郎党が、二、三名従いて行ったはずだが、折悪く、火災があってのう、充分なお送りもできず、申しわけのないことじゃった。おぬしは聖光院の者か」
「はい」
「いそいで行ったら追いつこうもしれぬ。ようお詫びしておいてくれい」性善坊はふたたび巷へもどって往来の牛車の影に注意しながら駈けて行った。けれど、どこで行きちがったか、五条でも会わず、西洞院でも会わず、西大路でも会わない。
聖光院へもどるとすぐ、
「覚明、師の房は、お帰りなされたか」
「いいや。……おぬし、お供してもどったのではないのか」性善坊は、早口に、巷のありさまや行った先の口上を話して、
「わしは、駈けてはきたが、それにしても、もう師の房の方が先にお着きになっていると思うたが……」
「それは、心もとないぞ」覚明は、房の内から顔を出して、空を仰ぎながら、
「遅いのう」
「うム……いくらお牛車でも」
「胸さわぎがする」と、奥へかくれたと思うと、覚明は、逞しい自分の腰に太刀の革紐を結いつけながら出てきて、ありあう下駄を穿き、
「行ってみよう」と、山門をくぐった。
ひところ、叡山の西塔にもいたという義経の臣、武蔵坊弁慶とかいう男もこんな風貌ではなかったかと性善坊は彼のうしろ姿を見て思った。
東山の樹下から一歩一歩出てゆきながらも、二人は今に彼方から牛車の軌の音が聞えてくるか、松明の明りがさすかと思っていたが、ついに祇園へ出るまでも、他人の牛車にすら会わなかった。
「いぶかしい？」
「牛車に召されたとあるからは、この大路よりほかにないが」並木の辻に立って見廻していると、松のこずえから冷たいものが二人の襟へ落ちてくる。

三

性善坊や覚明が、その夜も更けるまで血まなこになって探しているのに、どうしても師の牛車も見あたらなければ、院へも帰って見えなかったのは、次のような思いがけない事故と事情が、範宴の帰途に待っていたからだった。
……
まだ六条の燃えている最中。
鎌倉者の郎党が三人ばかり、松明をいぶし、牛車の両わきと後ろに一人ずつ従いて、
「退け、退けっ」火事を見に走る弥次馬だの、逃げてくる凡下や女子供を押しわけて、五条大橋を東へこえてきたのが範宴をのせて聖光院へ送ってくる牛車であった。
川をへだてているものの、火とさえいえば、六波羅の

まえは、四門に兵を備え、出入りや往来へ、きびしい眼を射向けている。
辛くも、そこを押し通って、西洞院の辻まで来ると、鎌倉者にしては粗末な具足をつけた小侍が、
「待てっ」と、ふいに闇から槍をだした。
供をしてきた郎党は透かさず、
「怪しい者ではござらぬ、これは頼家公のお身内土肥兼季が家の子にござるが、こよい法話聴聞のために、聖光院よりお迎え申した御門跡範宴少僧都の君を、ただ今、主人のいいつけにてお送りもうす途中でござる」といった。辻警固の小侍は、
「範宴少僧都とな」と、念をおした。
「されば」明答すると、
「役目なれば――」つかつかと牛車のそばへ寄ってきて、ぶしつけに簾の内をのぞき見してから、
「よろしい通れ」と許した。会釈して、まっすぐに進もうとすると、また、呼びとめて、
「あいや、こう行かれい」と、西を指さした。
それでは廻り道になると説明すると、小侍は、一方の大路にはこよい探題の邸へしのんで賊を働いた曲者があって、討手が歩いているし、胡散な者と疑われるとどんな災難にあうかもしれぬから親切に注意するのだといって、
「それをご承知ならばどう参ろうとこちらの知ったことじゃない」と、そら嘯いた。
辻警固にそういわれるものを無用にも進みかねて、範宴の意をうかがうと、
「遠くとも、廻り道をいたしましょう、軌の入らぬ細道へかかりましたら、降りて歩くも苦しゅうはありません」
「では牛飼」
「へい」
「すこしいそげ」西へ曲がって進ませた。
その牛車と松明の明りを見送って、下品な笑いかたをして、舌を出した。すると、並木の暗がりで、
「あはははは」突然、大勢の爆笑が起って、ぞろぞろと出てきた異様な人影が、偽役人の彼をとり巻いてその肩をたたき、
「まったく、うめいや、てめいの作り声だの素振りだのは、どう見たって、ほんものの小役人だ。おかしくって、おかしくって、あぶなく、ふき出すところだったぞ、この道化者め」と、ある者は、彼の薄い耳を引っぱって賞めそやした。

四

黒い布を顔にぐるぐると巻いた背の高い男である。裁著の腰に革巻の野太刀の背にふさわしい長やかなのを横たえ、五条大橋の方から風のように疾く駈けてきたが、そこの辻に佇んで笑いあっている一群を見ると近づいてきて、
「阿呆ども、そんなところに立って、何をげたげた笑っ

ているのだ」
「あッ、親分ですか」
「並木の蔭へでも引込んでいろ。それでなくとも、六条の町の火放けは、天城四郎のしわざだと、もう俺たちの噂が、火よりも迅く迫っている」
「なあに、たった今まで、そこの並木の後ろにかくれて、親分の見えるのを待っていたんですが、そのうちに誰かが、退屈がって、通りかかった坊主の牛車を止めて、六波羅役人の真似をし、南へ行こうとする奴を西へ行けと、遠廻りをさせたもんだから、みんなうれしがって、囃していたところなんで」
「馬鹿野郎、いたずら事ばかりしてよろこんでいやがる。同じ悪戯をするならば、でっかいことを考えろ、もっと途方もない慾を持て。どうせ悪党の生涯は、あの炎のように、派手で狂おしく風のまま、善業悪業のけじめなく、したい放題にこの世の物を慾の煙の中に攫って短く往生してしまうのだ。ケチなまねをしても一生、大慾大罪の塔を積んでも同じ一生――」骨柄といい弁舌といい、この男がこの一群の頭領であって、すなわち、京の人々が魔のごとく恐れているところの天城の野武士木賊四郎にちがいない。
　四郎は部下たちへ、こうひと演舌してすぐに、
「いや、それどころじゃねえ」とつぶやいた。
　そして、西洞院の白い大路を透かしてみながら、
「もう追ッつけ来る時分だ……手はずをきめておかなくっちゃいけねえ、蜘蛛太、てめえは柄が小さいから人目につかなくっていい。五条のたもとまで行って、轅に螺鈿がちりばめてある美しい檳榔毛の蒔絵輦がやってきたら、そっと、後を尾けてこい。――それから他の者は、並木の両側にかがんで輦の行くままに気どられないようにあるいてゆけ。俺が、口笛を吹いたら、前後左右から輦へかかって、中の者を引っさらい、何も目をくれずに、淀の堤までかついで行くのだ」
「なんですか、その中の者てえな」
「後で拝ませてやる、俺が今、火事場に近い巷から見つけてきた拾い物だ、今夜、こんな拾い物があろうたあ思わなかった」
「ははあ、親分が見つけたというからにはまた、きりょうの美い女ですね」
「何を笑う。――自分を楽しませた後に、室の港へもってゆけば、大金になる女だ、しかも今夜のは、やんごとなき上臈の君で、年ばえも瑞々しく、金釵紅顔という唐の詩にある美人そのままの上玉だ、ぬかるなよ」四郎は、いい渡して、
「蜘蛛太はどこへ行った？」と見廻した。
　すると、群れのあいだから、河童頭のおそろしく背の短い男が出てきて、
「ここにいます」と四郎の顔を見上げて立った。

五

　四郎の命をうけて、蜘蛛太の小さい影が、五条口のほ

うへ駈けてゆくと、いつのまにか他の手下たちも、両側の並木の闇へ、吸われるように隠れ込んでしまう。
一人――四郎だけが辻に立っていた。
火事の煙がうすらぐと共に、世間の騒音も鎮まって、おぼろな月明りが更けた夜をいちめんの雲母光りにぼかしていた。
やがて――そう間もないうちに――五条口から西洞院の大路を、キリ、キリ、とかすかな軌の音が濡れた大地を静かにきしんでくる。
（来たな）
と、四郎は知るもののごとく知らないもののごとく、依然として、腕ぐみをしたまま辻に突っ立っていると、たしかに、彼がさっき、朱雀のあたりで火事のやむのを待っている雑鬧の中で見とどけた一輛の蒔絵輦が、十人ほどの家の子の打ちふる松明に守られながら、大路の辻を西へ曲りかけた。
すると、そこに、天城四郎が石仏のように、腕ぐみをしながら立っているので、
「しッ！」牛飼が、声をかけた。
それでも動かないので、輦のわきにいた公卿侍が、
「退かぬかっ」叱りつけると、四郎は、初めて気づいたように顔をふり向け、赤々と顔をいぶす松明に眼をしかめながら、
「あ、ご無礼いたしました」
「かように広い道を、しかも、人も通らぬに、何で邪魔な所に立っているか、うつけた男じゃ」
「実は、手前はこよい関東の方から、初めて京へ参ったばかりの田舎侍で、道にまようて、ぼんやりと、考えていたもんですから」
「退け退け」
「はい、退きますが、少々ものをおうかがいいたす」と四郎は初めて、二、三歩身をうごかして、一人の公卿侍のそばへ寄って頭を下げ、
「鳥羽へ参るには、どの道をどう参ったらよいでござろうか」何気なく方角を指さして教えていると、四郎は、その侍が胸に革紐でかけている小筥をいきなりムズとつかんで、奪りあげた。
「あっ、何をする！」と叫んだ時は、すでに彼の影は輦から九尺も跳んでこっちを見ながら、
「欲しくば、奪り回せ」と、筥をさしあげて見せびらかした。
供の家の子たちは仰天して、
「おのれ、それには、今日の御所の御宴で、姫君がさるお方からいただいた伽羅の銘木が入っているのじゃ、下人などが手にふれたら、罰があたるぞ、返やせ、返やせ！」
「はははは、ちっとも、罰があたらないからふしぎだ」
「おのれっ」
松明が飛ぶ――
ぱっと火の粉を浴びながら四郎は駈けだした。口笛をふきつつ駈けだした。悪智の計ることとは知らずに、輦をすてて、侍たちは彼一人を追いまわして行った。

六

眼のいろ変えた供の侍たちを、ほどよい所までおびき寄せて、四郎は、
「よしっ」と自分へいって立ちどまった。そして、銘木の小筥を、
「これも金になる」と、その革紐を自分の首にかけて、やおら、長い野太刀の鯉口を左の手につかみながら、追ってきた人々を睨んで、
「貴様たち、命はいらないのか。おれを誰と思う、天城の住人木賊四郎を知らないやつはないはずだが、心得のない奴には、俺が、どんな人間かを示してやる。のぞみのやつは出てこいっ」
天城四郎と聞いて、人々はぎくとしたように脚の膝ぶしをすくめたが、
「だまれっ、鎌倉衆の探題所はすぐそこだぞ。わめけば、すぐに役人たちが辻々へ廻るぞ。足もとの明るいうちに、その銘木を返せ、お姫様にとっては、大事な品じゃ」
「わはははは、役人が怖くて、悪党として天下を歩けるか。ばかな奴だ。試しに呼んでみろ、天城四郎と聞けば、役人のほうで逃げてしまうわ」
「ほざきおったな」十人もおればと味方の頭かずをたのんでいっせいに刃を抜きつらねて斬ってかかると、四郎は好む業にでもありつくように、野太刀の鞘を払って天魔のように持ち前の残忍を揮いだした。
逃げ損ねた者が二、三人、異様な声をあげて横たわった。折も折、彼らが二町も後ろに置き捨ててきた輦のあたりから、姫の声にまちがいない帛を裂くような悲鳴が流れてきた。それにも狼狽したであろうし、四郎の暴れまわる殺気にも胆を消したとみえ、侍たちは、足も地につかないでいずこへか逃げてしまった。
死骸の衣服で、ぐいぐいと刀の血をふきしごいて四郎は、肩のこりでもほぐしたように、両手の拳をたかく空へあげ、
「ははははは」何がおかしいのか独りで笑った。
するとそこへ、河童頭の侏儒に似た小男が駈けてきて、
「親分」
「蜘蛛か、どうした？」
「うまくゆきました」
「女は」
「ひっかついで、この道は、人に会うといけないから、並木のうしろの畑道を駈けてきます」
「そうか」跳ぶが如く、堤を一つこえて、畑のほうを見ていると、蜘蛛太のことばのように、一かたまりの人影が、輿でもかつぐように、肩と肩とを寄せ合って、堤と畑とのあいだを、いっさんに駈けてくる。
黙って、四郎も走る、蜘蛛太も走る、そして、四、五、五町も来るとようやく安心したもののように息をやすめて、
「おい、一度下ろせ」と四郎がいった。
露をもった草の上に、ふさふさとした黒髪と、五つ衣

の裳を流した、まだうら若い姫の顔がそっと横に寝かされた。
「かわいそうに夜露に冷えてはいけない、俺の膝に、女の頭をのせろ」と、四郎は堤の蔭に腰をすえた。

七

「どこかへ、体をぶつけやしまいな」
自分の膝に、姫の顔をのせて、琅玕のように透きとおっているその面と、呼吸をしていない紅梅のような唇元を見て、四郎はいった。
「手荒なことはしませんぜ」手下どもは、首をあつめて、その顔を見入った。
そして、仮死したままうごかない黛と、五つ衣につつまれた高貴さとに、女性美の極致を見たように茫然と打たれながら、
「ウーム……なるほどすごい」
「気だかい」
「上品だ、やはり、氏のよい女には、べつなものがあるなあ」四郎は、悦に入って、
「どうだ、俺の眼は」姫の額にかかっている黒髪のみだれをまさぐりながら、
「そこらの田に、水があるだろう、何か見つけて、掬ってこい」
「淀から舟に乗せてしまうまで、このまま、気を失っているままにしておいたほうがよかアありませんか、なまはんか、水をくれて、気がつくとまたヒイヒイとさわぎますぜ」
「しかし、淀まではだいぶある、その間に、これきりになってしまっちゃあ玉なしだ、いちど、泣かせてみたい、心配だからとにかく水をやってみろ」
「甘いなあ、親分は」一人が水を掬いに行くと、そのあいだに四郎は、
「女にあまいのは、男の美点だ、女にあまいぐらいな人間でなくて何ができるか、男の意欲のうちで、いちばん大きなものが、他人は知らず、俺は女だ。清盛にせよ、頼朝にせよ、もし女嫌いだったら天下を取ろうという気も起さなかったろう。その証拠には、あいつらが天下をとると、なによりもまっ先に振舞うのは、自分がほしいと思う女はすぐ手にかけることじゃないか、俺は無冠の将軍だ、天下の大名どものうえに坐ってみようたあ思わないかわりに、きっと、これと思う女は、手に入れてみせる」そこへ、土器の破片に、水をすくってきた男が、
「親分、水を」
「口を割ってふくませろ」姫は微かにうめいて、星のような眸をみひらき、自分をとりまいている怖ろしい人間どもの顔を悪夢でも見ているように見まわしていた。
「生きている」四郎がつぶやくと、手下どもが、どっと腹をかかえて笑った。その声は、雲間から吹き落ちた天飈か魔のどよめきのように姫のうつつを驚かしたに違いない。姫は、ひいっ――と魂の声をあげて、四郎の肩を突きのけて走りかけた。

「どこへ行くっ？」四郎は、裳をつかんで、
「姫、もう諦めなければいけない、落着いて、俺の話を聞け」
「誰ぞ、来て賜も」姫は、泣きふるえた。
黒髪は風に立って、姫の顔を、簾のようにつつんだ。

八

それよりは少し前に清水坂の下を松原のほうへ曲がって、弥陀堂の森からさらに野を横切ってくる二つの人影がある。
師の範宴の帰途を案じてさまよっている性善坊と覚明のふたりで、
「覚明、あれではないかな」
「どれ？」
「むこうの畷」
「ほ、いかにも」
「松明の明りらしい」野を急いでゆくと、果たして、牛車に三、四人の郎党がつき添って西へ向って行くのであるが、どうやら道を迷っているものの如く、自信のない迷者の足どりが時折立ちどまってはしきりと不安な顔をして方角を案じているのである。
「うかがい申すが――」不意に、こう覚明が声をかけると、車のそばの眼がいっせいにふり向いて、
「何かっ？」と、鎌倉ことばで強くいった。
「車のうちにおわすのは、もしや聖光院の御門跡様ではござりませぬか」すると、簾の内で、
「おう」と、範宴の声がした。
「お師様」性善坊はそばへ駈け寄って、宵の火事さわぎや、諸処を探し廻ったことを告げ、
「なぜ、いつもにもなく、かような道へお廻りなされましたか。これでは、いくらお迎えに参っても、分るはずはございませぬ」
「いや、西洞院から東の大路は、なにやら、六波羅に異変があって、往来を止めてあるとのことで……」と、送ってきた従者が答えると、性善坊は、不審な顔をして、
「はて、あの大路は、つい先ほども幾たびとなく、師の房を探すために往還りしたが、なにも、さような気配はなかった」
「でも、明らかに、役人が辻に立っていて、そう申すので、やむなく、並木からこの畷へ出てきたが、馴れぬ道とて、いっこう分らず、困じ果てていたところ、お弟子衆が見えられて、ほっといたした」
「ご苦労でござった」と、覚明も共に、礼を述べて、
「これから先は、吾々両名でお供して帰院いたすほどに、どうぞ、お引取りねがいたい」
「では、牛車はそのまま召されて」
「明日、ご返上申します」
「いや、雑色をつかわして、戴きに参らせる、それでは、お気をつけて」送ってきた鎌倉者の侍たちは、牛飼も連れて、そこから戻ってしまった。
おぼろな野の中に牛車をとめて師弟は、宵の火事のう

わさだの、法筵の様子だのを話しあって、しばらく春の夜の静寂に放心を楽しんでいたが、やがて、覚明は牛の手綱を握って、
「兄弟子、そろそろ参ろうじゃないか」
「行こうか。――急に安心したせいか、すっかり、落着きこんでしもうた。牛は、わしが曳こう」
「いや、わしのほうが、馴れているぞ」覚明は、もう先に歩いていた。つづいて夜露に濡れて汚れた軌が重たげに転りだす。
そして、およそ三、四町ばかり元の道へ引っ回して、並木の入口が彼方に見えたかと思うころ、覚明は、足をとめて、空の音でも聞くような顔をした。

九

「……耳のせいかな？」と、覚明がつぶやくと、
「なんじゃ」性善坊も立ちどまった。
するとこんどは明らかに、田か、野か、ひろい夜霞の中で笛のさけぶような女の声がながれて行った。
「あっ……」車廂へ、簾をあげて、範宴も遠くを見ていた。何ものかをその眼が見とどけたらしく、
「不愍な……」といった。そして、
「あれはまた、里の女が、悪い者にかどわかされてゆく泣き声ではないか。鎌倉殿の世となって、世は定まったようにうわべは見ゆるが、民治はすこしも行きわたらず、依然として、悪者は跳梁し、善民は虐げられている」
眉をひそめて嘆かわしげにいったが、とたんに、覚明は、手綱を、牛の背へ抛って、
「救うてとらせましょう」すぐ走って行った。
性善坊は、師のそばを離れることは不安だし、覚明ひとりではどうあろうかと、しばらく、佇んだまま見ていたが、おぼろな中に消えた友のすがたは、容易に帰ってこなかった。
「人を救うもよいが、覚明は、勇に逸るのみで、一人を救うがため千人をも殺しかねない男じゃ、性善坊、見て参れ」範宴も、心もとなく思われたか、車のうちからそういった。
「では、しばらくお一人で」いい捨てると、彼の体も、弦から放たれたように迅かった。堤のすそを流れる小川を跳んで、まだ冬草の足もとに絡みつく野を、いっさんに走ってゆく。
行くほどに、やがて、罵る声だの、得物を打ちあう音だのが、明らかに聞きとれてきて、雲母月夜の白い闇を、身を低めて透かしてみると、覚明法師ただ一人に、およそ、十四、五名の魔形の者が諸声あわせて挑みかかっているのだった。
「助勢に来たぞよ、覚明」近づきつつ、性善坊は、身を挺して、悪人たちの中へ割り入ろうとしたが、その時、突として横あいに傍観していた一人の男が、野中の一本杉の根本からついと彼の前へ寄ってきて両手をひろげ、彼をして、覚明の助勢をすることを不能にさせてしまった。
「おのれも、賊の組か」前に立った人影の真っ向へ拳

をかためて一撃をふり下ろすと、相手は、飄として、身をかわしながら、
「てめえは、性善坊だな」
「やや」
「天城四郎を忘れはしまい」
「オオ、何で忘れよう、おのれとあっては、なおゆるせぬ」
「邪魔をすると、気の毒だが、命がないぞよ、常とちがって、今夜の仕事は、大事な玉だ」
見れば、一本杉の根もとには、彼らがここまでかついで走ってきた姫の体が、要心ぶかく縛りつけてある。その姫の顔には、声を出さないように、猿ぐつわが噛ませてある。

十

正義を踏んで立つ背には仏神がある。
「南無っ」といって性善坊は武者ぶりついて行った。
どこの女御かわからぬが、この悪人の餌にさせてはならぬ。今もって、悪業を行とし、京都を中心に近畿いったいをあらし廻る浄土の賊天城四郎の贄にさせてなろうかと、相手の正体を見、被害者の傷々しい姿を見ると、彼の怒りはいやが上にも燃えて、
「南無っ」組んで倒さんとすると、四郎も満身を怒肉に膨らませて、
「うぬっ」
「南無っ」
「うぬっ」死力と死力とでもみあううちに、仏神の助勢も、この魔物の悪運には利益も施す術なく見えて、
「あっ――」といったとたんに、性善坊の体は、大地へめりこむように叩きつけられていた。四郎はすぐ跳びかかって、
「どうだ、この野郎」馬乗りになって、彼の体に跨がり、短刀をぬいて、切先を擬しながら、
「ふだんから望んでいる西方浄土へ立たしてやる」すでに刺されたものと性善坊が観念したときである、彼方の大勢を、ただひとりの腕力で、蜘蛛の子のように蹴散らした太夫房覚明がふと振向いて、
「おのれっ」投げたのは、彼が、賊の手下から奪って賊を痛めつけていた金輪の嵌った樫の棒であった。
あたったら四郎の頭蓋骨は粉になっていたろう、四郎はしかしハッと首を前へかがめた。棒が、ぶうんと唸って背なかを越してゆく。それと、性善坊が足をあげて下から彼を刎ね返し、また、覚明が駈けてきて、四郎の肩をつよく蹴ったのと、三つの行動が髪一すじの差もない一瞬だった。
（しまったっ）というような意味のことばを何か大きく口から洩らしながら、四郎の体は、性善坊の上を離れて、亀の子のように転がったが、そこで刎ね起きたり、土をつかんだりするような尋常な人間ではなかった。蹴転がされると、そのまま、自分の意地も加えてどこまでもごろごろと転がって行って、四、五間も先へ行ってから、

ぴょいと突っ立ち、
「やいっ、範宴の弟子ども」と、こなたを見ていうのだった。
「よくも、邪魔をしたな、忘れるなよ」呪詛に満ちた声で、こういい捨てると、まるで、印をむすんで姿を霧にする術者のように、影は、野末へ風の如く走って行った。

十一

「女性、もうご心配はない」
「吾々は、聖光院の者じゃ、お供達もおわそうに、どう召された」
「負って進ぜる、背におすがりなされ」二人のこういう劬わりの言葉さえも、姫の耳に、はっきり入っているかどうか、姫は気もなえて、ただ、向けられた覚明の背を見ると、わなわなと顫きつつ、しがみついた。
二人は師の房の牛車のそばまで戻ってきて、
「お待たせいたしました。やはり、参らねば一人の女性が、悪人の贄になるところでした」範宴は、車からさしのぞいて、
「どこのお方か」
「まだ訊いてみませぬ」
「供の人でもおらぬのか」
「いるかもしれませぬが……見あたりません」
「いずこまで戻るのやら、負うても参れまい、わしが降りてやろう」
「お師さまはお歩きになりますか」
「うむ……」もう、範宴は足をおろしていた。姫は、疲れきった意識の下にも、何か、気がねをするらしく見えたが、覚明の背から、車のうちに移されると、初めて、真に安堵をしたらしく、
「ありがとうぞんじまする」微かにいってまた、
「西洞院の並木までゆけば輦もあり、供もいるはずでございますから……おことばに甘えて」
「お気づかいなさるな」牛車はすでにゆるぎ出した。範宴は、なにか空想に囚われていたらしく、牛車が廻りだしたのに驚いたかのような容子をした。そして、それに添って歩みだした。
しかし、姫のいう並木まで来ても、姫の従者は誰もいなかった。ただ一輛の蒔絵輦が、路ばたの流れの中へ片方の軌を落して傾いでいた。
「誰も見えんわ。女性、お住居はいずこでおわすか、ことのついでにご門前まで送ってとらせようと師の房が仰せられる。いず方の姫君か、教えられい」覚明が、車のうちへいうと、
「月輪禅閤の息女です」と、かすかに裡でいう。
「えっ」驚いたのは、覚明や性善坊ばかりではない、範宴も意外であったように、
「では、あなたは、月輪殿のご息女……するとあの玉日姫でいらっしゃるか」
「はい」だいぶ落着いたらしく、はっきりと姫は答えた。
「やはり……仏天のおさしずじゃった……道に迷うたの

も、吾々が師の房をさがし求めて行きあわせたのも……。なんと、ふしぎじゃないか」性善坊は覚明と顔を見あわせて、そういった。

青蓮院の僧正の姪にあたる姫の危難を、僧正のお弟子にあたる師の房が救うということは、そもそも、どうしてもただの偶然ではない。仏縁の他のものではない。ありがたい大慈の奉行に勤めさせていただいたものであると、二人は、涙をながさないばかりによろこび合った。

十二

月輪の里まで送って行くつもりであったが、姫を乗せた牛車が四、五町行くと、彼方から一団の焔と人影とが駈けてくるのと出会った。

人々は、手に手に松明をかざしていた。また、太刀だの、長柄だの、弓だのを携えていた。そして此方の牛車を見かけると、

「怪しげな法師、通すな」と取り囲んで騒めいた。性善坊は、疾く察して、

「もしや、おのおのは、月輪殿のお召使ではありませぬか」

「さればじゃが……そういうところを見ると、おぬし達は、姫ぎみの身について、なにか存じているところがあるに相違あるまい。姫は、どうしたか、存じ寄りもあらば教えてくだされい」

「その玉日様ならば、これからお館へお送りしようと考えてこれまで参ったところです。おつつがなく、牛車のうちにおいで遊ばされる」嘘かと疑っているらしく、初めは、そういう性善坊の面を睨みつけていたが、やがて、前後の事情をつぶさに訊かされたうえ、姫のために車を与えて、車の側に歩行しているのは聖光院門跡の範宴であるときかされて、月輪家の人々は、大地へ手をつかえて、

「知らぬこととは申せ、無礼の罪、おゆるし下さいませ」

「これこそ、あらたかな御仏の御加護と申すものでございましょう」

「館のおよろこびもいかばかりか……」

「いずれ改めてご挨拶に出向きまする」

「ああ、ほっとした」

「ありがたい」と、いってもいってもいい足りないような感謝の声をくりかえして、人々は、姫の側近くに集まった。覚明は牛の手綱を渡して、

「では、確かに、姫の身は、お渡しいたすぞ」

「はい。……それでは」と月輪家の者が代って曳いた。姫は、車の裡から、

「この車まで、いただいては」と、遠慮していった。

「どうぞ、そのまま」範宴は、姫の顔を、前よりも鮮やかに見た。

姫は、涙でいっぱいになった眸で、頭を下げた。その黒髪の銀釵はもう揺れだした軌に燦々とうごいていた。召使たちは、何分にもお館の心配を一刻もはやく安んぜねばと急ぐように、車の返却や礼のことばは明日改

めてとばかり先を焦いて曳いて行った。
　廻る輪の光を迅く描いて、軌は白い道に二筋の痕をのこして遠ざかった。キリ、キリ、と朧な闇に消えてゆく車の音に、範宴は、いつまでも立ちすくんでいた。おそろしい力が、今自分の信念もいや生命までも肉と魂とを引き裂いて胸のうちから引っ張ってゆくのではないかと気づいて、慄然と、われに回った眼で、雲母曇りの月を探した。

牡丹の使い

一

　冷たい円座に身を置き、冷たい机に肱をよせ、範宴は何かの筆を執っていたが、その筆を投げるようにおいて眼をとじた。眉に一すじの針が立つ。
　かろく頭をふりうごかしている。そしてまた、筆を執った。
「……」無我になろうとする、無想の境にはいろうとする、写経の一字一字に、筆の穂に、あらゆる精をこめて――雑念を捨てて――
　怖いような横顔であった。筆の軸にかけている指の節々にさえ異様なものがこもっているように見える。
「……少僧都様、御門跡様、御写経中を恐れいりまするがちと申し上げまする」
　坊官の木幡民部である。最前からうしろに両手をつかえて機を見ているのであったが、容易に範宴の耳に入らないらしい。――で、少しすり寄って畏る畏るこういうと、
「何か」と、範宴は顔を向けた。きっと射るような眼を向けた。
「お客殿に、あまり永うお待たせ申し上げておりますが」
「誰が？」と、考えるようにいう。

これには民部もちょっと意外な面指を示した。花山院の公達がいつぞやの僧正の件についての礼に来ているということはもう半刻も前に取次いであるのに――と思ったが、もういちど改めて、
「花山院の御公達が見えられて、先ほどより、お客間にいらっしゃいますが」
「そうそう、そうであったな」
「お通し申し上げましょうか」
「いや、待て。……今日は範宴、何とも体がすぐれぬゆえにと――ようお詫びして帰してくれい」
「は……。ではお会いなさいませぬので」
「何とも、会いとうない」やむを得ず民部は退がってゆくのであったが、いつに似気ないこともあるものだと思った。客に接するのにこういうわがままなどいったことのない範宴である。それに、この数日来というものは、語気にも霜のようなきびしさと蕭殺たる態度があって、ほとんど人をも近づけぬ烈しさが眉にあらわれることがある。
（師の君は、近ごろ、どうかなされている）それは民部のみが感じるのではない。性善坊もいうし、あの神経のあらい覚明でさえ気づいている。
いや、気づいていることは範宴自身が誰よりも知っていた。そして、こういう自分の焦躁を、自ら省みて口惜しいとも浅ましいとも思い、あらゆる行に依ってこの焦だちを克服してしまおうと努めるのであったが、意識すればするほどかえって心はみだれがちになり、あらぬもののほうへ囚われてしまうのであった。
こういう現象は、つい七日ほどまえの夜からであった。あの夜以来、範宴の眸にも、心にも、常に一人の佳人が棲んでいた。追おうとしても、消そうとしても、佳人はそこから去らなかった。そしてある時は夢の中にまで忍び入って、範宴の肉体を夜もすがら悩ますのであった。

二

一日ごとに春は熟れてくる。
範宴は狂わしい眼で外を見た。聖光院の庭は絢爛な刺繍のようだった。連翹のまっ黄いろな花が眸に痛い気がする。木蓮の花の白い女の肌にも似た姿が意地わるい媚のように彼には見えた。
何を見ても触れても、甘酸っぱい春の蜜を湛えている自然である。蜂も、鳥も、猫も、恋をしていた。
（人間もその自然の下にあるものなのに）範宴は自分に宿命した自分の秘密を、時には、不幸な胎児のように不愍に思うことがあった。
絶対に、この世の光を浴みさせることのできない秘密の胎児――生れでる約束をもたずに出命した暗闇の希望――こういう煩悶に彼は打ち勝とうとすればするほど人格の根柢から崩されてしまうのだった。
「玉日……」思わず口の裡でこう呼んでみて、せめてもの心遣りにすることすらあった。熱い息の中で、
「玉日……」と、声なくいってみるだけでも幾らかの苦

悶のなぐさめにはなる気がしたが、とたんに、自己のすがたを振向いて、聖光院門跡範宴という一個の人間を客観すると、

「ああ……」手を顔におおって濟然と御仏のまえに罪を謝したくなる。

つよい慚愧と、自責の笞に、打って打って打ちぬかれるのだった。誰か、杖をあげて、

（この外道）と肉の破れるほど、肉体がいまわしい空想や欲望を抱く知覚を失ってしまうほど、打ちすえてくれる人はないものかと思う。

彼は、泣いて、仏陀のまえへ走った。そして、ほとんど狂人のようになって誦経した。また、一室にこもって凝坐した。

（だめだ）脆くも、そういう叫びが雑念の底からもりあがる。

磯長の太子堂に、叡山の床に、あの幾年かの苦行も今はなんの力のたしにもならなかった。瞼をとじれば瞼の中に、心をしずめればその心の波に、空を仰げば空の藍の中に、玉日の姿が見えて去らない。

「いっそ、僧正におうち明けして、僧正のお叱りをうけようか」とも考え、また、南都の覚運僧都のもとへ行って、ありのままに訴えてみようかとも幾たびか思い悩んだが、聖光院の門跡という地位がゆるさないことだし、彼自身の性格としても、自分の力で解決しなければならない問題だと思うのであった。そして、この苦悶を克服することが、自分を完成するかしないかの境目であると

も考えていた。いかにして、精神が肉体に克つか、信仰が肉体を服従させきれるか、彼は、二十八歳の青春と旺なその血液とを、どうしたら灰のような冷たいものにさせてしまうことができるかということにこの三月を懊悩の裡に暮していた。

三

東山に雲が低く降りていた。白く乾いた道に、埃が舞う。

「おお、ひどい」どこかの奥仕えらしい中年の女が、立ちすくんで、裳を押えた。落花を捲いてゆくつむじ風が、女の胸にかかえている一枝の牡丹の葉を拷るように強く吹いた。

「童女、童女、傘をさして賜も」風がすぎると、もうぱらぱらと雨がこぼれてきた。

柄の長い飴色の大きな傘を、童女はうしろから翳しかけた。

「聖光院はまだかの」

「あの白い壁の御門がそうではありませんか」雨は小粒になって、風も止み、雲も切れて、湯気のような春光の中に、どこかで啼く鶯の声がしていた。

童女は、濡れた傘をたたんだ。そして聖光院の式台へかかって、

「おたのみ申します」といった。

坊官が出てきてひざまずいた。そして、女の姿と、牡

丹の枝に眼をみはった。女はしとやかに、
「私は、月輪禅閤の奥に仕える万野と申すものでございますが、御門跡様へお目にかけたいとて、室咲の牡丹を一枝、お姫様の思し召で持参いたしました。また、この御書面は、お父君の禅閤様からのお墨、御返事をいただけますれば倖せにぞんじます。……どうぞよしなに、お執次ぎを」と、牡丹に添えて、書面をさしだした。
坊官は、木幡民部へ、その由を告げた。民部は、月輪からの使いと聞いて、
「どうぞご休息を」と、万野を控えの間へ通した。
「これはお見事な……」と、牡丹をながめて民部はつぶやいた。花はまだ開いていないが、雨に濡れた葉の色が美しかった。
さっそく、範宴の室へ、民部はそれを持って行った。範宴は、姫からの贈り物と聞いて、眉に、よろこびをたたえた。
書面を一読して、すぐ、返事を認めた。そして使いを帰した後で、みずから白磁の壺をとりだして、それへ牡丹を挿けた。
「……あの人の姿のままだ」白磁の水ぎわから生々と微笑んでいる枝ぶりをながめて、範宴はその日の憂鬱を忘れていた。
禅閤からの書面には、いつぞやの礼を尽してあった。玉日姫の難を救ってもらったことが、父として、どれほどかありがたくうれしかったものとみえて、その礼の使者は今日ばかりではない、青蓮院の僧正を通じたり、直接に家臣を向けてよこしたり、あらゆる感謝の意を示したのであるが、範宴にとっては、今日の牡丹の一枝ほどうれしい贈り物はなかった。
しかし、それでもまだ禅閤は恩人に対しての誠意があらわしきれない気がするものと見えて、今日の書面では、ぜひ、青蓮院の僧正と共にいちど館へ遊びにきていただきたい、なにも、ご歓待はできないが、月輪の桜も今がさかり、月もこのごろは夜はわけても佳し、折から、めずらしい琵琶法師が難波から来て滞在しているから、平家の一曲をお耳に入れ、姫や自分からも、親しく、先ごろのお礼を申しのべたい、という懇切な招きなのであった。
範宴は、いずれ僧正と相談の上で――と返辞したが、心はむろん行くことに決めていた。

峰阿弥がたり

一

吉野の桜はもう散って吹雪になっていたが、月輪の里の八重桜は今が見ごろだった。

雪のように梢に積んだ厚ぼったい花は、黄昏と共に墨のように黒ずんでいたが、やがて宵月の影がその花の芯にしのび入るころになって、万朶の桜が、青銀色な光をもって、さわさわと乾いた音を風の中に揺り動かした。

「こよいの客人は、姫の生命の親じゃ、粗略がないように」と、月輪の館では、禅閤を初め、家族たちや召使の端までが、細かい気くばりをもって、門を清掃して、待っていた。

やがて、一輛の牛車に、二人の客が同乗してきた。むろん、範宴と慈円僧正である。

「お待ち申しておりました」家臣は、列を作して迎えた。禅閤は式台まで出迎えて、

「ようこそ」と、みずから客殿へ導いてゆく。

前の摂政太政大臣であり関白の重職にまでなった禅閤兼実の住居だけあって、その豪壮な庭構えや室内の調度の贅沢さには眼も心も奪われるような心地がする。

範宴は、数年前に、師の僧正と一伴に、いちどここへ来たことがある。その時は、見るかげもなく痩せおとろえて旅から帰ってきたばかりであったし、自身もまだ名もない一学徒にすぎなかったので、ここの家臣たちは誰もその時のみすぼらしい若法師がこよいの主客であるとは気がついていないようであった。大勢の侍女たちと一緒に何か遊戯をしている所へ来あわせたので、自分にも眼かくしをせよといって困らせられたことを範宴は今ぼんやりと思い出していた。

その姫はまだ顔を見せなかった。たくさんな燭のあいだを美しい人々が高坏やら膳やら配ってまわる。みな一門の人々であろう、範宴と僧正とを中心にして十人以上の人々がいながれている。

「酒は参られるのか」まず主客の範宴に、禅閤からすすめると、範宴は、

「いただきませぬ」と、はっきりいった。

僧なのでむげにはすすめなかった。僧正はすこしは嗜む口なのである。それに、主の禅閤とは骨肉の間がらではあるし、ここへ来てはなんのわけ隔てもない。

「範宴のいただかぬ分は、わしがちょうだい申そう、こよいは、お志に甘えて、堪能するほど飲もうと思う、帰りには、車のうちまでかいこんでもらいたいものだ、それだけは頼んでおくぞ」僧正はそういっていかにも帯紐を解いたような容子で杯をかさねはじめた。禅閤も、今は隠棲して老後をたのしむ境遇である。こういう夜は、客よりも、彼自身の生活のふくらみであった。

「青蓮院どの、それでは、主客顛倒というものではないか」

「なに、範宴には、料理をたんと出しなされ」
「範宴御房、どうぞ、お箸をおとりくだされい」
「いただいています、僧正のこういう自由なお姿を見ているのは、私として、何よりの馳走に存じます。また、羨ましくも思われます」
「ははは、範宴が、何かいうとる」僧正はもう陶然と酒仙の中の人だった。

二

「姫が見えぬが」とやがて僧正が訊ねた。月輪禅閤は、侍臣をかえりみて、
「まだ支度か。客人もお見えになっているのに」と、つぶやいた。
「お伝えして参りましょう」侍臣の一人が立って行った。花明りの廊下の彼方へその姿が朧になってゆく。廊には、燈の入った釣龕燈が幾つとなく連なっていて、その奥まった一室に、姫は、帳を深く垂れて、化粧をしていた。
　湯殿から上がったばかりの黒髪はまだ濡れていた。童女たちは、柳裏の五つ衣を着た彼女のうしろに侍っていいつけられる用事を待っていた。侍女の万野は、姫の黒髪の根に伽羅の香を炷きこめたり、一すじの乱れ髪も見のがさないように櫛をもって梳いたりしていた。
　やがて、姫は鏡を擱いた。そこへ廊下からの声が、
「お姫様。叔父君にも、お客人にも、お待ちかねでございまする」万野がすぐ、
「はい、もううかがいます」と答えた。
　窓から花明りの風がさやさやと流れこんで姫の黒髪を乾かした。
「お姫様、それでは」促すと、玉日は、静かに立って童女や万野と連れだって自分の部屋を出た。そして、客殿の輝かしい明りが池殿の泉に映って見えてくると、玉日は、立ちどまってしまった。
　万野が振り向いて、
「お姫さま。どう遊ばしたのですか」姫は、欄の柱へ顔をかくして、
「何やら、面映ゆうなった」
「まあ……何の面映ゆいことがございましょう、お内輪の方ばかりですのに」
「でも……」
　龕のうえから、白い花びらが一ひら蛾のように舞って、姫の黒髪にとまった。万野が手をのばす前に、姫は自身の手でそれをとって、指の先で、弄びながら、
「私が、ご挨拶に出ないでもいいのでしょう。お父君から、ようく、お礼をいってくださるから」
「そんなことはなりません」万野は、姫が、いつものわがままを出して、駄々をこねるのであろうとばかり受け取っていたので、ややうろたえた。
「さ……参りましょう。なんで、こよいに限って、そんなにお羞恥み遊ばすのですか」
「羞恥むわけではないけれど……」

「では、よいではございませぬか」手を引くようにして、万野と姫とが、客殿のほうへ近づいてゆくと、眼ばやく、叔父の僧正が、
「見えられたな、さあ、ここへこい、わしのそばへ」と、さしまねく。
僧正の眼には玉日姫が、いつまでたっても、無邪気な少女としか見えなかった。今になっても、時々範宴を子ども扱いするように、玉日をも、幼子のままに見て、膝の上へでも乗せそうに呼ぶのであった。

三

僧正が戯れでもいわなければ誰も座を和らげる者はなかった。姫のひとみは眩ゆいものの前にあるように、絶えず俯向きがちであるし、範宴も口かずをきかないのである。ことに、かんじんなその主客が酒をたしなまないので、禅閤は興のしらけるのを懼れるように、しきりとみずから銚子を取って杯に心づかいをしたり、世事のうわさなどを持ち出して話題を賑わせたりしていたが、やがて側の者に何かささやくと、その家臣は館のどこからか一人の盲目法師の手をひいて、この客殿へ伴ってきた。
「これは近ごろ名高い琵琶の上手で、峰阿弥という法師です」禅閤が、紹介わせると、盲目の峰阿弥法師は与えられた席へ琵琶をかかえてもの静かに坐って、黙然と頭を下げた。

もう五十に近かろう、長い眉毛には霜がみえる、深く窪んでいる眼は針のように細い線があるだけだった。盲人の癖として、首をすこし傾げたまま、客の容子や灯りの数や自分の位置がどういう辺りにあるかを勘で見ているらしい面持ちであった。
「峰阿弥といわれるか」僧正がたずねると、
「はい」声のほうへ頭を向けて、
「かような貴人のおん前に召されまして、冥加のいたりでございます」
「酒はのむか」
「むかしは過ごしましたが、このごろは……」
「眼はすこしも見えぬようじゃな」
「業の報いでございましょう」
「幼少から？」
「いいえ十年ほどまえからでございました。いかなる病毒をうけましたやら、ほとんど一夜のうちに眼がつぶれ、その当座はまったく世の中が闇になったように思いましたが、馴るるに従って不便もわすれ、いささか好む琵琶を弾いて生業といたし、こうして花に月に、風のままに召さるる所へ参じては御宴の興をたすけ、独りになれば琵琶を妻とも子とも思うて暮しておりますと、いっそ、眼が開いて五慾の煩悩にくるしんでいた時よりは、心も清々としてよいように存じまする」
「ははは、ようしたもののう」禅閤は、範宴へ向って、
「何ぞ曲をのぞんでやってください、唐曲も弾くし、平家も詠う」峰阿弥は、手を振って、

「なかなか、唐曲などは」と謙遜した。
範宴は、曲を聴くこともものぞましいが、もっと、この法師の身の上やまた眼が見えぬ人間の生活が訊きたかった。
だが峰阿弥は、客が倦まぬうちにと思ったか、琵琶をかかえ直して、はやくも絃を調べにかかる。四絃のひびきがすると、端居していた侍たちだの、次の間にいた童女や召使までが、席へ近くにじり寄って皆耳をすましていた。

四

琵琶の海老尾に手をかけて、四つの絃の捻をしきりと合せていた峰阿弥は、やがて、調べの音が心にかなうとやや顔を斜めに上げて、客か主人かが所望の曲をいい出すのを待っているような容子であった。そこで、僧正が問を入れた。
「法師」
「はい」
「そちの琵琶は唐作りのように見ゆるが、やはり舶載物か」
「いいえ、古くはございますが、日本でできたものでございましょう、銘に、嵯峨とありますゆえに。それに、唐琵琶は多く胴を花梨でつくりますが、これは、日本の黄桑でございます」
「日本に琵琶の渡ってきたのは、いつのころからであろう」
「さよう――」峰阿弥は、見えない眼をしばたたいて、
「よう、存じませぬが、推古朝の時代、小野妹子が隋の国から持ってきたと申す説、また、仁明帝の御世に遣唐使藤原貞敏が学んで帰朝したのが始まりであると申す説と、いろいろにいわれておりまするが、いずれにしても天平のころからあったということは光明皇后から東大寺へ御寄進なされました御物を拝見いたしましても頷けることでございましょう」
「本朝で、琵琶の上手といわれる人は」
「ただ今申しました藤原貞敏卿や宇多源氏の祖敦実親王、また親王の雑色で名だかい蝉丸」
「当代では」
「畏れ多いおうわさでございますが、高倉天皇の第四の王子、上皇とおなり遊ばしてからは後鳥羽院と申し上げているあの御方ほどな達人は先ずあるまいと下々の評でございまする」禅閤兼実はうなずいて、
「いかにも」と相槌をうった。
峰阿弥は問わず語りに、
「私などが存じあげた沙汰ではございませんが、世評によると、後鳥羽院と仰せられる御方は、よほど秀才だと申すことです。新古今和歌集の撰を御裁定あそばしたり、故実の講究にもおくわしく、武道に長じ、騎馬と蹴鞠はことのほか優れておいで遊ばすそうで、わけても下々の驚いているのは、画なども、ふつうの画工などは遠く及ばないものだと申すことでございます。――その後鳥羽

院はまた、御気性のすぐれておいで遊ばすだけに、今は亡き源義経公とは、たいそうお心が合って、勤王の志のあつかった義経公を、いまだに時折、ご側近の方々へ嘆きをお洩らしなさるそうでございます。そして、頼朝公の亡き後の北条一族の専横を御覧ぜられ、武家幕府の奢りを憎み給い、やがては鎌倉の末路も久しからずしてこうぞよという諷刺をふくめて、前司行長に命じて著作らせましたのが、このごろ、しきりと歌われる平家の曲でございます。上皇はそれを、性仏という盲人に作曲させ、民間へ流行らせることまでお考えになりました。その御心は忠孝な道の節義を教え、奢る者の末路を誡められましたものでございまして、私の語るところも、実はその性仏から教えをうけたものでございますゆえ、まだ糸にも歌にも馴れぬ節が多いので、さだめし、お聞きづらかろうと思うのでございます」

五

燭が白々と峰阿弥の肉の削げた頬にゆらいでいた。人々は、平家の曲が近ごろ流行していることは知っていたが、後鳥羽院のお心にそういう深いお考えがあることは、誰も初めて知ったようであった。

僧正は側にいる範宴をさして、

「これにいる少僧都範宴は、今峰阿弥のいうたように、後鳥羽院より格別な寵遇を賜うた義経公とは復従兄弟の間がらじゃ、院の御心を偲び参らせ、また、こよいの主客とは由縁もふかい平家の曲を聞くのは何よりの馳走に思う。法師どの、早速に語られい」といった。

源家の英雄児義経とここにいる範宴とが、復従兄弟にあたるということは、禅閤のほかは皆初めて聞いたらしく、主客の端厳な姿に改まった眼を、そっと向けあうのであった。

つつましく燭を羞恥んでいる姫のひとみさえ、深い睫毛の蔭から眩ゆいものでも見るように範宴の横顔を見たようであった。

峰阿弥は、

「かしこまりました」一礼して、撥を把り直した。

四絃をぴたと構え、胸を正しくのばすと、芸の威厳といおうか、貴人の前も忘れたような彼だった。このとき位階や権門も芥のようなものでしかなかった。しいんとしずまる人々を睥睨して――

祇園精舎の鐘のこえ
諸行無常のひびきあり
沙羅双樹の花のいろ
生者必衰の理をあらわす

おごれるもの久しからず
ただ春の夜の夢のごとし
猛き人もついには亡びぬ
ひとえに風のまえの塵のごとし

遠く異朝を訪ぶらうに
秦の趙高
漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山

旧主先皇の政にもしたがわず
楽しみを極め
諫めをも思い入れず
天下の乱れをも悟らずして
民の愁いも知らざりしかば
みな久しからずして
亡じにし者どもなり
近く本朝を慮るに……

峰阿弥の顔は怪異にさえ見えてきた。撥は四絃を刎ね、黄桑の胴を恐ろしい力でたたいた。彼はもう芸以外に何ものも天地にないように額に汗を光らしてくる。聞く人々も彼の芸の中にひきこまれて我に回ることができなかった。かの白楽天の琵琶行の話を湓江の湖上に聞くような気持に囚われていて、その間は無心な燈火さえうっとりとしているのであった。

間近くは六波羅の入道
さきの太政大臣平の朝臣
清盛公と申しし人のありさまこそ
詞も筆おろかよ、及ばね
その先祖をたずぬれば
桓武天皇第五の皇子
葛原親王九代の後胤——

曲はすすみ、夜は更けて行った。人は在るが無いように。ただ、落花の影だけが、暗い蔀の外に舞っていた。

六

平家の曲の大部を残らず弾くとすれば、夜の明けるまで語ってもとても語り切れる長さではない。峰阿弥はその大部なものの要所だけを縫って、たくみに、平家一門の華やかな一時代と幾多の儚い物語とを綴って、やがて屋島から壇の浦の末路へまで語りつづけてきた。

二位殿は日頃より
思い設け給える事なれば
にぶ色の二つ衣うち被き
練袴のそば高くとり
神璽を脇に掻ばさみ
宝剣を腰にさし
主上をいだき参らせて

聞き入っている人々はいつか眼に涙をいっぱい持っていた。蒼い海づらに逆まく渦潮のあいだに漂う弓だの矢だの檜扇だの緋の袴だのがいたましく瞼に映ってくるのであった。そして驕り栄えた一族門葉の人々の末路を悲しいとも哀れとも思ったが、涙はその人々にこぼしているのではない、等しく同じ運命の下におかれている人間というものの自分に対して無常を観じ、惻々と、おのれの明日が考えられてくるのであった。

われ女なりとも
敵の手にはかかるまじ
主上の御供に参るなり

御志おもい玉わん人々は
急ぎつづきたまえやと
舷へぞ歩みいでられける
発矢と、撥の音、聞くものの魂をさながらに身ぶるいさせた。大絃は嘈々として急雨のように、小絃は切々として私語のごとしという形容のままだった。そして、四つの糸が突然断れたかと思われるように撥が止まったと思うと、曲は終っていたのである。峰阿弥はまるで雨を浴びたように濡れた顔になっていた。撥を鳩尾に当てたまま、大きな息を全身でついている。
「ああ」誰とはなく皆がいった。われに回った顔なのである。口々に、峰阿弥の技を称めたたえた、しかし、峰阿弥はにんやりともしなかった。
「拙ない曲を、永々とおきき下さいましてありがとう存じまする。それでは、退がらせていただきます」早速、琵琶をかかえて席をすべってゆく。いかにも恬淡な容子がいっそう人々にゆかしく思われた。
彼が去って人々が雑談に入りかけたので、範宴はそっと席をぬけて庭へ出ていた。庭は境がわからないほど広かった。花明りの下、彼はまだ恍惚と立っていた。背に樹の幹が触れたのでそのまま体を凭せかけていた。ちらちらと眸のまえを白いものが遮って降る。手を出してもつかまらない幻のような気がするのである。心のうちにもそれに似た幻影が離れなかった。姫の黛である、唇である、黒髪である、どうしても打ち消すことができなかった、熱病のように何か大きな声でものを口走りたいような衝動がじっともの静かに立っている彼の内部を烈しく駈けまわっているのだった。
「是空、是空」うめくようにいった唇はすぐ歯で噛み縛っていた。拳を二つの胸にくみあわせて苦しげに闇へ闇へ歩みだしている。たった今、無常観の大部な話を聞いたばかりの耳は彼自身でもどうにもならない若い血で、火のように熱くなっていた。
「あっ……。粗忽をいたしました。どなた様か、ごめん下さいまし」先で早くも避けたが、肩の端をぶつけてしまった。それは、盲人の峰阿弥の声であった。

七

「オ、最前の琵琶法師どのか」
「あなたは、範宴僧都でいらっしゃいますな」
「そうです」
「よい所でお目にかかりました。ちと、話したいと思いますが」
「私に」
「いけませんか」
「なんの、どうせこうしている折です」峰阿弥は寄り添って、
「私の今夜の琵琶は、お聞きづらかったでございましょう」
「そんなことはない、興に入って聞いていた」
「いや、そうでございますまい。盲人の勘にはわかりま

す。また、自分の撥にかけている糸の勘でもわかります。今夜の主客は、時々そら耳になっておいでした。食らえども味を覚えず、聴けども音をわきまえず、そういう空虚を時々あの席で感じたのでございます。これは、私の弾じる琵琶の技が足らないかと思って額に汗をして語りましたが、やはりそうではありません。芸味はすべて聴くもの聴かす者が一体になった時に神に入ります。あなたのお気持が、時々ぷつんと糸の切れたようにどこかへ離れて行く。――どこへ行くのであろうと私はひそかに心で探っていました。すると、私のいた左側から留木の薫りがぷうんと漂ってまいります。あなたは確かに玉日様に心を奪られていたに違いありません」

「……」範宴はぎょっとして盲人の窪んだ眼を見直さずにはいられなかった。何とずばずばとものをいう法師だろうか、いやそれよりも怖いような六感の持主ではあるまいか。範宴は、足をもどしたくなった。すると峰阿弥は、

「おかけなさいまし」と、築山の裾にある亭の柱を撫で、そこにある唐製の陶器床几をすすめた。

「どうぞ」何か、抑えられているようで拒まれない。峰阿弥は自分も腰をおろして、

「ありがちなことでございますな、私なども……」といった。そして、しばらく回顧的な面持ちを傾げていたが、

「実は、わしも、元からの琵琶法師ではありません、これでも以前はしかるべき寺院におり、仏典にも一心を没し、南都の碩学にもつき、自身苦行もいたして、禅那の床に、求法の涙をながしたものでございましたが、ちょうど、御房ぐらいな年ごろでござった。ふと、半生の苦行を女一人に代えてしもうてな、女犯の罪に科せられ、鞭の生傷を負って寺を追われましたのじゃ。それ幸いと、加古川の辺りで、その女と、女の死ぬ年まで暮しましたがの、さて、過ぎ越し方をつらつらと憶うに、女ある道、女なき道、どう違いがあろうか、有るとしているのは仏者のみではございませんか。――それ、一路を難行道といい、一路を易行道という。おかしい」峰阿弥は独りでわらう。そして話も独り言のように、

「わしが眼をつぶれたのを見て、世間は罰だというが、わしの身にとってみれば、黒い浄土じゃ、安心の闇とも いえよう。眼が明いているうちは、なし難い道を踏もうとし、踏み辷っては悶えたが、今では、すべてが一色の盲目、坦々として易行道をこうして歩いていますのじゃ……はははは」

八

峰阿弥の顔に、一ひらの落花がとまった。手で払いのけながら、

「思うても御覧じ、どうして、この始末のわるい人間が生身のまま化仏できよう。あのまま寺にいて、僧正になっていたのと、加古川の片田舎で女と暮したあげく女に死にわかれて、盲目の芸人となって、座興の席を漂泊うてあるく今の境遇と、どちらがよいかは分らぬが、わし

は、決して、後悔はしていない。――すこしも現在に不満と迷いはない。身を難行苦行の床におき、戒律の法衣に心をかためていた時よりも、かえって、今の身の方が仏身に近い気持がいたすのは一体どうしたものでしょうな。年のせいとばかりは考えられません。まだまだ、眼こそ見えぬが、これでもまあ、女性の側にいればわるい気はしない男なのですから」

範宴は一句の答えもし得なかった。しないでも峰阿弥は問わず語りに喋舌りつづけるので気づまることはないが、余りにも怖ろしい話だった、というて耳を蔽おうとすればかえって自身を偽く気もちが自身を責める、忌わしいようで真があり、醜いと感じながら自分にもある相だった。

「ははは、破戒僧のくり言は、これくらいにしておきましょう。そこで、御房のお考えはどうあるの？　……仏教も近年はずっと進んできたようですから、御房のような新知識から、わしらは学びたいと思うているがの。黒谷の法然上人など、なかなかよいことを申されるそうな、北嶺の駿馬といわれる聖光院範宴どのの女性に対してのお考えをうかがいたいものじゃ。あるいは、戒律についてのご信念でもよろしい……」意地悪く追求するのである。範宴には、当然今日まで血みどろになって築いてきた信念の砦があった。厳根のように堅固に、あらゆる心機をここに征服するだけの備えもかたまったつもりであるが、なぜか、この一盲人の極めて平俗な問に対して、きっぱりと、邪弁の舌を断ってみせるような言葉が胸に出てこなかった。

「また、自分のことに回るが、わしが御房の年ごろには、畏れ多いが、仏陀の御唇も女に似て見え、経文の宋文字も恋文に見えた。夜が待ち遠い、秘密が慕わしい、抑止ようとかかっても、血は、鉄の鎖も断る――。そんなふうであったものじゃが、御房のような秀才はちがうものでございましょうかな、あの無言の山、冷たい寺の壁、そこにそのお体を封じこめて、なんの迷いも苦しみも覚えませぬのかの。……ないとは申されますまい。その覚えのないような人間になにができる。釈尊もまた一度はくぐられた焔ではありませぬか。女魔、女魔、焔の踊りをする女魔にとりつかれたような覚えはございませぬかの」僧侶が念慮しても罪悪といわれることを、この盲人は掌へのせて差し出すように平気でいう。範宴は胸苦しくなった。

「法師っ」

「はい」

「おん身は一体それを聞いてどうしようというのですか」

「べつに……」と、峰阿弥は首すじを伸ばして下を見た。

「……どうするということもございませんが、あなたさまに、後でお渡しいたす一品をさるお人からお預りしておりますので、事のついでに、うかがって見たまでございまする」

九

「しかし、頼まれはしたものの、その品を、お渡しいたしたほうがよいものか、悪いものか、迷わざるを得ません……範宴僧都、あなた様には、思いあたることがございましょう」

「私に？　……誰から？　……」

「お麗しいお方です。いやよしましょう、わしの半生がそうだったからあなた様にもそうなれとはおすすめできない。人間の運命は、その人間自身が作るものだ、わしはその品を、ここへ置いてゆきますが、それを手に触れるなともお受けなされとも、わしは申しません。あなた様ご自身でとくとお決めなさるがよろしい」峰阿弥はそういって袂の蔭から一葉の短冊を取り出した。なにやら書いたほうを下にして床几のうえに伏せた。石を拾って風で飛ばないようにするまでの綿密な心づかいをこの盲人はして立ち去ろうとするのだった。

「お待ち下さい」範宴は呼びとめて訊ねた。

「おん身の峰阿弥という名は、琵琶を持ってからの仮の名でしょう。その以前、寺においでのころはなんと仰せられていたお方か、さしつかえなくば聞かせて欲しい」

「さよう……。恥の多い前身の名を申し上げるは面映ゆいが、実は、わしは、興福寺にいた教信沙弥でおざるよ」

「あ……教信」聞いたことがある、奈良ではかなり有名な人だ、学徳兼備の僧のようにいわれていたこともある、それが、奈良の白拍子との噂が立って放逐され、播州の加古川で渡し守をしているということが世間の笑い話になってから「加古川の教信沙弥」といえば堕落僧の代名詞のようになって落首や俗謡にまでうたわれたものだった。その教信沙弥がこの人なのか――範宴はそう聞くとこの盲人が前にいったことばももう一応考え直してみなければすまないような気持がしてきた。

だが峰阿弥のすがたは、白いものの飛ぶ朧な樹蔭をもうとぼとぼと彼方へ去っていた。そして、彼のいた床几のあとには、一葉の短冊が謎のように置き残してある。

眼の見えるつもりでいた自分は、眼の見えない峰阿弥になにもかも見透かされていた。彼のいう通り自分は今おそろしい心の顛倒を支えている。今日までの信念をあくまで歩みとおすか「加古川の沙弥」の行った道を歩くか、その岐路に立っている。

「？　……」小石に抑えられている短冊は、鶺鴒の尾のように風におののいていた、誰の文字か、何が書いてあるか、範宴の心も共におののくのであったが、彼は、（見まい）と心でいった。彼の強い情熱をより強い智慧の光がねじふせるように抑止した。

（触れてはならぬものだ）彼は亭を出た。自分に打ち勝ってさらに高い自分へ帰着した爽やかな心もちへ夜風がながれた。すると、亭のうしろにでも潜んでいたのであろう、すぐその後へまわって短冊を手に持って、追ってくる女があった。呼びとめる声にふり向いてみると、そ

れは姫に附いている侍女の万野であった。
「範宴様、せっかくのお歌でございますのに、後でお捨て遊ばすまでも、どうぞ、見てあげて下さいませ」
短冊を範宴の手へ無理に持たせると、万野は、逃げるように、落花の闇へかくれてしまった。

白磁を砕く

一

自分の血液のなかにはいま、かつておぼえない破壊がはじまっている。範宴はありありとそれを感じる。この二、三日の頭の鈍痛などがその一例である。夜の熟睡を久しく知らないのもその現象である。眸の裏がいつも熱い、思索力はすっかり乱れてしまった。これが自分かと改めて見直すほどいろいろな変化が肉体に見出されるのだった。
（この叛逆に負けては）と、強く意思してみる。しかし数日前の月輪家の招宴から帰った後の状態はさらに悪くなっている、刻々と、意思は蝕まれ、信念は敗地へ追いつめられて行く、どうしようもない本能の圧す力である。
ぼんやりと空虚なものが今日も彼を坐らせていた、他人が見たらどんな鈍い眸をしているだろうと、自身ですらも思う。で、病気と誰にもいってある、来訪者にも勿論会うことは避け通しているし、第一仏陀の前に出ることが怖かった。朝の勤行だけは欠かせないものと本堂に坐るのであるが、面をあげて仏陀の顔を仰ぎ得ないのだ。やましいものの塊りのように、自分をそこに置いているに耐えられなくなる。

（ご無理をなされてはいけません、どうぞ、ご病床にいて下さい。あなた様お一人のお体ではない、幾多の学徒や衆生の信望を負って、師とも、光とも、仰ぎ慕われていらっしゃるおん身。彼こそは、と五山の大徳や一般の識者からも嘱目されておいで遊ばす大事なおん身です）周囲の者は極力そういって、静養をすすめる、まったくの病人と案じているらしい。そして、性善坊も覚明もともども憂わしげに朝夕彼の恢復を祈念しているのだった。範宴はそれを知るがためにいっそう自責の悶躁につつまれた、彼らに対してすら師として臨む資格はないように思われてくる、あらゆる周囲のものに対して範宴は今まったく裸身になって手をついてしまいたい。

（この身は偽瞞の塊りである）と。

白磁の壺に、牡丹は、青春の唇を割りかけている、先ごろ、月輪の姫から贈られた室咲のそれである。悩ましい蠱惑の微笑をこの花は朝に夕べに、夜半の枕へも、投げかけていた。

その笑みはまた、誰かの笑みとあたかも似ている、ふくらみかけた花弁の肌も香いも。

ゆうべもその香いにあくがれて自分は越ゆべからざる墻を越えた、一昨日の夜も越えた、世の中の人の誰も知らないことを自分はした、知る人は、姫と、姫の侍女の万野と、自分だけであった。

ちょうど曇っていた、星すらも眼をふさいでいた、闇の中に捨ててきた跫音は完全に消されている、誰も知ろうはずはないのだ、けれど待て、三人のほかに秘密を知った者はほんとうにいないのだろうか、あるような気がされてならない、どうしてもまだ他に何者かが一人知っていると思う。

それは誰だろうと範宴はさっきから考えるのだ。するとそれはやはり自分の中にいるものだということが分った。

（自分は二つの人間になっている）と気がついたのである。相反している二つのものが、範宴という一個の若い肉体をかりて、心のうちで、血液のうちで、すさまじく闘っているのがわかる。そして肉体の主は沈湎として終日、白磁の牡丹にうつつな眸を消耗したまま蒼白い秘密の夢をみているのだった。

二

東山の夜は早く更ける。三十六峰のふところは星の光も届かないで宵闇がふかい。怖いと思い出したら足も竦んで出ないのであった。

万野は姫の心を思うと、その怖さも忘れていた。女ごころは女でなくては理解できないものとして、彼女はあえてこの暗い夜をものともせず姫のためにすすんで、秘密な使いに出てきた。――その使いを果たした後で、姫が、あの可憐しい眸にうれし涙をたたえ、掌を合せて拝まんばかりによろこぶがために、（もし、お父君に知れたならば、自分がすべての罪を負って）とまで、悲壮な覚悟すらしているのであった。

それにつけても男心ほど浅いものはないと思う。次の夜には必ずまた訪れようとかたく誓っていたのにその人はあれきりついに姿を見せないではないか。一昨日も姫は夜もすがら眠らずに待ちこがれておいでになった。ゆうべも泣いて夜を明かされた。女ごころは女が知る、はたの見る眼のほうが辛い。

（憎いお人）と、彼女は、そこの築地を見あげて、うらめしく思う。

聖光院の土墻は、万野の眼に鉄壁のように見えた。穢土の闇と浄界の闇とを厳めしく境しているのだった。

「？　……」礫をほうって耳をすましている、なんのこたえもない、二つめを投げた、そして、築地の下に、被衣の影をじいっと佇ませていた。

葉柳の露が、蛍のようにきらきらと光る。たしかにこの前はこの辺から今のように抛った礫へすぐ答えがあったにと思う。さてはやはり世の浮かれ男のようにこの前のことばも嘘であったかもしれぬ、真にうけて痩せ細るほど信じている姫はいよいよご不愍である。もし、そういうことでもあるならば礫のみでは済ませない、明らさまに表門をたたいて男の酷薄を責めなければならない。

万野は、焦々しつつ、もう一度と小石をひろった、小石は柳の葉をちらして、遠い築地の中へ音もなく落ちた。薄情な男へこぼす涙のようになんの反応もありはしない。

「どうしよう」当惑した顔が被衣のうちで嘆息をつく。このまま空しく帰るとしたら姫の泣き沈む姿を見なければならない。あの傷々しい失意の眸が涙でいっぱいになって物も得いわずに打ち伏すかと思うと、万野は帰るにも帰れない心地がするのだった。

彼女は半刻も立ちすくんでいた。夜露が被衣をじっとりと寒くしてくる。もう人を憚る自制心すらなくなった。今度は、廂を目がけて石を抛った。つづけざまに幾つか投げた。

すると、築地の裏戸がそっと鳴った。紛れもない人影である。万野は、自分の恋人でも見たように走り寄って、

「範宴さま」恨みで胸がつまった。

その人は黒い布を頭からかむっていた、唖のように物をいわない、絶えずなにものかに趁われるように、またなにものかを趁うように、足を早めて彼女の先を歩いてゆく。

三

暁を惜しむまで話しても語り尽きないものと人はいうけれど、二人の場合はそうでなかった。会えば相見た満足だけでいっぱいになってしまった。万野が気をきかしていなくなっても同じである。なんの話をするということもなく、もちろん燈灯をともしては館の者に気づかれる惧れがあるから、明りもない閨戸の帳を空ろにしては、蔀の下近く端居したまま夜半の冷たいものがじっとりと五つ衣の裳と法衣の袖に重たくなるのも忘れ果

てて、相思の胸のときめきをお互いにただじっと聞き合っているに過ぎない二人なのであった。

――あなたは春が好きですか、それとも秋がおすきですか。書はなにを読みますか。古今のなかでは誰を好みます、万葉のうちではどの歌を愛誦されますか。――などと他愛のない話をするのさえも、なにか息ぎれを覚えて、痛いほど心臓がつまって、乾いた唇は思うように意示もできない。

ことに姫はうつ向いたきりといってよいほど顔を斜めに俯伏せている。どうかしてその黒髪をそっと風が越えてくると、蘭麝のかおりなのか伽羅なのか範宴は眩いを覚えそうになった。加古川の沙弥のささやきが臆病な耳もとで嘲うように聞える。まざまざと偽瞞の法衣につつまれた獣心の相を自身の中に発見する、万葉の話も、春秋のうわさも実はうわの空なのだった。勇猛で野性な血液が烈しい抗争を起して本能を主張する、いかなる聖経も四囲の社会も無視してかかる猛悪な精神が彼の全霊を炎々と焦くのだった。

「……」しかし、範宴その人の外表は水そのもののような冷たい相をしていた。対坐している愛人の細かな神経をもってしても彼の内部を針の目ほどものぞくことはできない。また、決して許そうともしない範宴なのである。鉄で作られた虚偽の函のように範宴の膝はいつまでも痺れを知らずに真四角なのである。そして彼はついにその虚偽を生れながらに生みつけられている人間であったという今さら追いつかない嘆涙にさんさんと魂を濡らして、そこに恋人のあることも忘れ果てる。

とこうする間に鶏の声が聞えてくる、万野は自分の寝屋の妻戸をそっと押して、別れ難かろう二人に別れを促しにくるのであったが、そこへ来てみると初めのままの位置に初めのままの居住いを硬くして黙り合っている二人なので、自分があんな苦心をして一方を誘ってきたのは一体なんのためかと歯がゆくもなり焦々と思うのでもあったが、夜が白みかけては一大事を醸す惧れがあると、姫にかわって次に来る夜の言質をとって、そっと壺のうちを脱けて裏門の戸を開け、夢遊病者のような黒い人影を見送るのだった。

すると、そういう幾度かの事実をいつの間に知っていたものか、あるいは、偶然その晩に限って運悪くぶつかったものか、範宴の後ろをしばらく尾けてきた夜固めの警吏が、

「こらっッ」大喝を浴びせておいて不意に後ろから組みついた。

帛の裂ける音がぴっと鳴った。警吏は法衣の片袖だけをつかんで前へのめっている。

おそろしく迅い跫音はもう闇のうちへ遠くかくれていた。

四

「待てっ、待たんかっ」警吏は忌々しげに喚いて追いつづけてゆく。けれど四、五町も駈けると彼自身がそうし

てまで捕えるほどの者かどうかを疑って舌打ちを鳴らした。
「盗賊ではないらしい、また、公卿の女部屋へ忍んだ女犯僧だろう、そんな者を捕まえていた日には限りがない」警吏は額の汗を、手につかみ忘れている法衣の片袖でこすった。そして汚い物でも投げうつように傍らの流れへ向って捨てようとしたが、すぐその崖の上から凄まじい滝水のように鳴って落ちる琵琶の音に気がついて、
「誰だっ、今ごろそんな所で」と仰向いて呶鳴った。
しかし、琵琶の主は答えようはずもない、その音を聞けばわかるように身も魂も四絃の中に打ちこんでいて、虚空の音が彼か、彼が虚空の音か、その差別をつけることは至難であるほどな存在であった。
「ははあ……例の峰阿弥法師がまた独り稽古をしているのだな、あいつも変り者だ、銭を与えても嫌だといえばどんな目にあわせても弾かないし、そうかと思うと、誰も聞いていない真夜中の山に入ってあの通り独りで弾いて独りで夜を明かしていたがる」何の罪科もあるまいに、警吏はその琵琶の音のあまりに楽しげなのが嫉ましくでもなったか、おおウい――と声をあげて再三呼ばわるのに、いっこう答えがないので、石を拾って松林の丘を見上げながら抛り投げた。
ちょうど一曲を弾き終ったところであるとみえ、石が届くとしばらくして撥が止んで、こんどは丘の上から、
「誰だっ、つまらない悪戯をする奴は」
「篝屋の警吏だ」
「警吏ならなおよろしくない。なにがゆえに、この法師の琵琶をおとめなされますか。人家に近い所でもあるなら悪かろうが」
「ちと訊ねることがあるから再三呼んでいるのに、返辞をせぬから石を投げたのだ。その丘へ、今し方、一人の僧侶が逃げこんでは行かなかったか」
「人にものを訊くのに石を投げて訊くという作法がありましょうか。そんな者は、この丘へは上がって参りません」
「それならよいが……」警吏は歩みかけたがまた、
「おい峰阿弥。おまえは先ごろ、月輪公の御宴に招かれたそうだが、あの館には美しい女がたくさんいるだろうな。……待てよ、そう訊ねても盲人ではわかるまい。無駄ごとばかりする晩だ、よし、月輪公の下部の者をたたき起して将来を誡めておいてやろう」
「もしお警吏、つまらないことに、おせっかいはおよしなさい。誡めたからとて、この世に忍び男と、忍び男を待つ女性が尽きるはずはございません」
「堕落僧が、堕落僧を庇っている。おお夜が明けるぞ」
「もう明けますか。……ああそういえばすこし疲れた、わたしはこれから楽々と無我の眠りに遊べるが、人間に与えられたこの甘睡すらできずに悶々と今日の空の下に圧されて暮す人もあろう。そうだ、黒谷の法然上人の御口授を思いだした。――南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」
丘の上の破れ果てた御堂の縁に、彼が易々と木の葉虫の

ようにごろりと横になったころ、一方の警吏は、月輪家の裏門の戸をどんどんとたたいていた。

五

おとといも昨日もまた今日も、聖光院の人々は師の房の姿を見なかった。針ほどの光も忌むように一室へ閉じ籠ったきりの範宴は、その中から鋭い声でいったのである。

「誰もここへ参ってはならぬ。私のゆるさぬうちに入ってきてはなりません」坊官の木幡民部は捨てておかれないというように、性善坊や覚明と膝ぐみになって憂いの眉をよせ、

「医家を迎えて、診ていただいては――」と嘆息にいう。

「お怒りになろう」二人は首を振った。

「この身に、医や薬師はと、先ごろもきついお顔で仰っしゃられた。吾々には推し計られぬご気質なのじゃ、また、そのご気質でぶつかったものを解くなり頷くなり打ち砕くなりしてしまわぬうちは、よい加減にご自身をなだめて生きてはおられぬお方なのだ。心配になることはご同様だが、まあもうしばらくなされるままにして見ているより他あるまい」誰よりも幼少から師の房の性質を知っている性善坊がいう言葉なので、それに従うほかはないと民部も覚明も黙ってしまう。民部は師の房にかわって寺務の一切を見ておるのでそれに心をとられて落着いてもいられなかった。覚明の方は楽天的なところがあって、

「そうだとも、われらよりは深い思慮で遊ばすことだ。つまらぬ憂いは、かえってご思念の邪げになる」すると黄昏の寂とした物静かな空気が、伽藍の高い天井から圧しるように下りてきて、若僧が内陣の釣燈籠に灯をくばりかけたころであった。まだほの白い方丈の庭面にあたって、何か、大きな物音がしたのである。つづいて、性善坊の名を呼ぶ声がする、幾度もつづけざまにする、紛れもなく師の房の声だった。

「はいっ、はいっ」性善坊は何ごとかと思いつつ駈けていた。一室の戸はあいているが範宴の姿は見えない。ふと見るとその範宴は庭に立っていた、足もとにはちょうど今日あたりがいっぱいに開いていたと見える白磁の壺の牡丹が、その壺ぐるみ庭石に抛たれて微塵に砕けているのだった。

「あっ……どうなされました」

「性善坊か」範宴の声は静かだった、壺と牡丹を微塵に砕いた人とはみえない、夕明りの下に立って、凄いほど蒼白くその顔は見えたけれど、雲の切れ間を見つけて一縷の光を投げかけているような眉にも見える。

「わしの部屋の隅に竹の杖があろう」

「杖ですか」

「そうだ、苦行の旅に、この身と共に、幾年も歩いたあの竹杖。それを持って庭へ下りてくれ」

「どうなさるのですか」いわるるまま、杖を持ってくると、範宴は大地に坐っていた。ひざまずいてさし出すと、

範宴はその杖を性善坊に持たせて、首を垂れていった。
「性善坊、おん身を仏陀と思い参らすゆえ、おん身はかりに仏陀となれ。わしは仏子にあるまじい心病にとりつかれ恥かしい迷路を幾日も踏み迷うていた、犯さねどすでに心は汚罪を冒したに等しい。――打ってくれい。その竹杖で打たれたら、過去の苦行が甦えってこよう。皮肉の破れるまで打て、わしを師と思わず打て、仏陀のお怒りをその杖にこめて――」

霧の扉

一

あらゆるものを断ちきってまっしぐらに歩み出した闇であった。範宴は四、五町ほど駈けてから聖光院の方を振りかえった。
門の潜り戸を開けて、その前に立って見送っていた性善坊の姿もすでに見えない、しきりと天地の寂寞を翔り立てる暗い風があるばかりだった。白い小糠星は有明けに近い空をいちめんに占めていた。
「ゆるせ、おまえにも苦労ばかりかける……」
詫びないでいられないものが、範宴の胸を突きあげてくる。まだ僧門に入らない幼少のころから起居を共にしてきた性善坊には、骨肉以上な恩愛をさえ抱いているのにその性善坊に対しては、省みてみると、ほとんど、安心というものを与えた遑がなかった。彼はなにか、自分のこういう不羈な性格の人間に常識的な支えをしてくれるために生れてきたような男に思われる、自分のために彼を犠牲にしてきたことが実に多かったことを範宴はしみじみと今ここで感じる。
「しかし決して、わしはそれを無駄にはしないぞ」掌を合せていう心持になるのであった。――同時に、青蓮院の僧正に対しても、そこにいる弟の尋有にも、また、世

を遁れて竹林の奥深くに一切を断っている養父の観真に対しても、ひとしく心からな謝罪の念が湧いてこずにはいない。

「後ではさだめし、不浄者とお思いになりましょうが、範宴はもいちど自分を鍛ち直して参ります。決して、敗れて遁れるのではありません、世評を怖れて隠れるのでもございません、また、罪の発覚を知って姿を消す次第でもないのです、ただ、この一身一命を奉じて、もいちど大蔵の闇へ閉じこもって、御仏の膝下へ確乎とすがりつきたいのです、おゆるしください、しばらくのあいだ」

この夜半すぎに聖光院を捨ててそもいずこへ走ろうとするのか、範宴の身にはすでに聖光院門跡の纏う綾の法衣や金襴は一切着いていなかった、一笠一杖の寒々とした雲水のすがたであった。

そうして聖光院を捨てて出た彼の心は、性善坊だけには、いい残してきた。彼にはすべての秘密もうちあけて――また後々のこともたのんで。

木幡民部と覚明には、遺書を認めておいて来たのである、どんなに彼らは後で驚くだろう、悲しむだろう、しかしそういう目前の感情は、範宴の今の大きな覚悟のまえにはあまりに小さい問題だ、もっともっと大きなものすら踏み越えてゆく決心なのだ、女々しくてはこれからの万難の一つも越えられまいと、自身を叱って自身の心をかたく鎧う。

「そうだ、夜の明けない間に――」歩み出そうとすると、彼の法衣のすそを引くものがあった、大きな黒い犬である。

「しっ」範宴は追い払って駈けた。

犬は、寝しずまっている世間へ告げるように吠えたてる。彼は、犬の声にすら趁われるような気持がした。

まだ暗い加茂の瀬にそって、彼は足のつづくかぎり急いだ。幸いにも、京の町では誰にも咎められなかった。そしてやがて、息を喘いて上ってゆくのは叡山の麓だった。彼の心には常にこの山があった。この山は範宴にとって、心の故郷なのである。

二

鷺のように風に吹かれて佇んでいる二人の女性があった。雲母坂の登り口なのである。ここから先は女人の足を一歩もゆるさない浄地の結界とされているのだ。

千年杉の鬱蒼とつつんでいる登岳道も、白々と夜明けの光に濡れていた。

「姫さま、お寒くはございませぬか」

自分のかぶっている被衣を一方の女性へ羽織ってやろうとする。これを拒んでいるのは上臈笠に顔をかくしている姫と呼ばれた人であった。年ばえもうら若いし、足もとや体つきまでがいかにもこんな所のあらい風には馴れぬらしい嫋かな姿なのである。

「いいえ」と、微かにいう。

「そなたも、寒かろうに」

「なんの私などは」どこの女性でどういう身分の者な

のであろうか。今ごろ、まだ夜も白みかけたばかりなのに、里から登ってきたとは思われぬし、なおのこと、上から降りてきたのではあるまい。思うにこの若い二人はゆうべすぐそこの赤山明神の拝殿にでも一夜の雨露をしのいだに相違ない。四明ヶ岳の壁にはまだ残雪の襞が白く描かれているが、この辺りではもう寒いというには足らない春のことである、その証拠にはあちらこちらの沢や谷で鶯の啼声がしぬいている。二人の肌に限ってそう寒いのは夜もすがら戸を立てぬ拝殿の縁の端で山風にさらされていたためにちがいない。

それにしても誰を待つのか、麓からここへかかる人を待ちうけているものらしく、一方の召使らしい女は絶えず眼をくばったり、うち悄れた姫を励ましたり、その気づかいというものは並たいていな侍女のよくすることではなかった。

「あっ……姫さま」麓の方を眺めていたその女が、突然、こう大袈裟なくらいにいったのは、待ちかねていたその人の影がやがて認められてきたのであろう、ばたばたと姫のそばへ走り戻って、

「ごらんあそばせ、たしかに、あのお方でございまする」袂をひいて、指さすのであったが、そう聞くと姫はにわかに自分を省みて、無表情なうちにもありありと狼狽のいろを示して、

「人違いではありませんか」というと一方の女は、

「いいえ、なんでこの私が」と、自信をこめていう。

間もなく低いうねり道を回って来るその人なる者の姿が見えた。なにか一念に誦経の低声を口に含んでわき眼もふらずに登ってくるのだった。近づいてみれば風雨によごれた古笠に古法衣を身に纏ったきりの範宴少僧都だった。聖光院門跡の栄位と、あらゆる一身につきまとうものを、この暁方かぎり山下に振りすてて、求法の一道をまっしぐらに杖ついて、心の故郷である叡山に登ってきた彼なのである。

そこに二人の女性が自分を待っていることすら眼に映らなかった。すたすたと前を通りかけたのである。姫は、その姿を見るとはっと胸を打たれてしまった。胸につまるいっぱいの涙と羞恥ましさに樹蔭へかくれてしまうのである。侍女はそれを歯がゆがるように、自分だけ走り出して、

「範宴さま」と、彼の前に立った。

「あっ……」杖をすくめて立ちどまった網代の笠は、微かに打ちふるえた。

三

「あなたは万野どのですな」しばらくしてから範宴の低く洩らした声であった。

「びっくりなさいましたでしょう」

「驚きました……」ありのままに範宴はいった。樹蔭には姫のすがたまで見えるのである。どうして自分の登岳を知ったのであろうか。笠に潜めていた彼の面は、それをとれば狼狽にかき乱されていたに違いなかった。

「きのう、さるお人から、ふと大乗院へお籠りの由を、ちらとうかがいました」
「？　……」そういう人があるはずはない。自分の心の裡で独りで決めたことだ。それを打ち明けた性善坊にしても、つい昨日話したことである。月輪へまで、それが伝わるわけはなかった。
「ご不審でございましょう。実はそれを、教えてくれたのは、いつかの琵琶法師でございます。――私と姫さまとが、あまりに傷ましいといって、こう申しました。それほど、範宴御房に会いたいならば、これから、叡山の登り口の赤山明神に参籠なされ、この二、三日のうちには、必ず範宴御房がそこを通るに相違ないと仰っしゃいました」
「あの加古川の沙弥が、そう申しましたか。……あの法師は怖ろしい眼あきじゃ」
「その峰阿弥のいうには、おそらく、範宴御房の行く道は一つしかあるまい。それは叡山だ。きっと叡山へ登ると信念をもっていいました……で、お姫様と心を決めて、お待ち申していたのでございます。私たちも、ふたたびお館へは帰れませぬ。また、世間のいずこへも戻る家はございませぬ。どうか、不愍と思し召すならばお姫さまを連れて御山へ登ってくださいまし、お縋り申しまする」
万野は、膝を折って泣き伏した。姫も、樹蔭で泣いているのである。女のつかんでいる強い力が範宴の足を大地へ釘で打ったようにしてしまった。昏惑と慚愧とが、いちどに駈けあらした。ここまでは澄明を持ちこたえて聖域へ攀じのぼる一心に何ものの障碍もあらじと思い固めて来た決心も、いったん心の底に響きをあげて埋地のような陥没を見てしまうと、もうそこに藁一本の信念も見出せなかった。彼もゆるされるならば、万野と一緒に膝をついて泣いてしまいたい。いや、死ねるものなら死んだほうがはるかによいとすら思うのであった。
「もう、お館にも、あのことが知れたのでございます。世間も薄々知ったかもわかりません。姫さまは髪を下ろしても、共にと、仰せられますし……」万野の立場は苦しいものに違いなかった。いずれやがてはと覚悟していたことが余りにはやく足もとへ迫ってきたのだ。自分の行為から起ったこの問題のために苦しんでいる姫と万野とを残して、自分のみが、山へかくれて安心が得られるものだろうか。彼の道徳は自分に対して強く責めずにいられなかった。
　と、いってこの聖域へ女人を連れて上るなどということは思いもよらない望みである。叡山の高嶺はおろかなこと、この雲母坂から先は一歩でも女人の踏み入ることは許されない。帝王も犯し得ない千年来の掟として厳然たる俗界との境がここに置かれてある。

四

「姫をつれて、どうか帰ってください」自分を石の如くして、範宴はそういうよりほかなかった。頼むよりほかになかった。充分に、自己の罪と責めは感じながらもで

ある。
しかし万野は、姫をうしろに置いて、容易にそれに従おうとはしなかった。
「きっとそう仰っしゃることと前から存じてはおりました。けれど、姫さまのお可憐らしいお覚悟をどういたしましょう。姫さまはもう心の底に、黙って、死をも誓っていらっしゃいます、あなたのおことばは、そのお方に死ねと仰っしゃるのも同じでございまする」範宴には一語も返すことばがなかった。それまでに心がすわっているものかと今さら女性の一途な心の構えに驚きを覚えると共に、自分のなしたことに対する責めの重さを感じるばかりだった。
「この御山が、伝教大師のご開山以来、六里四方、女人禁制ということも、よう存じておりまする。けれど釈尊は、目連尊者の女弟子の蓮華色と申す比丘尼に、おまえこそ真の仏道を歩んだものだと仰っしゃったという話があるではございませぬか、法華経には女人は非器なりとございますが、女には御仏にすがる恵みはないのでしょうか。そんなことはあるまいと思います。女でも人であるからには」と、万野は情と理をもって迫るのだった。そして姫にもここへ来て頑な範宴の心をうごかせとすすめるように姫の方を見たが、姫は地へ泣き伏しているのみである。
「わかります、そのとおりに違いないのです。けれど――」範宴は膝を折って万野と姫の二人へいうのだった。いつの間にか全霊を打ちこめていた自分の声に気がつく。それは死ぬか生きるかのように必死なものであった。
「よく落着いて聞いてください、この御山は仏法の道場なのです、一箇の解釈で法規をやぶることはできません、それを矛盾といいましょうが、伝教以来の先人が定めおかれた大法であって、この後、何人かが、それは間違っているという真理をつかみ、その真理を大衆に認めさせない限りはどうにもならない掟です。それをも押して、姫と共に山へ上るとしましょうか、いたずらに一山を騒擾に墜し、世の罵りと物笑いをうけるに過ぎず、私はともあれ、姫のおん身は、ただ淫らな一女性のはしたない行為としかいわれますまい。さらに、お父君は元より、青蓮院の僧正、一族の方々のお困りも必然です。それもこれも皆この範宴が罪とおもえばこそ、私は死以上の決意をもって罪の償いに、この山へ参ったのです、どうか私にそれをさせてください、無限の暗黒へ落ちてゆくか、大願を貫かれるか、この一身を人間億生のために捧げてしまいたいのです。姫おひとりに捧げきれない私となっているのです。それを無情と呼ばば呼べです。玉日様、お帰りなさい、おさらばです」この人にこんな厳しいものがあったのか、こんな冷たい声も持っていたのか、霜のような、巌のような、何という人間味のない宣告だろう、万野は泪も出なくなった。

大盗篇

あられ

一

この辺りは新しい仏都をなしかけていた。

仁和寺の十四宇の大廈と、四十九院の堂塔伽藍が御室から衣笠山の峰や谷へかけて瑤珞や青丹の建築美をつらね、時の文化の力は市塵を離れてまたひとつの聚楽をふやしてゆくのだった。

鏡ヶ池には夏は蛍がりに、宇多野には秋を虫聴きに、洛中の人は自然を慕い、四季の花に月に枯野見にかこつけてよく杖をひく所であるが、わけても今年の秋から冬へ、また冬から年を越えての正月まで、仁和寺をはじめ、化蔵院や、円融寺や、等持院、この辺りの仏都市へ心から素直になって詣でる者が非常に多いといわれだしていた。

「おのずから世の推移が、人の心をこういう方へ向けてきたのじゃ」とここの人々は、それを仏教の繁栄といい、興隆といい、また復興といった。

そういえばそういわれないこともない。戦が生活であり、戦が社会の常態だった一時代はもう大きな波を通った船から振りかえるように後ろのものだった。鎌倉幕府というものの基礎や質のいかんにかかわらず人心はもう戦に倦み、ここらで本然の生活に回って静かな生活をしてみたいことのほうに一致していた。すでに国政の司権が武門の手に左右されてからは、それが平家でなければ源氏であるし、両者を不可としたところで姑息な院中政治がかえってそれを複雑にするぐらいなもので、どっちにしろ民衆の望みとは遠いものが形になるだけのことだった。民の心の底でほんとに渇くように望んでいる真の王道というような明るい陽ざしはここしばらく現れそうもないと賢者は見ている。覇道を倒して興るものはまた覇道政治だ。それならば何を好んでか全国土を人間の修羅土にして生きる心地もなく生きている要があろうか。そういう疑問が当然に疲れた人々の考えの中に芽ざしている。武士階級ほどことにそれがつよい。公卿はいつでもなるべくは現在のままで安易にありたいのだ。天皇の大民族といわれる大本の農民はほとんどそういう興亡からは無視されているので、これは幕府が鎌倉に興ろうがどうしようが今日の天気と明日の天気のように見ている——

建仁元年一月はめずらしい平和な正月だった。四民がみな王道楽土を謳歌しての泰平ではなくて、疲れと昏迷から来たところの無風状態——無力状態なのである。

そうした庶民たちが、

「寺へでも詣でようか」とか、

「説教でも聴いたら」と、洛外へ出るのだった。
したがってこういう人々が仏法へ奉じる行作は決まって形式的だった、遊山気分だった、派手だった。
山内の修復を勧進しましょう、塔を寄進いたそう、丹を塗ろう、瑤珞を飾ろう、法筵には能うかぎり人をよび、後では世話人たちで田楽を舞おう。そういうふうに仏教を享楽するのでなければ、彼らの空虚は満たされなかった。求めて来る者に対して満たし与うものを、この十四宇と四十九院の堂塔伽藍も実は何も持ちあわせていない。
しかし形の上では仏教復興は今や顕然たる社会事実だった。
時代思潮は何ものかを確かに求めていた。

二

きょうも仁和寺の附近は賑わっていた。一つの供養塔を建立した奇特な長者が、一族の者や朝野の貴顕を招いて、その棟上げの式を行い、それを見ようと集まった有縁の人々やこの界隈に住む部落の貧民たちには、銭を撒いたり米を施したりしたので、雪でも降りそうな一月の寒空だというのに、地上は時ならない慈雨のよろこびに混雑をみせているのだった。
「よいことをした。わしの家もこの功徳で何代も栄えよう」
八十に近い長者はほくほくして自分の撒いた銭を拾う群れを見ていた。何でもこの長者は戦のためにわずか一代で莫大な富を得た商人であったが、仁和寺の法筵で説教を聞いてからにわかに何事か悟ったらしく、その富の大半を挙げて今日の慈善を思い立ったのだという噂であった。
自分で蓄えた黄金のために、自分の晩年に絶えず負担と警戒を感じていた長者は、肩がかるくなったように、
「ああ、これで助かった」といったそうである。そして長者の善行を賞め称える僧や門族や知己たちに囲まれて、長者は脱殻のように老いた体を授けられつつ、仁和寺の客間へ請ぜられて行った。
「ありがたいお人じゃ」
「大慈悲人じゃ」群衆はその姿へ感謝したが、救われたのは実は長者自身だった。かつてこの長者から酷い利息をしぼられたり、この長者の爪に燈をともすような強慾ぶりを憎んで、鬼長者の何のと陰口をきいた人たちもまじっていたが、そういう過去はさておいて、人々はとにかく今の長者の行いにすっかり感激して、それも仏陀の教化であるとして、等しく法悦につつまれていた。
そういう群れの中で、誰かがふいに、泥棒っと呶鳴った。泥棒という声をきくと傍の者はすぐ自分の懐中や袖へ手をやって検めてみた。すると、せっかく骨を折って拾った銭が紛くなっていた者だの、笄を抜かれている女だの、袂を刃物で切られている者だのが数名あって、
「泥棒がいる。この中に泥棒がいる」と、あちらこちら

から騒ぎ立てた。無数の眼はついに紛れこんでいる人間を調べ出して追いかけた。群れを離れて逃げてゆく風態のわるい男が二人、鏡ヶ池のふちから山の中へ逃げこんでゆくのだった。兇器を持っていることは分りきったことなので、誰も山へまでは追っては行けなかった。

二人の悪者は山歩きには馴れているらしく、衣笠の峰づたいに千本へ出て、やがて蓮台野の枯れた萱の中を半身も没しながらざわざわとどこかへ歩いてゆく。

「寒いっ」

「ウウ寒い」悪者はそんなことしかつぶやき合わなかった。毎日の平凡な仕事をして当り前の稼ぎから帰ってくるのと変りがない。

やがて、土民の家らしい一軒の家の戸をたたいて、

「俺だ、開けてくれ」という。

野の上には雪にもならず低迷している冬雲が暮れかけていて、鳥が、風の中の木の葉みたいに飛ばされている。

「蜘蛛太か」

酒を飲んでいる炉べりの者たちが戸口へ振りかえった。

三

「蜘蛛太じゃねえ、俺だよ」外で再びいうと、

「あ、平次か」起ってきて一人が内から腐りかけている戸をがたぴしと開ける。家のうちに充満していた炉の煙は疾風のようにむうっと軒から空へ逃げて行った。

「遅かったなあ兄弟」中でごろごろしている仲間の者たちが等しくいうと、寒空に曝されてきた赤ら鼻を煤べるように炉へ向って屈みこんだ二人の手下は、

「あたりめえよ、汝たちみてえに、飲んじゃ怠けているのとは違わあ」誇るように、自分たち二人で盗んできた小銭や笄を出して、頭領の四郎のまえへ並べてみせた。

賞められるかと思って期待していると、天城四郎は眼もくれないで、

「これが仁和寺へ行った稼ぎか」

「へい、昼間仕事で、案外うまいこともできませんでしたが、それでも、撒き銭を拾ったやつの袂を切って、これだけ掻っ攫ってきたんで」

「ばか野郎っ」

呆っ気にとられた子分の顔を見すえて、四郎は酒をつがせながら、

「誰が、こんな土のついた小銭などを拾ってこいといった、仁和寺で働いてこいといったのは、今日、供養塔の棟上げをした長者が必ず寺へ大金を納めたにちがいないから、それを奪うか、または長者の親族たちが、それぞれ贅沢な持物や身装をして来ているだろうと思って汝たちにいいつけたのだ。誰が、こんなはした金を持ってこいといったか」

眼の前の物をつかんでそれへ叩きつけた。そして、おそろしく不機嫌な顔に、酒乱のような青すじを走らせて、

「やい、酒を酌げ」

「頭領、酒はもうそれだけです」
「酒もねえのか」いよいよ、苦りきって、
「なんてえ不景気なこった」と、つぶやいた。
戦がなくなってからは彼らには致命的な不況がやってきた。女をかどわかしたり民家を襲ったり、火を放けたりして、小さい仕事をしても、何十人もいる野盗の一族ではすぐ坐食してしまうのだった。それに都会の秩序がだんだんに整ってきて、六波羅の捕吏たちの追うこともきびしくなった。一頃ならば市中の塔や空寺でも堂々と住んでいられたものが、次第に洛外に追われて、その洛外にも安心しては棲めなかった。
「蜘蛛太だよ、開けてくれ」その時また、戸をたたく者があった。子分のうちの侏儒の蜘蛛太がどこからか帰ってきたのである。四郎は待ちかねていたように、
「はやく開けてやれ」といった。そして入って来た彼のすがたを見ると、
「蜘蛛か、どうだった？」
「親分、だめでした」蜘蛛太は悄れたが、
「その代りに、おもしろいことを聞き込んできましたぜ」と、怪異な顔をつき出した。

四

四郎の数多い手下のうちでも、異彩のある男はこの蜘蛛太だった。背は四尺に足らず、容貌は老人のようでもあり、子供のようにも見える。幼少から親兄弟というものの愛情をわきまえない孤児なので、生れながらの盲人が物の色を識らないように人間社会に愛というものがあることを知らないのである。残忍酷薄、生きんがためにはどんなことをやってもかまわないものだとこの男は信じて生きている。
したがって蜘蛛太でないとできない仕事があった。頭領の四郎でさえ手を下し得ない惨虐をこの男は平気でやる、また、どんな、警固のきびしい館でもこの小男は忍び込むのに困難を知らなかった。今日もそうしたことで、どこかへ仕事に行ったらしいが、稼ぎはなかったらしかった。しかしなにか耳よりな噂を聞いてきたというのである。そこで天城四郎はすこし機嫌を直して、
「ふうむ……面白いこと？　……それは金儲けになりそうな話か」
「なりますとも、金にならない話を頭領に聞かせてもつまらねえでしょう」
「その通りだ。何しろこの霜枯れだ。一仕事当てなくっちゃ息がつけぬ」
「金になるばかりでなく、復讐にもなる、いわば一挙両得なんで」
「能書はさしおいて、早くいえ」
「ほかじゃありませんが、いつか、六条の遊女町に火事のあった晩、頭領が目をつけてうまく手に入れかかった堂上の姫君があったでしょう」
「ウム、あの時の忌々しさは忘れねえ、あれは月輪の前関白の娘だった」

「こっちの仕事の邪魔をした奴は誰でしたっけ」
「聖光院範宴の弟子どもだ」
「頭領」蜘蛛太は、膝をにじり出して、
「その範宴のことですが」
「ふウム、範宴が、どうしたのか」四郎はあの時以来、彼に対する呪詛を忘れていなかった。利得の有無にかかわらず、折があったら返報してやるとは常に手下の者に洩らしていたことである。
　ところが今――蜘蛛太のいうところによると、その範宴の身辺には昨年の夏ごろから大きな問題が起っている。それは月輪家の息女と彼との恋愛問題だというのである。範宴はごうごうたる世間の攻撃に怖れをなして叡山へ閉じこもり、一切世間人との交渉を断って、彼の師や彼の弟子や、また女の側の月輪家などが、必死になって、その問題の揉み消し運動やら善後の処置に狂奔しているらしいというのであった。
「どうです」蜘蛛太は鼻をうごめかして、
「こんなおもしろい聞き込みは近ごろありますまい。ひとつその破戒坊主の範宴をさがし出して、うんと強請ってやったらどうでしょう」
「ほんとか、その話は」
「懸値はありません」
「こいつは金になる。ならなかったら範宴のやつを素裸にして、都大路へ曝し物にして曳き出し、いつぞやの腹癒せをしてやろう」
　それから数日の間、ここに巣くう悪の一群は、毎日、範宴の居所と、噂の実相をさぐることに交る交る出あるいていた。

五

「おウい、一休みやろうじゃないか」谷へ向って一人が呼ぶ。
「おウいっ」そこから声が湧いた。
　四、五人の若い学僧だ。雪が解けたので、この冬籠りのうちに焚き尽くして乏しくなった薪を採りに出てきたのである。雪に折れた枯れ枝や四明颪しに吹かれた松葉が沢にも崖にも埋まっていた。その谷間はようやく浅い春が訪れてきて、谷川の裾の方には鶯子啼きが聞え、樹々はほの紅い芽を点じてはいるが、ふり仰ぐと、鞍馬の奥の峰の肩にも、四明ヶ岳のふかい襞にも、まだ残雪が白かった。
「やあ、ここは暖かい」南向きの谷崖へ、学僧たちは薪の束を担いあげて車座になった。太陽の温みを持っている山芝が人々の腰を暖かに囲んだ。
「長い冬だったなあ」
「やっと、俺たちに春が来た」
「春は来たが……。山は依然として山だ、谷は依然として谷だ。明けても暮れても霧が住居じゃ」
「味気ないと思うのか」
「人間だからな」
「それに克つのが修行だ」

「時々、自信が崩れかかるんだ。修行修行といっても、俺たちはどうしても、抜け道を作らずにいられない。そっと山を下りて人間の空気を吸いに出ることだ。そんなことをしていたって、克つことにはならないじゃないか、ただ、矛盾の中に生きているだけだ」
「そう、むきになって考えたら、僧院の中に住めるものか、よろしく中庸を得てゆくことだ、たとえば、大乗院へ籠り込んだ範宴少僧都などをみるがよい」
「いろいろな噂があるが、あれは一体、どうしたことだ」
「おい」と、一人の背中をのぞいて、
「貴公は今朝、ここへ来る前に、横川の飯室谷へ、何か使いをたのまれて行ってきたのじゃないか」
「うむ、四王院の阿闍梨から、書面をたのまれて置いてきた」
「範宴はいたか」
「わからん」
「誰がいるのだ、今あの寺には」
「党衆らしいのが庫裡にいた。がらんとして、空寺のように奥は冷たくて暗かった。たしか、去年の初夏のころから、東山聖光院の門跡範宴が上ってきて、あれに閉じこもっているわけだが、彼の姿など見たこともない。坊官も弟子もいるのかいないのかわからん。おかしなことだ」
「それやいない理だ」と一人が唇でうすく笑って、
「範宴は、聖光院の方には勿論いないし、大乗院にも、いると見せても、実はそこにもいないのだから……眉唾ものだよ」
何か火のような光が近くの灌木の中から谷間の空を斜めに切って行った。人々の眼は、そこへ流れて行った雉子の雌をじっと見ながらなにやら考えこんでいた。

六

やがて、一人が沈黙を破って、
「じゃあいったい少僧都は、どこに体を置いているのか、怪しからぬ行状ではないか」と口吻に学僧らしい興奮をもらしていった。
「さあ、それが分らぬて」するとまたほかの一名が、
「なあに、大乗院にいることはいるのさ。姿を見せないだけだ。なにかよほどな悶えがあって閉じ籠ったまま密行しているという」
「やがて、僧正の位階にも上れる資格ができているのじゃないか、なにを不足に」
「いや、その栄位も捨てて、遷化する心だという者がある。四王院の阿闍梨や、青蓮院の僧正などは、それでひそかに、心配しているらしい」
「あの若さで遷化するなどと……。それは一体ほんとうか」
「青年時代には、お互いに、一度はわずらう病気だよ。あまりに学問へ深入りして、学問の病に捕われると、結局、死が光明になってしまうのだ」
「範宴は、そんな厭世家だったかなあ」

「仁和寺の法橋や、南都の覚運僧都などへも、遺物を贈ったというくらいだから嘘ではあるまい」
「では密行に入ったまま、ずっと、絶食でもしているのか」
「噂を聞いて、幼少から彼を育てた慈円僧正が、たびたび使いをのぼせて思いとまるように苦言しているというが、どうしても、死ぬ決意らしい」
「そうか……」と、人々は太い息をもらし合って、
「それや、姿の見えない理が解けた。おたがいに学問もよいほどにしておくんだなあ」
と――薪を枕にして寝そべっていた一人の僧が、
「あははは」手を打って哄笑した。
「お人良し！　お馬鹿さん！　君たちはおめでたい人間たちだ。もっとも、これだから僧侶は飯が食えるのだがね」
「誰だ、そんな悪魔の口真似をする奴は」振向いてみると、この山の学僧のあいだで提婆達多と綽名をして呼んでいる乱暴者であった。
「提婆、何を笑うんだ」
「これが笑わずにいられるか。範宴が遷化するって。……ははは、臍がよれる。なるほど、密行はしているだろう、しかし、その密行がちがっているんだ」
「ひどく悪口をいうではないか」人々は提婆に対してむしろ反感をもった。そんな顔つきに関わず提婆は笑いやまず厚い唇をひるがえしていった。
「でも、あまりに諸賢が、愚かしき噂を信じているから、その幼稚なのに愍笑をもらしたのだ」
「では、範宴は一体、なにを大願として、そんな必死の行に籠っているのか」
「知れているじゃないか。恋だ！　範宴だって人間だよ、隠し女があるのだ！」
「えッ、女があるって」人々は大胆な放言に眼をみはった。

七

意外そうな顔をする人々の迂遠さを提婆はあわれむように薄く笑って、
「眼を、君たちは、持っているのかいないのか。お互いに人間だ、叡山だって、人間の住んでいる社会だ。してみれば、若いくせに、聖めかしている奴が、実はいちばん食わせ者だということが分るはずだ。自体、範宴という人物を、俺は元からそう高く買っていない――」人々は、提婆の鋭い観察に黙って聞き入っていた。提婆は自分の才舌に酔っているように喋舌りつづけた。
「考えてみろ。まだ彼奴は今年でやっと二十九歳の青沙弥じゃないか。その青二才で、一院の門跡となり、少僧都となり、やれ秀才の駿馬の、はなはだしきは菩薩の再来だとかいって、ちやほやいう奴があるが、それが皆、あの男のためには毒になっているのだ。世間は少し、彼を買いかぶり過ぎているし、君たちもまた、それに附随して認識を誤っているんだ」

「提婆、貴様はまた、何を証拠に、そんな大胆なことがいい断れる？」
「大乗院の出入りを監視しているのは俺だけだろう。なぜ俺が、彼の行動に監視の眼を向けているかといえば、それにも理由がある。……たしか去年の初夏のころだった。俺は範宴の隠し女をこの眼で見たのだ」
「ふウム……どこで」
「麓の赤山明神の前で」
「……」提婆のことばには曖昧らしさがなかった。信じることをいっている眼であった。人々も彼の態度にその真剣さを見てから狐疑を離れて熱心な耳を傾けだした。
「……範宴は誰も見ていまいと思っているだろうが、それが仏罰だ。ちょうど俺はその前の晩、学寮の連中と謀らんで、例の坂本の町へ飲みに降りたのだ。つい飲み過ぎて眼をさますと、もう夜が白みかけている、朝の勤行におくれては露顕ものだと、大慌てに飛び出して、今いった赤山明神の近くまで来ると、どうだおい、美しい女が、範宴の袖にすがって泣いているのだ、範宴の当惑そうな顔ったらなかった」
「八瀬の遊女か、それとも京の白拍子か」
「ちがう、そんな女とは断然ちがう。どう見ても貴族の娘だ、藹たけた五つ衣の裾を端折って、侍女もついていた。二人して泣いてなにかせがんでいるらしい。俺は、樹蔭にかくれて、罪なことだが、そっと見ていた。男女の話こそ聞えなかったが、それだけの事実でも、範宴がいかに巧みな偽瞞者であるかは分るじゃないか。あいつに騙されてはいかん」
「そうか。さすれば、遷化するとか、京の六角堂へ参籠するため、夜ごとに通っているなどということも」
「嘘の皮さ。通っているとすれば、それは今いった女の所へだろう」
「なんのこった」
「この社会に生きた聖などはない」
「範宴でさえそうとすれば、吾々が、坂本へ忍んで、女や酒を求めるのは、まだまだ罪の軽いほうだな」
「なんだか、社会がばからしくなってきた。この叡山までが嘘でつつまれていると思うと――」
「今ごろそんなことに気がついたのか。どれ、行こうぜ……」
「晩にはまた、坂本へ抜け出して、鬱憤を晴らせ」薪を担いで、人々は立ち上がった。いつもの薪よりは重い気がするのだった。

八

峰づたいに、十町ほど歩いてゆくと、薪を担いでいるその群れへ、谷の方から呼ぶ者があった。
提婆が、耳にとめて、
「待て待て、誰か呼んでいるぞ」若い旅僧の姿が下の方に見えた。笠に手をかけながらその若い僧は喘いで上ってきた。

「もしっ、お山の衆」
「おう、なんだ」
「おうかがいいたしますが、大乗院はまだ峰の方でしょうか」
「大乗院なら横川の飯室谷だ。この渓流にそうて、もっと下る、そして対う岸へ渡る。こんな方へ来ては来過ぎているのだ」若僧はそう教えられて深い渓谷の道をかなしそうに振向いた。雪解けの赤い濁流が、樹々の間に奔濤をあげて鳴っていた。
「ありがとうございました」やむなく若僧は岩にすがってまた谷の方へ降りて行くのである。綿のように疲れているらしいその足どりを見送って、提婆は、
「あぶないぞッ……」と注意していた。
　まったくこの谷に馴れない者には危険な瀬や崖ばかりであった。対岸へ越えるにしても、橋もなし、岩伝いに行く頼りもない。若僧は、怖ろしい激流の形相をながめたまま、嘆息をついていた。そして、休んでは下流へ辿ってゆく。雪で折れた朽ち木に道を塞がれ、そこでも、茫然と、気がくじけてしまう。
　心細さはそればかりではなかった。沢の樹々の間はもうほのぐらく暮色が迫っている。そして、四明の山ふところから飛んでくる氷った雪か、また灰色の雲がこぼしてゆく霰か、白いものが、小紋のように、一しきり音をさせて沢へ落ちてきた。
「寒い」若僧は意気地なく木の葉の蔭へ兎のように丸まっていた。笠の下に竦んでいる眼は、この山の荒法師などとちがって気の小さい善良な眸をしていた。それに、色の白い皮膚や、腺病質な弱々しい骨ぐみからして、こういう旅をする雲水の資格はない若者なのである。
「会いたい。ここで凍え死にたくない。死んでも兄に会わなければ……」彼は、つぶやいて、凍えた両手を息で暖めた。必死になって身を起した、そして、沢の湿地を歩みだしたが、腐った落葉に足を辷らせて、渓流の縁まで辷り落ちた。
「……」腰でも打ったのか、痛そうな眉をしかめていた。笠はもう、濁流に奪われて下流へながされていた。いつまでも起き上がり得ないのである。その肩へ、その顔へ、痛い痛い霰は打つように降っている。
　その高貴性のある上品な面ざしは、どこか、範宴に似ていた。似ているはず――範宴の弟、今は青蓮院にいる尋有なのであった。

手長猿

一

むささびでも逃げるように、木の葉を騒めかせて崖を辷ってきた者がある。灌木の枝と枝とを掻き分けて、ひょいと首を出したのを見ると、それは四郎の手下の蜘蛛太であった。

もうほの暗い谷間をのぞいて、

「だめだ、ここも」と、舌打ちした。

断崖の上にはまだ大勢の人声が残っていた。降りやんだ霰の空は星になって青く冴え返っている。そのかわりに刃ものを渡るような風が出て、断崖の際にうごいている黒々とした一群の影を吹きなぐっていた。

「蜘蛛っ」とその群れが上から呼ぶと、

「おウい……」彼は首を仰向けて呶鳴った。

「降りてきたって駄目だ。ここの淵も、越えられそうな道はねえぞっ」蜘蛛の足もとへ、ざらざらと土が鳴って崩れてきた。彼が止めているにもかかわらず、上の者どもは藤蔓にすがったり、根笹を頼りにして道もない傾斜を手長猿のように繋がって降りてくる。そして、一応渓流のあたりを俯瞰ろしてから、

「こう、雪解けで水嵩が増していちゃあ、どこまで行っても、やすやす、越えられる瀬はあるものか。この辺は、川幅のせまいほうだ。なんとかして渡ってしまえ」

「そうだとも、まさか、俺たちが、溺れもしまい」蜘蛛が、先を歩いていて、

「あぶないっ！」と、また止めた。

「なんだ」

「この下は、洞窟だ」

「ひさしを這って歩け」

「松明を点そうか」

「火はよせ」天城四郎だということが声がらではっきりと分る。

暗いのでおのおのの眼ばかりが光る。手に持っている斧だの長刀の刃が時々青い光を闇で放つのだった。

「松明など点して歩いてみろ、すぐ山の者が眼を瞠って、怪しむに違いねえ、どんな武家の館でも、禁裡のうちでも、怖いと思って忍びこむ所はねえが、この叡山だけは気をつけないと少し怖い。なぜなれば、ここの山法師ときては、俺たち野伏以上に殺伐で刃ものいじりが好きときている。のみならず、一山諸房には鐘があって、すわといえば、九十九鐘の梵音が一時に急を告げて坂本口を包んでしまう。まだ峰には雪があるから四明へ逃げのびるにはやっかい。八瀬へ降りては追いこまれる。めッたに大きな声も出すなよ」

盗賊でも将帥たる者は一歩一歩兵法に等しい細心な思慮を費やして行かなければならない。そうして、忍びやかな自重を持つと、四郎の分別に率いられた十四、五人の群れは、やがて断崖を下り切って、激流の白い泡が

岩を噛んでいる淵に立った。

二

渦、飛沫、狂激する水の相。

ごうっ――と鳴って闇の中をすごい水の描線が走っている。手下たちは、そこの淵まで降りたもののちょっと顔白んで腕ぐみをしてしまった。

「どうして渡るのだ、この濁流を」すると四郎がいった。

「樹を伐れ」斧を持っていた手下の者が、

「へい」と飛びだしたが、渓谷である、樹は多い、どれを伐るのかと見まわしていた。

瀬にのぞんだ岩と岩とのあいだに柏樹の喬木が根を張っていた。四郎は指さして、

「そいつを河の方へ、ぶっ倒せ」と命じる。

「そうだ、なるほど」斧をひっさげた二人の者が、根方へ寄って、がつんと刃を入れた。斧の光が丁々と大樹の白い肉片を削って飛ばした。空にそびえている梢と葉が、この兇猛な人間の息にかかって、星のような涙をちらして戦慄する。みりっと、ややそれが、傾ぎかけると、大勢の手が幹の背を押して、

「もう一丁、もう一丁」と斧の努力を鞭撻した。

ぐわあん――と地盤の壊れるような音がして、白い水のはねあがった光が闇をまっ二つに割った。

「しめた」と黒い群れは叫ぶ。

仆れた大樹の梢の先が、ちょうど対岸の岩磐にまでとどいている。四郎のわらう声が高らかに動く影の間を流れた。もう先走った者どもは、架けられた喬木の梢のうえを、四つ這いになって猿のように渡っているのだった。

「あぶねえ、静かに来い」

「ひとつ廻ると、みんな振落されるぞ」

「おッと、どっこい」ひらり、ひらりと十幾つの人影は難なく跳び移った。そして戯れ言をかわしながらどっとそこで一つ笑うと、声もすがたも、たちまち四明嵐につつまれて暗い沢の果てへ去ってしまった。

夢の中の人影を見るように尋有はさっきからそれをやや離れた所からじっと見ていた。所詮、この激流を越える術はなし、夜にはなったし、こよいはこの沢で落葉を衾にして眠るよりほかないものと霰の白くこぼれてきた黄昏れから木蔭におとなしい兎のような形になってうずくまっていたのである。

「おお……」思わず彼は立って巨木の架けられた淵まで歩んできた。

「この身の心をあわれみ給うて、弥陀が架けて下された橋ではないか」彼は先に越えて行った人々の態をまねて、手と膝とでその上を這った。先の者は苦もなく一跳びにして行ったように見えたが、尋有にとっては、怖ろしい難路であった。樹はまだ息があるように動くし、水はすごい形相をもって呑もうとするような飛沫を浴びせる。

尋有は眼をつむって、

「御仏」と硬くなって念じた。

三

仰ぐと、高い所に、ぼちとたった一つの燈が見える。

宙は、無数の星だったが、人間の手に点された光といえばそれ一点しか見あたらない。右を見ても山、左を振返っても山、ただ真っ黒な闇の屏風だった。

「こよいのうちに、会えればよいが――」

尋有はやっとそこの谷間を出てから心を希望へ結びなおした。なつかしい兄はもうここからほど近い飯室谷の大乗院にいる。骨肉のみが感じるひしとしたものが思慕の胸を噛んでくる。

「はやくお目にかかりたい」足はおのずからつかれを忘れていた。彼の心は真向きだった、一心であった。一刻もはやく会わねばならない。会ってそして自分の誠意をもって兄の心を打たなければならない。

兄は知っているのか知らずにいるのか、今、世上の兄に対する非難というものは耳をおおうてもなお防ぐことができない。兄範宴は今や由々しい問題の人となっているのである。囂々として社会は兄を論難し、嘲殺し、排撃しつつあるのだ。

兄の恩師でありまた自分の師でもある青蓮院の僧正も、玉日姫の父である月輪の前関白も、夜の眠りすら欠くばかりに、心を傷めていることを、よもや兄も知らぬわけではあるまいに。――また、その問題も問題である。あろうことかあるまいことか、貴族の姫君と、法俗の信望を担う一院の門跡とが、恋をしたというのだ、密会をしたというのだ、しかも六波羅の夜の警吏に、その証拠すらつかまれているという。

尋有はじっとしていられなかった。老いたる師の体が毎夜、鉋に削けてゆくように痩せてゆくのを側目に見ても。

（こういう問題を残したまま、聖光院を捨てて、ただ御山の奥へ、逃避されている兄がわからぬ。ご卑怯だ、いや、兄君のお為にもならぬ。このまま抛っておいたら、世論はなお悪化するばかりではないか。玉日様を愛するならば、玉日様の立場も考えてみるがよい。師の君のお心のうちはどんなか、姫の父君の身になってみらるるがよい。どうなりと、この際、善処のお考えをなさらぬ法はあるまい。その兄が救われるならば、この自分などの一命はどうなろうがかまわぬ。どういう御相談でもうけてこよう、兄の胸をたたいて聞いてこよう）こう決心して、彼は、師の慈円にも黙って山へさして登ってきたのである。

山へ登るについても、世人の眼にふれてはと思い、はるか鞍馬口の方から峰づたいに、山の者にも遠くから来た雲水のように見せかけつつやっと辿り着いたのだった。

だが――尋有は世上で論議しているような不徳な兄とは信じていない。兄の本質は誰よりも自分が知っている。兄は決して多情な人ではない、溺れる人ではない、そういう情涙も脆さも多分にある人には違いないが、一面に剛毅と熱血を持っていることでは誰にも劣らない生れつきである。これと心をすえたことには断じて退かない

性格の人でもある。それは源家の血を多分にうけた母の子である兄の長所でもあり、またみずから苦しむところの欠点でもあって、それが兄をしていつも安穏な境遇から求めて苦難の巷へ追い立てる何よりの素因であると、彼は今も歩みつつしみじみ考えてみるのだった。

四

この世のあらゆる音響から隔離している伽藍の冷たい闇の中から突然起った物音なのである。

すさまじい狼藉ぶりで、それは次から次へと、仏具や什器を崩したり、家鳴りをさすような跫音をさせて、広い真っ暗な本堂を中心として、悪魔の業が動き出している。

勿論、凡者の所業ではない、夕方、横川を渉って飯室谷へかかった天城四郎とその手下どもの襲ったことから始った事件であった。

洛外の蓮台野の巣を立ってきた時から彼らはすでにあらかじめ大乗院を目的として来たに相違なく、四郎がまず先に立って、妻扉をやぶって歩き、つづいて十数名の者が内陣へ入って、まず厨子の本尊仏をかつぎだし、燭台経机の類をはじめ、唐織の帳、螺鈿の卓、瑩の香炉、経櫃など、床の一所に運び集める。

それを頭領の四郎がいちいち眼をとおして、

「こんな安物は捨ててゆけ」とか、これは値になるとか、道具市のがらくたでも選り分けるように分けているうちに、慾に止まりのない手下どもは、土足の痕をみだして方丈の奥にまで踏み入り、なおどこかに、黄金でもないかと探し廻って行く。

すると、ようやくこの物音を知った庫裡の堂衆が二人ほど、紙燈心を持って駈けてきたが、賊の影を出合いがしらに見て、

「わっ！」と腰をついて転んだ。

「騒ぐと、ぶった斬るぞっ」刃を突きつけると、堂衆の一人は盲目的に賊へ武者ぶりついた。他の賊があわてその堂衆の脾腹へ横から刃を突っこんだので、異様な呻きをあげて床へ仆れた。

「畜生っ」と血刀をさげて、賊は逃げてゆくもう一人の堂衆を追い込んで行った。堂衆は驚きのあまり、何か意味のわからない絶叫を口つづけに喚きながら暗い一室へ転げ込んだ。

「野郎っ」と賊はすぐ追いつめて、隅へ屈まった堂衆の襟がみをつかんだが、その時、漆のような室内のどこかで、

「誰だ――」といった者がある。

おや？　と振りかえって闇を透かすように眼をかがやかせたのである。見ると、床の上に円座を敷いて、あたかも一体の坐像でもすえてあるかのように一人の僧が坐っていた。

「うぬは何だ」賊がいうと、僧は静かに、

「範宴である」と答えた。

「えっ」思わずたじろいで、

「範宴？　聖光院の範宴か」
「さよう」低い声のうちに澄みきったものがある。その澄みきった耳は最前からの物音を知らぬはずはないが、その態度には小波ほどの愕きも出ていなかった。

五

「お身たちは何者か」範宴の問いに対して賊たちは賊であることを誇るように答えた。
「盗人よ」
「ほ」半眼を閉じていた眼をみひらいて範宴はまたいった。
「盗賊なれば、欲しい物さえ持って行けば、人を殺めるには及ぶまいが」
「元より、殺生はしたくないが、この堂衆めが騒ぐからよ」
「騒がぬように、わしがいい聞かせておくほどに、そちたちは、安心して、仕事をしてゆくがよい」
「こいつが、うまいことをいう。そんな古策に誰が乗るか。油断をさせて、鐘を撞くか、山法師どもを呼び集めてこようという肚だろう」
　彼らは当然に信じなかった。そこの様子を聞いて頭領の四郎は、範宴を本堂へ連れてこいと伝えてきた。手下どもは彼の両手を捻じあげて立てと促した。悪びれた様子もなく範宴は引ッ立てられてそこを出て行くのである。天城四郎はといえば、本堂にあって、経櫃の上に傲然と腰をおろし、彼の姿を見ると突っ立って、頭から一喝をくらわした。
「いたか！　なまくら坊主」そして、さらに声高に、
「そこへ、坐らせろ」いわるるまでもなく範宴はすでに坐っているのである。頭領と仰ぐ四郎の身に万一があってはと警戒するように手下どもはいったん物々しく取り囲んだが、その必要がないと見るとおのおの掻き集めた盗品を持ちやすいように包んだり束に括げたりし始めた。
　四郎は、範宴の眼をじっと睨まえていた。範宴もまた四郎の顔から眼をそらさなかった。大和の法隆寺に近い町の旅籠で会った時からすでに七、八年の星霜を経ているが、その折の野武士的な精悍さと鋭い熊鷹眼とは今も四郎の容貌にすこしの変りもなかった。それと、ふしぎにもこの男は、弟の尋有の場合でも、自分の所へ襲ってきた今夜でも、何か女性にからむ問題があるたびに現れてきて迫害を加えることが、あたかも約束事のようになっている。――範宴はその宿縁を思いながら四郎の影に対していた。われの懶惰と罪に鞭を享けて弥陀が遣わさるるところの使者であると思った。
「やいっ、範宴」四郎はまずいうのである。
「俺のつらを忘れはしまいな。きょうは返報に来たのだ。ちょうど一年目になるが、よくもいつかの夜には、俺が月輪の姫を奪ってゆく途中、邪魔させたな。手を下したのは汝じゃないと吐すだろうが、汝の意志をもって弟子どもがやったことである以上、その返報は当然てめえ

にかかってくるのが物の順序だ。そこで今夜は、この大乗院の什器と在金を残らず貰ってゆくつもりだが、何か、いいたい苦情があるか。あるならば聞いてやろう、範宴、吐かしてみろ」野太刀の大きな業物はここにあるのだといわないばかりに、左腰へ拳をあてて少し身を捻りながら睥睨した。

範宴の眸はまだ四郎の面を正視したきりであった。そして静かにいった。

「欲しいものは、それだけか」

六

「まだある！」押しかぶせるように四郎は右の肩を上げていった。

「おれは天下の大盗だ。盗賊の慾には限りというものがない。汝の生涯につきまとうて、汝を囮に財宝を集めさせてはせびりに来る。今夜は初手の手付というものだ」

「生涯、この範宴から財をしぼるというか」

「おれは、貴様の弱点を握っているからな。――いやともいえまい」

「さように財物を集めておもとはいったい何を築きたいのか」

「死ねば、おさらばを告げるこの世に、物を築いて置く気などはさらさらない。みな、飲む、買う、耽ける、あらゆる享楽にして、この一身を歓ばせるのだ」

「歓ばせて、どうなるか」

「満足する」

「それは、肉体がそう感じるだけのもので、心は、その幾倍もの苦しみや、空虚を抱きはせぬか。人間は、霊と肉体とのふたつの具現じゃ。肉のみに生きている身ではない」

「小理窟は嫌いだ、理窟をいってるやつに一人でも幸福そうに生きている者はない。とにかく俺はその日その日が面白くあればいい、したいことをやって行く」

「あわれな男のう」

「誰が」

「お汝じゃ」

「わはッはははは」四郎は高い天井の闇へ洞然と一笑をあげて、

「こいつが、てめえ自身の不倖せも知らずに、俺を不愍だといやがる」かた腹が痛そうにしていったが、ふと、範宴の一語が頭の隅で気になるらしく、

「おれのどこが、あわれなのか、あわれらしいのか、いってみろ」

「おもとのような善人が、会うべき御法の光にも浴さず、闇から闇を拾うて生きていることの、何ぼう不愍にも思われるのじゃ」

「やいっ、待て」四郎は大床を一つ踏み鳴らして、

「おれを善人だと」

「されば、そういった」

「すこし気をつけてものを吐かせ。この天城四郎を善人だといった奴は、天下に汝をもって嚆矢とする。第一、

俺にとって大なる侮辱だ。おれは悪人だ、大盗だ」威丈だかに彼がいうのを冷寂そのもののような容姿でながめ上げながら、範宴は、片頬にうすい笑くぼをたたえた。
「おもとは弱い人間じゃ。偽悪の仮面をつけておらねば、この世に生きていられないほどな――」
「偽悪だと。ふざけたことをいえ、俺の悪は、本心本性のものだ。人のうれいを見て欣び、人の悲しみや不運を作って自分の快楽とする。自分一つの生命を保つためには、千人の人間の生命を殺めてもなお悔いを知らぬ。かくのごとく天城四郎は、無慈悲だ、強慾だ、殺生ずきだ！　そして、女を見れば淫になり、他人の幸福を見れば呪詛したくなる。――これでも俺を善人というか」
「まことに、近ごろめずらしい真実の声を聞いた。話せば話すほど、おもとはいつわらぬよいお人じゃ」

七

四郎は自分が世に隠れなき大悪の張本人であることをもって誇りとしているのである。しかるに、今夜の相手は、自分の兇悪ぶりに対して、一向に驚かないのみか、自分を目して、素直だといい、正直者だといい、善人だという。
これでは、天城四郎たる者の沽券はない。彼は足蹴にされたよりも大きな侮辱を感じて、いちいち範宴のことばに腹が立った。ことばすずしく自分を揶揄するものであると取って、
「やかましいっ」と最後には大喝を発して、顔にも、肩にも、腕にも、怒りの筋肉をもりあげ、全身をもって悪形の威厳を示した。
「おれを、賞めそやしたら、おれが喜ぶとでも思っているのか。甘くみるな。そんな生やさしい人間とは人間のできがちがう。四の五はよいから、金を出せ」
「この無住にひとしい官院に、黄金があろうわけはない」
「家探しするぞ」
「心すむまでするがよい」
「それ、探してこい」手下どもへ顎を振って、四郎は再び範宴を監視した。
終始、範宴の姿なり面からはなんの表情もあらわれなかった。四郎との一問一答がやむと、睫毛が半眼をふさぐだけのことだった。散らかって方丈へなだれ込んだ手下たちは、やがて戻ってきて、範宴の室から一箇の翡翠の硯屏と堆朱の手筥とを見出してきただけであった。金はなかったけれど、その翡翠の硯屏は、四郎の慾心をかなり満足させたらしい。
「寺には、こういう代物があるからな」と見恍れていた。そしてすぐ、
「引き揚げよう。そこいらの物を引っ担いで先へ出ろ」と命じた。
手下たちは、めいめい盗品を体につけて本堂の外へ出た。四郎は、動かしかけた足を回し、最後の毒口をたたいた。
「範宴、また来るぞ」鏃のような鋭い彼の眸に対して、

範宴の向けた眼ざしは春の星のように笑っていた。
「オオ、また参るがよい」
「ふふん……負惜しみのつよい男だ。人もあろうに、俺のような人間に、女犯の証拠をにぎられたのが汝の災難。一生末生、つきまとって金をせびるものと観念しておけよ」
「ふかいご縁じゃ。いつかはこの浅からぬ宿縁に、法の華が咲くであろうよ」
「まだ囈言を吐いていやがる。おれの悪を偽面とぬかしたが、汝も、聖めかしたその偽面を、ぬぎ捨てて、凡下は凡下なりに世を送ったほうが、ずんと気が楽だろうぜ。はははは、坊主に説教は逆さまだが、俺の経文は生きた人間へのあらたかな極楽の近道なのだ。……どれ、だいぶ寒い思いをしたから、今夜は八瀬の傾城に会ってその極楽の衾に、迦陵頻伽の声でも聞こう。おさらば」
盗賊の習性として、現場を退く時の身ごなしは眼にもとまらないほど敏捷であった。廻廊へ出たと思うと、四郎の影も、手下どもの影も、谷間を風に捲かれて落ちる枯葉のように、たちまち、その行方を掻消してしまう。
さっきから歯の根もあわず、縁の柱の蔭にすくんでいた尋有は、悪夢をみているような眼でそれを見送っていた。

九十九夜

一

魔の荒して行った伽藍のひろい闇を、その後の惨たる泥足の跡を、冷たい風がふきぬけていた。
尋有はいつまでもからだの顫えがとまらなかった。脚ぶしをがくがくさせて、廻廊の扉口から大床のうちを覗いた。
一点の灯しもない。いるのかいないのか範宴のすがたも見えない暗さである。尋有は這うように進んで行った。
――と、賊が捨てて行った経巻が白蛇のように解けて風にうごいている。その側に、坐っている者の影が見えた。
「兄君ッ……」つき上げて出た声だった。範宴のほのかに白い面がじっと自分のほうへ向いたことがわかると、尋有は跳びついて兄の膝にしがみついてしまった。
「おっ！　……」愕とした兄の手が尋有の背をつよくかかえた。かかえる手もかかえられる手も氷のようだった。ただ、範宴の膝をとおす弟の涙ばかりが熱湯のようにあつい。そして、範宴は弟が何のために山へ来たかを、また尋有は兄が自分の姿をどう心の裡で見ているかを、何もいわないうちに分ってしまったような気がするのであった。兄を責めるとか諫めるとかいうようなことはみじんも忘れ果てて、ただ、肉親の情涙の中に泣き濡れてい

ることだけで満足を感じてしまった。
「よう来たのう、道にでも迷うてか、この夜更けに入って――」
「兄君……」とだけで、尋有は舌がつってしまう。何もいえないのだ。ただなつかしいのだった。
「寒かろう、それに飢じいであろう。はての……なんぞ温い食べ物でもあればよいが」
「いいえ、私は、飢じいことはありません。何もいりません。……それよりは、どこもお怪我なさいませんか」
「なんで？」
「天城四郎のために」
「……」黙って、微笑して、範宴は顔を横に振って見せる。まるで他人事のようにである。
尋有は、兄の膝から顔を離し、兄の手をつよくつかんだ。
「ご存じですか。世間の声を、都の者の喧しい非難や論議を」
「うむ……」
「師の君の御苦境やら、また、姫のお父君でおわす月輪様の御心痛も」
「……知っておる」
「すべてをご存じですか」
「この山にいても、眼にみえる、心に聞える、身はふかく霧の扉にかくれても、心は俗界の迷路からまだ離れきらぬためにの。――そんなことではならないのだ、今のわしは、今の範宴は」
つよい語尾であった。尋有はこの期になっても屈しない兄の厳かな眉にむしろ驚くのだった。会うごとに兄の性格が高い山へ接してゆくように、深く嶮しく、そして登れば登るほど高さが仰がれてくる心地がするのである。
「心配すな、それよりは寝め。――わしの室へきて」静かに立った時、堂衆の紙燭が、奥のほうでうごいていた。

二

眼をとじてもいつまでも眠りに入れない尋有であった。
兄は自分を寝ませておいてどこかへ出て行った。廊下で堂衆の寒さにふるえているような声がきこえる。堂衆のうちで賊に斬られた者があるというから、その男の手当やら後の始末をしているのであろう、微かな物音が更けるまで庫裡に聞えた。
それが止むと、やがて範宴はそっと室へ帰ってきた。尋有は自分の寝顔をさしのぞいている兄の容子を感じながら眠ったままに装っていた。兄もすぐ側に眠るであろうと考えていたのである。ところが範宴は法衣の紐をしめ直したり、脚絆を当てたりして、これから外へでも出るような身仕度をしているのだった。
（今ごろ？）と尋有は怪しんで冴えた心になっていた。ふっと、息の音がしたと思うと、短檠の燈は消えていた。寝ている者の眼をさまさせまいとするように、しのびや

かな跫音が室を出て、後を閉めた。
「はて……？　いずこへ」尋有は起き直った。
しばらくためらっていたがどうしても不安になった。あわてて、枕の下へ手を入れる、そこらに脱いでおいた法衣を体に着ける。
外へ出た。彼方を見、此方を見廻したが、もう兄のすがたは見えない。山門の方まで駈けてみる。そこにも見えないのである。
峰と峰とのあいだの空が研がれた鏡のように明るかった。寒さは宵とは比較にならない、この寒気を冒して、この深夜をこえて、兄は一体どこへ出て行ったのか。
翌る朝になってみると、兄は、自分のそばに法衣も解かずに寝ていた。眠る間があったのだろうか、さりげなく朝の食事はひとつ座に着いて喫している。
「兄君、ゆうべあれから、どこかへお出になりましたな」
「うむ、行った」それきりしか問わなかったし、それきりしか答えもしない。範宴はすぐ斎堂を立って、
「わしは、ずっと、黙想を日課にしておる。行室におるあいだは、入ってくれるな」といった。
昼間は、顔をあわす折もないし、夜はまた、ただ一人でどこかへ範宴が出て行ってしまう。一夜も、欠かした様子がない。
山へかくれた去年から今年への間に、範宴の心境は幾たびとなく苦悶のうちに転変していた。死を決して、食を断ったという噂も事実であろう。この寂土から現実の社会を思って、種々な自分を中心として渦まくものの声や相を、眼に見、耳に聞き、生きながら業火の中にあるような幾月の日も送っていたに違いない。そうして今は何か一すじに求めんとするものへ向って、夜ごとにこの大乗院を出ては、朝になると帰ってくる彼であった。
「今夜こそ、そっと、お後を尾けて行ってみよう」尋有は、兄の行動を、半ばは信じ、半ばは世間のいう悪評にもひかれて、もしやという疑いをふと抱いた。

三

その晩、尋有は先に臥床を出て、大乗院の外に忍んでいた。
ぽつ――と冷たいものが頬にあたった。雨である。しかし、雲が明るい、綿のような雲が翔けている。
「降らねばよいが」夜ごとにこの闇を歩む兄の身を思いやって祈るのだった。
静かな跫音が今山門を出て行った。範宴である。勿論気づいているはずはない、尋有はその後から見え隠れに兄の影を追って行くのだった。
昼ですら危険の多い横川の谷間を、範宴は、闇を衝いて下って行く。なにか、赫々とした目的でもあるような足だ。むしろ尋有のほうが遅れがちなのである。
渓流にそって、道は白川へ展けている。そのころから風が変って、耳を奪うような北山颪に、大粒な雨がまじって、顔を打つ、衣を打つ。
すさまじい空になった。黒い雨雲がちぎれて飛ぶ間に、

月の端が、不意に顔を出すかと思うと、一瞬にまたまっ暗になった。がらっと鳴る水音は、絶えず足もとを脅かすのである。尋有はともすると見失いそうな先の影に、喘ぎをつづけていた。

草鞋の緒でも切れたのではないか。範宴は浄土寺の聚落あたりで、辻堂の縁にしばらく休んでいた。禅林寺の鐘の音が、吠える風の中で二更を告げた。

「この道を？　……いったいどこへ行こうとなさるのか」

いよいよ、兄の心が尋有には謎だった。粟田山の麓から、長い雑木林の道がつづく。水をもった落葉を踏んで飽かずに歩むと、やがて、黒い町の屋根が見え、三条磧の水明りが眼の前にあった。

河はもうこの一降りで水量を増していた。濁流が瀬の石に白い泡を噛んでいる。五条まで下がれば橋はあるが、範宴は浅瀬を見まわしてそこを渡渉て行こうとする。

「あ、あぶない」尋有は、自分の危険をわすれて、河の中ほどまで進んだ兄の姿に気をとられていた。法衣のすそを高くからげても、飛沫は腰までかかるのだった。それに、この水の冷たさはどうだろう。尋有は歯をかみしばって、一歩一歩、河底の石を足の爪先で探りながら歩いた。

と――砂利でも掘ったような深い底へ、尋有は足を踏み入れた。あっ――と思った時はもう迅い水が喉首を切って流れていた。

「兄君――」思わず尋有は叫んでしまった。そして、四、五間ほど流されて、水面に手をあげた時、範宴は水煙りを上げて、彼の方へ駈け戻ってきた。

四

「尋有っ」眼の前に伸ばしてきた範宴の手へ、尋有は、両手ですがりついた。

「兄君」

「よかった。怪我はせぬか」

「い、いいえ」唇は紫いろになっていた。声もふるえて出ないのである。

「手を離すな」範宴は、濡れ鼠になった弟を抱えて、河原へ上がった。

「寒かろうが、行く先まで怺えておれ」すぐ堤を越えて、また歩いた。三条の大路をまっ直ぐ西へ。

一叢の森がある。頂法寺の境内だった。そこの六角堂へ来ると、範宴は、堂の一隅に置いた櫃の中から、肌着と法衣を出して、弟に着かえさせた。

尋有は、縁の床に手をついたまま、いつまでも面を伏せていた。

「おもと、なにを泣いているか」

「自分が恥かしいのです」

「なぜ」

「私までが、世評に耳を惑わされて、実は、兄君をお疑い申しておりました。それで、今夜は、お行き先を見届けようと、お後を尾けて来ましたところ、兄君の夜ごとのお忍びは、この六角堂にご参籠のためと分りました」

「叡山から三里十六町、この正月の十日から発願して、ちょうど今宵で九十九夜になるのじゃ、お汝の案じてくれるのもわかっておる、また、師の僧正を初め、月輪殿の御心痛のほども、よう汲んではおるが、範宴が今の無明海をこえて彼岸に到るまでは、いかなる障碍、いかなる情実にも邪げられぬと武士が阿修羅に向うような猛々しい心を鎧うて参ったのだ。そのために、この六角堂へ参籠のことも、誰にも告げず、ただ、深夜の天地のみが知っていた。お汝が、大乗院からわが身の後に慕うて来たことも、知らぬではなかったが、すでに九十九夜になる今宵のことゆえ、打ち明けてよかろうと、また、師の僧正にも、範宴はかくのごとくまだ無明海にあることをお汝の口から告げてもらいたい。――しかし必ずとも、永劫の闇にやわかこのままに溺れ果つべき。必ずやこの身が生涯のうちにはこの惑身に、玲瓏の仏光を体得して、改めて、今のお詫に参ずる日のあることを誓って申し添えておいてくれい、……よいか、わかったか尋有」

「はい……。よく分りました」

「わかってくれたら、早う帰れ、青蓮院の師のもとへ帰れ。それまでは、この兄もあると思うな。ただ、天地の大きな力と、御仏の功力を信じておれ。ことに、お汝は肉体が弱い、せめて、安らかな心のなかに住むことを心がけて下されい」範宴はひざまずいて、弟の胸へ向って掌を合わせた。

五

ふかい樹立が静寂の闇と漆を湛えたような泉の区域を囲んでいた。六角堂のすぐ裏にあたる修学院の池である。

そこに、この真夜中、水音がしていた。裸体になって水垢離をとっている者がある。白い肌がやがて寒烈な泉に身を浄めて上がってきた。

範宴だった。寒いといっても、このごろはもう樹の梢にも霜がないが、彼がこの六角堂の参籠を思い立った一月上旬のころには、この池には夜ごとに薄氷が張っていたものであった。その氷を破って全身を八寒のうちに没して、あらゆる妄念を洗って後、御堂の床に着くのだった。

――それが今宵で九十九夜も続いた。よくこの肉体がつづいたと彼は今も思う。

しかし、行は、行のための行ではない。出離生死の妄迷を出て彼岸の光明にふれたい大願に他ならない。九十九夜の精進が果たして仏の御心にかなったろうか。

凍える身を拭いて、範宴は白い浄衣を肌に着、少僧都の法衣を上に纏った。そして、六角堂の扉を排しながらはっと思った。

「百夜はおろか、二百夜、千夜、出離の御功力をたまわるまでは、振り向いてはならぬ。まだ真向にこの御扉のうちへこそ向え」

自分を叱咤して、精舎の扉を排した。

床に坐る。一点の御灯を霊壇の奥に仰ぐ。――範宴は、ここに趺坐すると、弱い心も、強い心も、すべての我が溶けてくるのを感じる。そして肉体を忘れる。在るのは生れながらの魂のみであった。人間とよばるるあわれにも迷いの多い一箇のものだけであった。

「南無、如意輪観世音菩薩」合掌をこらして、在るがまに在るうちに、我ともあらぬものが満身の毛穴から祈念のさけびをあげてくる。

「――仏子範宴、人と生れてここに二十九春秋、いたずらに国土の恩に狎れて長じ、今もって、迷悟を離れず悪濁の無明にあえぎ、幾たびか籠り幾たびか彷徨い、ひたすら行道のあゆみを念じやまぬ者にはござりまするが、愚かや、山を降りては世相の謎に当惑し、愚痴貪欲に心をいため、あまつさえ、仏陀の誡めたもう女人に対しては、忘れんとしても、夢寐の間も忘れ得ず、仏戒の力も、おのれの力も、それを制圧するに足らず、日々夜々の妄魔との戦いに、あわれ心身も蝕まれて滅びんとしている愚か者がこの範宴であります。一度は、死なんといたしましたが、死に赴くも難く、生を願うては煩悩の濁海にもてあそばれているのみ。あわれ、救世菩薩、わが行く道はいずくに在るか。示したまえ！

出離生死の大事を！　これ、一人の範宴にとどまる悩みではありません。同生の大衆のために、われら人間の子のために」

いつか涙の白いすじが、彼のすさまじい求法の一心を焚いている眸から溢れて、滂沱として頬にながれ落ちるのであった。

六

雨に洗われた路面は泥濘をながして白い小石が光っていた。樹々の芽がほの紅くふくれ、町の屋根にはうすい水蒸気があがっている。

範宴は、歩いていた。生々とした朝の町に、彼の顔だけが暗かった。力も、目標もない足つきだった。

「この大願が解決されねば、生きているかいはない」と思いつづけていた。

ゆうべは、宵の騒ぎで、すでに大乗院を出る時刻が遅かったので、けさは、六角堂で夜が明けてしまったのである。もうこうして、ひたむきに山から通うことも昨夜で九十九夜になる。

「何を得たか？」範宴は、依然として、十万暗黒のうちに自分の衰えつかれた姿を見出すだけだった。往来の人とぶつかっても気がつかない、輿を荷担ってくる舎人に呶鳴られても気がつかない、物売りの女が怪しんで、気狂いらしいと指さして笑っているのも気がつかない……。

今朝の彼は、気狂い僧と見られても無理がなかった。法衣は、ゆうべの雨で河水に濡れてまだよく乾いてもいないのをそのまま着ていた。その裾も破れているし、足はどこで傷ついたのか血を滲ませているのである。時々、

辻へ来て、はっと上げる眼ざしは、うつつで、底光りがして、飛び出しそうな熱をもって、無心な者はぎょっとする。

だが、彼の姿を、往来の誰もが、そこらにうろついている物乞い僧と同一視していたのは、むしろ幸いといわなければならない。なぜなら、もし、聖光院の門跡範宴少僧都が、そんな身装をして、この朝まだきに町の中を通っているのを見つける者があったら、さなきだに今、彼の行方は社会の問題になっているし、月輪の姫との恋愛沙汰なども、喧ましくいわれているところなので、たちまち、

（破戒僧がいた）

（範宴少僧都があるいている）と、興味や蔑しみの眼があつまってきて、彼の姿を見世物のように人が見に集まってきたかも知れないのである。

そういう実は危険な往来であったが、範宴その人は、少しも、それには意をつかっていない。――ただ、求法のもがきだけだった。今の闇を脱する光明をつかみたい。出離生死の大事――それにのみ全能はかかっている。

「ああ」四条の仮橋の欄を見ると、綿のようにつかれた体は、無意識にそれへ縋った。夜来の雨で、加茂川は赤くにごっていた。

濁流の瀬は逆まいて白い飛沫をあげていた。折角、萌えかけた河原の若草も、可憐な花も、すべてその底に没している。ちょうど、彼自身の青春のように。

「もし……。あなたは、範宴少僧都ではありませんか」

ふいに誰か、彼の肩をうしろから叩く者があった。人の多い京の往来である。ついに、彼の顔を見知っている者に出会ってしまった。

七

「これは、おめずらしい」と、その人はいった。

範宴は、橋の欄から振向いて、

「お、あなたは」

「ご記憶ですか、安居院の法印聖覚です」

「覚えております」

「意外なところで……」と法印はなつかしそうに眼を細めた。

磯長の聖徳太子の廟に籠って厳寒の一夜を明かした折に、そこの叡福寺に泊っていた一人の法印と出会って、互いに、求法の迷悟と蝉脱の悩みを話しあって別れたのは、もう十年も前のことである。その折の旅の法印が、今も相変らず、一杖一笠の姿で洒脱に眼の前で笑っている。安居院の聖覚なのである。

「しばらくでしたなあ。――いろいろご消息は聞いているが」と、法印は範宴の眉を見つめていった。

「お恥かしい次第です」範宴はさし俯つ向いて、

「磯長の太子廟で、あなたに会った年は、私の十九の冬でした。以来十年、私はなにをしてきたか。あの折も、仏学に対する懐疑で真っ暗でした。今も真っ暗なのです。――いやむしろ、あのころのほうがまだ、実社会にも、

人生の体験も浅いものであっただけに、苦悶も、暗い感じも、薄かったくらいです。自分ながら時には暗澹として、今も、加茂の濁流を見ていたところなのです。私のような愚鈍は、所詮、死が最善の解決だなどと思って……」

そういう淋しげな、そして、蒼白い彼の作り笑顔を見て、法印は礼拝するような敬虔な面持ちをもって、

「それが範宴どのの尊いところだと私は思う。余人ならば、それまでの苦闘を決してつづけてはいないでしょう。たいがいそれまでの間に、都合のよい妥協を見つけて安息してしまうものです。あなたが他人とちがう点は実にそこにあるのだ」

「そういわれては、穴へも入りたい心地がします。すでに、世評にもお聞き及びでしょうが、私という人間は、実に、矛盾だらけな、そして、自分でも持てあまず困り者です。その結果、がらにもない求法の願行と、実質にある自分の弱点が呼んだ社会的な葛藤とが、ついに、二進も三進もゆかない窮地へ自分を追い込んでしまい、今ではまったく、御仏からは見離され、社会からは完全に葬りかけられている範宴なのです。まったく、自業自得と申すほかはありません」

夜来一椀の水も喉へとおしていない彼の声は、乾びていて、聞きとれないくらいに低い。しかしその音声のうちには烈々と燃ゆる生命の火が感じられ、そして、みずからを笑うがごとく、嘲るがごとく、またなおこのまま斃れてしまうことを無念とするような青年らしい覇気と涙がその面をおおっていた。

「お察しする」と、法印は呻くようにいって、同情に満ちた眼で、範宴の痩せて尖った肩に手をのせていった。

「立ちどまっていては、人目につく。歩きながら話しましょう」

八

肩を並べて、二人は歩みだした。四条の橋を東へ渡りかけて、

「法印、あなたは、西の方へお渡りのところではありませんか。こう行っては、後へ戻ることになりましょう」

範宴が、ためらうと、安居院の聖覚は、首を振って、

「何、かまいません。友が生涯の彼岸に迷っていることを思えば、一日の道をもどるくらい、何のことでもありません」そういいつつ、歩む足も言葉もつづけて、

「今、あなたの真摯な述懐を聞く途端に、私の頭へ閃めいたものがあります。それは、きっとあなたに何らかの光明を与えると思う」

「は、……何ですか」

「範宴どのは、黒谷の吉水禅房に在わす法然上人にお会いになったことがありますか」言下に範宴は答えた。

「かねて、お噂は承っていますが、まだ機縁がなく、謁したことはございません」

「大きな不幸ですな」と法印はいった。

「ぜひ、一度、あの上人にお会いになってごらんなさい。

私がここで、その功力を百言で呶々するよりは、一度の御見がすべてを、明らかにするでしょう。私も初めのほどは、ただ奇説を唱える辻の俗僧とぐらいにしか思わないで、訪れを怠っていましたが、一度、法然御房の眉を仰いでからというものは、従来の考えが一転して、非常に明るく、心づよく、しかも気楽になりました。なぜもっと早くにこの人に会わなかったのかと機縁の遅かったことを恨みに思ったほどでした。ぜひあなたも行ってごらんなさい」熱心にすすめるのだった。

黒谷の念仏門で、法然房の唱道している新宗教の教義や、またそこに夥しい僧俗の信徒が吸引されているという噂は、もうよほど以前から範宴も耳にしていることであって、決して、安居院の聖覚の言葉が初耳ではなかった。

けれど、法印も今告白したとおり、在家往生とか、一向念仏とか、易行の道とか、聞く原理はいわゆる仏教学徒の学問の塔にこもって高く矜持している者から見ると、いかにも、通俗的であり、民衆へ諂る売教僧の看板のように見えて、そこの門を訪ねるということは、なにか、自己の威権にかかわるような気のしていたものである。

ことに、凡の学徒や究法の行者とちがって、生きるか死ぬかの覚悟で、まっしぐらに大蔵の仏典と人生の深奥に迷い入って、無明孤独な暗黒を十年の余も心の道場として、今もなお血みどろな模索を続けている範宴にとっては、そういう市塵や人混みの中に、自分の探し求めているものがあろうなどとは絶対に思えなかったのである。吉水の禅房と聞き、黒谷の念仏門と聞き、法然房源空と聞き、幾たびその噂が耳にふれることがあっても、まるで他山の石のような気がしていたのであった。それが今――今朝ばかりは――

「お！　黒谷の上人」何か、胸の扉をたたかれたような気がした。

「ぜひ、行ってご覧なさい」法印は、重ねてすすめた。そして、別れて立ち去った。

「黒谷の上人」範宴はつぶやきつつ、後を見た。もう法印の姿は往来に見えない。頂法寺の塔の水煙に、朝の陽がちかと光っていた。

「法然――。そうだ法然御房がいる」九十九日目の明けた朝であったのも不思議といえば不思議である。如意輪観世音の指さし給うところか、範宴はすぐ心のうちで、

（行こう！）と決心した。

離山

一

どこに臥し、どこに食を得ていたか、ここ数日の範宴の所在はわからなかったが、あれから叡山へは帰っていないことと、洛内にいたことだけは確実である。

粟田山の樹々は、うっすらと日ごとに春色を加えてきた。黒谷の吉水には、夜さえ明ければ、念仏のこえが聞えやまなかった。信徒の人々の訪れては帰る頻繁な足に、草原でしかなかった野中はいつのまにか繁昌な往来に変っていた。

その人通りの中に範宴のすがたが見出された。

勿論、彼を範宴と知る者はなかった。安居院の法印のように、よほど記憶のよい人か、親しい者でなければ、その笠のうちをのぞいても気がつくまい。

（どこの雲水か）と、振りかえる者もない。

女も老人も、子供も、青年も通る。その階級の多くは元より中流以下の庶民たちであるが、まれには、被衣をした麗人もあり、市女笠の娘を連れた武人らしい人もあった。また、吉水禅房の門前の近くには、待たせてある輦だの輿だのもすえてあった。

範宴は、やがて、大勢の俗衆と共に、そこの聴聞の門をくぐってゆく。法筵へあがる段廊下の下には、たくさんな草履だの、木履だの、草鞋だのが、かたまっている。彼もそこへ穿物を解き、子の手をひいて通る町の女房だの、汗くさい労働者だの、およそ知識程度のひくい人々のあいだに伍して、彼もまた、一箇の俗衆となって聴法の床に坐っていた。

こうして、範宴がここへ来る願いは、まだ法然上人に会って、心をうち割ってみるとか、自分の大事についてただしてみるとかいうのではなくて、自分もまず一箇の俗衆となって、これだけの民衆をすがらせている専修念仏門の教義を、学問や小智からでなく、凡下の心になって、素直に知ってみたいと思うのであった。

四条の畔で、安居院の法印からいわれた示唆は、今もまだ耳にあって、天来の声ともかたく信じているのであるが、範宴には、いきなり法然の門へ駈けこんで、唐突に上人に会ってみるより、上人の唱える念仏門が何であるか、それを知ってから改めて訪れるべきだと考えられた。また、従来の自分というものを深く反省てみると、学問に没しすぎてきたため、学的にばかり物を解得しようとし、どんな教義も、自分の学問の小智に得心がゆかなければうけ取ることができない固執をもっていた。理論に偏しすぎて、実は、理論を遊戯していることになったり、真理を目がけて突きすすんでいると思っていたのが、実は、真理の外を駈けているのであったりしてきたように思われていたのであった。――で、この期にこそ、まず自分の小智や小学やよけいな知識ぶったものを一切かなぐり捨てて、自分も世間の一凡下でしかないとみず

から謙虚な心に返って、この説教の席にまじって、耳をすましているのであった。

二

十日ほど、範宴は通った。

そのあいだに、一般の聴法者のあつまりには、法然上人のすがたは、いちども、説教の座に見られなかった。

「お風邪をひいて、臥せっていらっしゃるのだそうだ」

信徒の人々のうわさだった。

で、教壇には、法然直門の人々がこもごもにあらわれて、念仏の要義を、極めてわかりやすく、しかも熱心に説くのだった。

その中には、他宗にあって相当に名のあった学徒たちが、顕密諸教の古い殻から出て、この新しい宗祖の下に集まって来ている者も尠なからずあった。

西仙房の心寂、聖光房の弁長、また空源とか、念阿とか、湛空などの人たちは、範宴も以前から知っている顔であった。

また、鎌倉殿の幕府うちでも、武名の高い坂東武者の熊谷直実、名も、蓮生房とあらためて、あの人がと思われるような柔和な相をして、円頂黒衣のすがたを、信徒のあいだに見せているのも眼についた。

「ここの壇こそは、生きている声がする」

範宴は、一日来ると、必ず一つ感銘を抱いて帰った。世間そのものの浄土を見て帰った。

「もし！　……」ぞろぞろと禅門から人々の帰って行く折であった。老婆と幼子とを門前にのこして、範宴の後をついてきた商人の妻らしい女が、

「もしや、範宴さまではございませんか」と後ろから呼んだ。

「どなたです」

「お見わすれでしょう」と女はわらう。範宴は、女の笑顔に、

「おお、梢どのか」と驚いていった。

弟の尋有の今の姿が、すぐ梢の変りきった眼の前の姿と心のうちで比べられた。二人の恋ももう遠い過去のものであった。天城四郎にかどわかされて後のこの女の運命を思わないこともなかったが、こんなに幸福な陽の下で見られようとは想像もしていなかったことである。

「あのせつは、ご心配をおかけいたしましたが、今では、小やかですが、穀商人の内儀になり、子どもまでもうけて、親どもと一緒に暮らしております。よそながら、お噂もうかがって、いつも蔭ながらご無事をおいのりしておりましたが、ここでお目にかかれましたのも、ありがたいお上人様のおひきあわせでございましょう」と、ことばの下から念仏をとなえて、吉水の門を拝むのだった。

あの盗賊の四郎の手にかけられた上は、当然、遠国の港へ売られたか、浮れ女の群れに入って東国まで漂泊したか、いずれ泥水の中に暗い月日も送ったことであろうに、梢の顔にはそうした過去の陰影はすこしも見られな

い。母としてのつつましさと、妻としての落着きをたたえている顔に、明るい笑靨がうごいているだけだった。

「そうか」範宴はうれしいことに会ったと思った。そして、彼女の今の幸福はなにかと問うと、梢は、ためらいなくいった。

「お念仏でございます。良人のそばでも、子供に乳をやりながらでも、お念仏を申している日がつづいてから、不幸と思った日は一日もございません」

三

梢のそういう恵まれた姿を見たばかりではない。範宴は彼女とわかれて歩みだしながら考えた。ふしぎな事のように思うのだ。この黒谷の上人の門へ群れあつまる人々の姿にはみなその恵みがかかっている。どの顔にも歓びと生活の幸が輝いている。自分のごとく懊悩の陰影をひきずっている者はない。心の見窶らしさがあの群れの中では目立つ。

しかし、その時にはもう深い決意が範宴の肚にはすわっていた。彼の姿はやがて叡山の森々と冷たい緑の気をたたえている道をのぼっている。大きな決意を抱いて一歩一歩に運ぶ足だった。

「や、範宴じゃないか」杉林の小道から出て来た四、五名の学僧たちが、眼まぜで、囁き合いながら摺れちがって、

「うふふ……」手で口を抑え、次にすぐ、

「あはははは」と大きく笑った。

範宴はふり向きもしない。ただこの山の人間と黒谷の人々との持っている心の平常にいちじるしい差をすぐに感じただけであった。かほど森厳な自然と、千年の伝統をもっている壇には、なんらの仏光を今日の民衆にもたらさなくて、市井の中のささやかな草庵の主から、あのような大道が示されているのは、何という皮肉であろうと思った。

（奇蹟が事実にある）範宴はやはり今の世に生れてよかったと思う。今の世に生れなければ、あの奇蹟は見られないのである、法然御房にも会えないのである。安居院の聖覚法印は、やはり嘘をいわなかった。

彼の心は急いできた。といっても、先ごろのような焦躁では決してない。いそいそと明るいほうへ心は向いている。

大乗院へもどると、彼はすぐ麓へ向けて使いをやった。使いは、青蓮院と、聖光院へまわった。

この一年ほど、まるでたましいのない廃寺のように、寂として、憂暗のうちにあった聖光院と、そこに留守をしていた人々は、思いがけない師の書状を手にすると、

「お帰りになるそうだ」といって狂喜した。

小幡民部から性善坊につたえられ、性善坊はその報を持って、

「覚明」と、友の室へ駈けこんだ。そして、

「師の房が、おもどりになるゆえ、迎えにこいというおてがみだ」と告げると、覚明は、

「ほんとか」と、眼をみはった。
よほどうれしかったのであろう、またそれほどに今日までの一日一日が憂惧の底であったにちがいない。
「よかった」と抱き合って、ふたりは泣いた。

四

山南天の実が赤い。
藪蔭の陽はもう暖かな草萌えのにおいに蒸れていた。
「ここじゃ」大乗院の山門の額を仰いで、人々はほっと汗ばんだ息をやすめた。
「ようこんな廃れ寺で、一年もご辛抱なされたものだ」と、覚明がうめいていう。
坊官の木幡民部を初め性善坊やその他十名ほどの弟子たちは、そこを入る時から胸が高鳴っていた。玄関へ向って、
「聖光院のお留守居の者ども、お迎えに参じました。師の御房へおつたえして給われ」
堂衆が、奥へ入って行く。やがて、
「御本堂へ」と、一同を通した。
明けひろげた伽藍の大床には、久しぶりで四面からいっぱいな春光がながれこんでいた。
だが、ふと内陣の壇を仰ぐと、御厨子のうちには本尊仏もなかった、香華の瓶もない、経机もない、龕もない、垂帳もないのである。吹きとおる風だけが爽やかであった。
（はてな？）不審ないろが誰の面にもあった。しかしことばを洩らす者はなかった。より以上に、師のすがたが胸につまるほどな感謝で待たれていたからである。民部、性善坊、覚明、その以下の順で膝ぶしを固めてじっと控えていた。
（どんなに窶れておいで遊ばすことか）と、その衰え方を誰もが眸にいたましく描いてみるのであった。
奥まった所で扉のあく音が聞え、やがて静かな跫音が近づいてくる、廻廊の蔭にあたって人の来る気配なのであった。――と、そこに、うぐいす色の袈裟をかけて、念珠を携えた背のすぐれた人が立っていた。
「あ。……師の御房」いうまでもなく範宴なのである。ひれ伏した人々はふたたび顔を上げ直して、自分の眼を疑った。なぜならば、骨と皮とのようになっていられるだろうとすら想像していた彼の面は、多少やつれてこそいるが、若い血色に盈ちていたし、何よりは、熒々として見える双眸の裡に、驚くべき意志の力が、かつて誰も見なかったような希望をかがやかせていたからだった。
円座も敷かずに、範宴は床へじかに坐った。彼もまた、一年ぶりに会った愛弟子たちに対して、なんともいい得ない感情につつまれているらしいのであった。ただ一言、
「皆に、心労をかけましたのう」といった。
「……何の、お健やかなご様子さえ拝せば、私たちの苦労はすぐ解けてしまうものでございまする」性善坊は、はらり落つる涙を掌にうけて、答えた。剛毅な覚明すら、

久しく離れていた嬰児が母のすがたを見たように羞にかんでいるのであった。

五

麓の白川口には、一輛の輦が待っていた。二人の稚子と牛飼の男が、そばの草叢に腰をすえて、さびしげに雲を見ている。

そこは、志賀山越えと大原道との岐れ目であった。一面の琵琶を背に負い、杖をついてとぼとぼと志賀の峠から下りてくる法師があった。足もとの様子で盲人と見たので、草の中から稚子が、

「琵琶法師さん、輦があるよ」と、気をつけてやる。

盲の法師は杖をとめて、

「ありがとう」背を伸ばし、空を仰いで、

「どなたのお輦ですか」

「聖光院の御門跡さまが、山をお下りになるんです」

「あ！　……。範宴どのが、山を離れられるとか」

「御門跡さまをご存じですか」

「月輪公の夜宴でお目にかかったことがあります。そうですか、やはり、離山なされることになったか。そうなくてはならないことでしょう。……範宴少僧都の君をことほぐために、一曲奏でたい気持さえ起るが、ここは路傍、やがての事にいたしましょう。私は、峰阿弥と申すものです。どうぞ、よそながらこうとお伝え置きねがいまする」

独りで喋って、独りでうなずきながら、旅の琵琶法師は、落陽のさしている風の中を、大原道のほうへとぼとぼと歩み去った。

「なんじゃ、あの法師めは、盲というものは口賢いことをいうから嫌いだ」牛飼の男が、つぶやいた時、戯れ合っていた稚子たちが、

「あ、お見えじゃ」と立ち上った。

雲母坂を越えて斜めに降りてくる範宴の姿や、その他の迎えの人々が見え初めたのである。輦の簾をあげて、牛飼は軌の位置を向きかえた。

（範宴離山）の噂は、半日の間に、叡山にひろがっていた。ひそかに、彼へ私淑している人々だの、彼の身を気づかっていた先輩だの、また、一部の学徒の人々だのが、真っ黒なほど範宴のうしろに列を作っていた。

その人々へ対って、慇懃に、別辞の礼を施してから、範宴は、輦の中へ移った。彼の胸には、この時すでに、十歳の春から二十九歳のきょうまで、生れながらの家のように、また、血みどろな修行の壇としてきた、叡山に対して、永遠の訣別を告げていたのであったが、送る人々は、なにも気づかなかった。

「範宴御房、おすこやかに」

「またのお移りを待つぞ」などといった。

輦がゆるぎだすと、白河の上にも、如意ヶ岳のすそにも、白い霧のながれは厚ぼったく揺らいでいた。そして、どこからともなく、淙々と四絃を打つ撥の音がきこえてきた。

「お、琵琶の音がする。……加古川の法師は？　……」
輦のうちで眼をふさぎながら、範宴は、玉日姫（たまひひめ）のすがたを、おぼろ夜の白い桜（はな）を思いうかべていた。

恋愛篇

門

一

すさまじい荒法師の一群が、肩をいからし、高足駄を踏みならして、
「もの申すっ」と聖光院の玄関に突っ立ち、こう呶鳴った。
「範宴少僧都に会いたいことがあって、遥けく罷りこした僧どもでござる。お取次をねがう」坊官たちは、玄関脇の一室で、
（や、また来た）と眼まぜをしあい、当惑顔をするのであった。
根来の誰とか、三井寺のなにがしとか、また聖護院の山伏だの、鎌倉の浪人者だの、名もない市井の無頼漢まで、きのうも今日もこれまで幾組来たことかわからない。
いい合わしたように、皆、
（範宴に会わせろ）とか、
（範宴をこれへ出せ）とかいう。

彼が叡山を下りて、ここへ帰ったという事実は、一日のうちに洛中洛外に知れわたってしまった。――燃えている炎の中へ、油の壺でも投げこんだように。
破戒不浄の似非門跡に会って、面皮を剥いてくれねば帰らぬと、玄関に立ちふさがる輩もあるし、嫌がらせをいって、金を強請りにくる無頼漢や浪人もあった。
「あくまで、お留守だと申せ」執事の木幡民部は、坊官たちへかたくいい渡して、いよいようごかないと、自身が追い返していた。
今も、訪れた一組は、
「不在ならば、行く先を聞こう」といって、階に、腰をすえこんで、
「四、五日前に、叡山からここへ帰ったことをたしかめて来たのだ。それから、どこへ隠れたのか」坊官たちはもてあまして、
「存じませぬ」というと、
「たわけッ」一人がわれがね声で、
「おのれたち、役僧として、門主のいどころを知らんですむのか。たとえば、今にでもあれ、公庁の御用でもあったらどこへつたえるつもりか」
「でも、そう命じられておりますから、お教えするわけにはゆきません」
「汝らでは、話がわからん。執事を出せ、まさか、執事まで雲がくれしているのではあるまい」
「どなたが仰せられても、御門跡にお会い申すことは絶対にできません」

「うるさい」薙刀の石突きで、一人が坊官の腰を突いた。
坊官が逃げこむと、
「やあ、聞けよ範宴。汝、それほどに自己の行状を恥じるならば、なぜ、ここへ出て、両手をつかえ悔悟の真実を示すなり、世上へ謝罪の法を執るなりせぬか。それとも、異論あらば、論議するか。人のうわさも七十五日と、隠れていても、事は済まぬぞ」

二

ぞんぶんな悪態をついて、
「馬鹿門跡っ」
「欺瞞者」そして天狗のように、
「わはははは」そこらへ、唾を吐きちらして、帰ってゆくのだった。
やっと一群れ帰ったと思うと、また、次の一群れが来る。
同じように罵詈か、強請か、論議売りであった。
夜になると、聖光院の大屋根へ、ばらばらと石が降った、塀の外を大声で、
夜ごと夜ごとの
恋猫は
人目の築地越えて
煩悩の辻こえて
月輪へ
しのぶとよ
朝な朝なの
恋猫は
諸人の鞭に追われ
御仏の裳にかがまり
昼もなお
しのぶとよ
破れ扇で手拍子を打ちつつ、聞えよがしに歌って通る者があったりする。
朝、門を開ける者は、必ずそこら一面に落ちている瓦だの、牛の草鞋などを見た。ある朝は、大きな墓石が投げこまれてあったりした。
――仏誅必ず汝に下らん。
などと書いた投げ文は毎日のことである。しかし範宴その人の生活は、ここへ移ってからも依然として変らない、思索の寂室に、いつもひっそりと住んでいるのだった。
青蓮院の慈円僧正と、そのほかへ四、五度の消息をつかわしたり、慈円からも幾回となく書状の来た形跡はあるが、外へは、一歩も出なかった。彼の身辺のそうした静けさは、ちょうど颱風の中心のように、いつ破壊と暗黒が襲ってくるかわからない不気味な一刻に似ていた。
突然にいい出されたので、扈従の人々は狼狽した。その範宴が、室を出ていったのである。
「きょうは黒谷の上人のもとへ参ろうよ」と。坊官たちは、

「えっ、ただ今？」思わず問いかえした。
「うむ」つよく顎をひいていう。
問い返すまでもないことだった。範宴のすがたを見ると、白絹の法衣に白金襴の袈裟をかけ、葡萄のしずくを連ねたような紫水晶の数珠を指にかけていた。その数珠は、母の吉光の前の遺物であり、白金襴の袈裟は、このまえ師の慈円僧正に対する堂上の疑惑をとくために参内した折に着けたもので、めずらしくも、正装しているのである。
民部も、覚明も、性善坊も、師の装いに倣って、あわただしく身仕度した。
階前には、稚子たちがそろう。牛飼は、小八葉の新しい輦を、車寄にひきだしていた。

三

吉水の丘はちょうど花頂山の真下にあたっている。ひところの黒谷の草庵はあまりに手狭なのでいつの年かここに移ってこられたが、その当時のまま世間では黒谷の上人といっている。そこに法然はもう三十年以上も住んでいた。旅に出たり、他に幾月かの起き臥しを過ごしたことはその間には勿論あっても、西山の黒谷に遁世して名を法然房と称えたのは実に彼が十八歳の時であったから、その機縁からいえば上人のこの黒谷や吉水附近の土地とは、すくなくとも四十数年来――短い人の一生涯ほども宿世を経てきているのである。
（縁――）しみじみと、範宴は、それを今、輦の中で感じる。
聖光院も、青蓮院も、この吉水とは垣の隣といってもよいほど近いのだ。そして、自分が、青蓮院の門を手をひかれて行って、髪を下ろした九歳のころには、もう黒谷の上人は、西山の広谷から吉水へ移って、浄土の門をひらき、称名専修をとなえていた。
それから、二十年ものあいだ、百歩の近くに住みながら、どうして、お親懇を得る折がなかったのか。
念仏の声はしきりと吉水の樹の間からもれてきて耳には入っていながら、心までは沁みなかったかと思う。
（御縁である）ふかく――それだけに範宴は今日の日を――不可思議な参会であると考えて、この通る道、ここを巡りゆく軌の音にも、掌をあわせて謝したいような感謝にくるまれるのであった。
儀装をこらした小八葉の輦は、そうして、道程にすれば実に短い――時間にすれば何万何千里にも値する歳月の遥けさをとおって、吉水禅房の前に着いた。
門の近くを憚って、十間ほどてまえで範宴は輦を下りた。覚明が、内へ訪れると、
「上人も、お待ち申しあげておられます」と、玄関へ出て迎えた弟子僧の面々がいう。
（はてな？）覚明は、性善坊と眼を見あわせて、いつのまに今日の訪問をあらかじめ師が通じておいたのかといぶかった。
白金襴の袈裟がわけて背をたかく見せている範宴のす

がたが、式体する吉水門の人々に身を低めつつ静かに奥へとおった。さすがに貴公子らしいと後にただようほのかな人格のかおりを禅房の人々はゆかしく思いあうのであったが、誰も、その人と同じ人間が先ごろから数日のうち道場の聴法の筵に俗衆のうちにまじっていたとは気のつく者はなかった。

茶を煮て、檜折のうえに、伏兎餅と椀とをのせて奥へ運んでゆくと、

「呼ぶまでは、誰も来るな」という上人の声がする。

縁のつま戸はかたく閉められて、近づく者はなかった。

四

「あなたが範宴御房ですか。お名まえはとうにうかがっていたが……」と、法然からいう。

ものやわらかな声である。範宴は礼儀をして、

「永年、お近き辺りに住まいながら、今日まで、会縁にめぐまれず、初めて御門に参じた者にございます。なぜもっと早く、今日の心が出なかったろうかと思うことでありました」

「いやいや、遠くても近い者があるし、一つ家にいても遠い者もある、こうして幾千刻の月日を経てお目にかかったあなたと私こそは、まことに、遠くて近い者であったのです。こういう対面こそ、真の会縁とは申すのでしょう」

「実は……」と、面を上げた時、範宴の耳に、ぱっと紅い血がのぼった。なにか必死なものがその眉から迫ってくるのを上人は見てとったにちがいなかった。

微笑をふくんで、

「ご来意は――」と、しずかに誘う。

「余の儀でもありませぬが、今日、おうかがいいたした仔細は、わたくしのこの一身を、ご迷惑でも、慈悲の門に拾っていただきたいと思って、窮鳥のごとく、お膝へすがって参ったのでございます。ついては、これから陳べたいと思うわたくしの愚かしい過去のことどもを、お聞きとり下さいましょうか」

「ぜひうかがいましょう」上人のことばには少しもお座なりなところはなかった。熱心に膝をすすめて、

「なんなりと仰せられい」という。

範宴は、骨のゆるんだように両手をついた。慈父に会った気もちである。一朶の白雲が漂うかのような法然の眉、のどかな陽溜りを抱いている山陰のように、寛くて風のないそのふところ。

（この人へならどんなことでもいえる）という気持がする。

同時に、範宴は、きょうまでの難路や風雪の苦行に虐まれぬいてきた自分の肉体と心が、この人の前では、あまりに甲斐なき惨憺にばかり傷ついていて、どこかに、人間として不自然な頑なな容に凝固っていることに気づいた。

「ここには、私のほか、聞いている者はありません、ご遠慮なく、いいたいことを仰っしゃってもさしつかえな

い」
法然もすすんで訊こうとするのである。会いがたい人に今こそ会っているのだ。範宴はそう感じると、どんな恥かしいことでも、どんな愚かなことでも、また罪悪でも、一切をここで吐いてしまおうと思った。
で、彼が縷々として話しだす事々には微塵の飾り気も偽りもなかった。二十年来の難行道の惨心は元よりのことである。現在つき当っている大きな矛盾――どうにもならない恋愛と社会、若い一身との複雑な昏迷の労れについても、自己の犯した罪業を包まず陳べて、解脱の道をたずねたのであった。

五

見栄もない、恥もない。
（この人ならでは――）と一心にすがる気もちで、少僧都の白金襴をまとう身を懺悔の涙にぬれ伏して一切を訴えていう声である。
法然は終始じいっと眦りをふさいで聞いていたが、やがて半眼にひらいた眼には同情の光がいっぱいあふれていた。いじらしげに、二十九歳の青年の惨たる求法の旅の姿を見るのであった。ひたむきに難行道の嶮路にかかって、現在の因習仏教の矛盾と闘い、社会と法門のあいだの混濁を泳ぎぬき、さらに、その旺な情熱と肉体とは、女性との恋愛問題とぶつかって、死ぬか、生きるかの――肉体的にも精神的にも、まったく、荊と暗黒のなかに立って、どう行くべきか、僧として、人間として、その方向さえ失っているというのである。
「わたくしは、ついに、だめな人間でしょうか。忌憚なく仰っしゃって下さい」と、範宴は、熱い息でいった。
「いや……」法然の顔が、わずかに左右へうごくのを見て、
「だめな人間ならば、死ぬのが、もっとも自分に与えられた道だと思うのですが」
「あなたは、選まれた人だと私は思う。この人間界に、五百ヵ年に一度か、千年に一度しか生れないもののうちのお一人だと思う」
「どうしてでしょう」
「今に、ご自身で、慧解なさる日が必ず来る」
「そうでしょうか」
「お寛ろぎなさい。もっと、楽な気もちにおなりなさい。あなたの歩いてきた道は、わたくしも通ってきた道だ。風波と戦うばかりが彼岸の旅ではありません。――しかし、よくそこまでやられた。自力難行の従来の道にある人が、いちばん怠っているその自力を出すことと難行を嫌うことでした。それへあなたは真向にぶつかって行った。そして当然な矛盾につき当ったのです。けれど、今の突き当った境地こそ実に尊いものであります。誰がここ数百年の間、それへ突きあたるまでの難路を歩んだでしょうか。あなたのような人こそ、まことに法然の知己だ、法の友だ、この後とも、どんなご相談にもあずかりましょう」上人は手をのべて、範宴の手をとった。

「ありがとう存じます」範宴は、瞼をあつくした。上人のあたたかな手を感じると、勿体なさに、体がすくむのであったが、いつかは会う約束の人に会ったのである。この手は、自分が結んだのでも上人が結んだのでもない、御仏が、こうして結ばせているのであると思って、にこと笑った。上人もほほ笑んだ。

範宴の笑顔からは、ぱらぱらと涙がこぼれた。涙は、随喜の光だった。

＊

半日も、上人と二人きりで話していた範宴は、やがて室を出て、禅房の入口にすがたを見せると、自分のつれてきた供の人々をそこへ呼び入れた。

六

花頂山の肩に、うすい夕月がにじみ出ている。

「めずらしくご長座だ、上人とのお話がよほど合っているとみえる」と、輦の轅のそばにかたまって、覚明だの性善坊だのが噂しているところへ、木幡民部が、門のうちから、

「お召しじゃ」という。

「やっとお帰りか」と人々は入って行ったのである。

ところが、範宴は、帰るのではなかった。そこへうずくまった人々をじっと見下ろして、何か改まった顔いろである。いおうとする言葉を心のうちで整えている容子だった。

沓ぬぎの穿物をそろえかけた性善坊は、その唇を仰いで、はっとした。

「何か？　……御用でございましょうか」と、手をつかえ直す。

「されば」と範宴は、一同を見わたして、

「突然こう申しては、そち達の心もわきまえぬ無情の師よと恨むでもあろうが、範宴はただ今、上人のおゆるしを得て、今日よりは当吉水に止まって、念仏門の一沙弥となって修行をし直すことに決めた」

「えっ……。この門に」あまりにも大きなこの驚きを、いう人のことばはまたあまりにも穏やかで、こういう大事を、ほんとに胸に決しているとは思えないくらいであった。

「上人の一弟子として、ここに止まるうえは、もはや、少僧都の鮮衣も、聖光院門跡の名も、官へおもどしすべきものである。おのおのは帰院して、範宴遁世のよしを叡山へ伝えあげてもらいたい。なお一山の大衆には、べつに宝幢院へ宛てて、後より範宴の信じるところを認めてさし出すつもりである」そういって、傍らの室へ入ると、範宴は、白金襴の袈裟や少僧都の法服をすでに脱いでいるのである。

（真実なのだ）と思うと、覚明も性善坊も胸もとまでつきあげていた涙がいっさんに顔を濡らして、両手のうえに肩をくずしてしまった。

こうといわれたら揺るいだことのない師のことである。しかも、今の決意の眉はただ事ではない意志の表示であった。

袈裟、法衣などを、自分の手で畳んで、自分の手にのせた範宴は、再びそこへ来て性善坊へそれを渡した。見ればもう、薄ら寒い黒衣を袈けた師であった。

「では、そち達も身をいとえよ。叡山へ帰るなり、折を見て、この範宴と共に念仏門へ参るも心まかせ。永いあいだの真心の侍きは、袂を別った後も忘れはせぬ……」

と、範宴は頭を下げた。

弟子たちは嗚咽を怺えきれなかった。師の脱いだ袈裟だけを乗せて、空の輦は、花のちる夕風の中を、力なく、帰って行くのだった。

吉水夜話

一

生れかわった一日ごとの新しい呼吸であった。範宴は死んで、範宴は生れたのである。

法然は、ある時、

「これへ参られよ」彼を、室へ招いていった。

「世上のうわさなどを、気に病むことはないが、とかくうるさい人々が、いつまでもおん身のなした過去の業をとらえて非難しているそうな。そしてまた、叡山の衆は、おん身が浄土門に入ったと聞いて恩義ある宗壇へ弓をひく者、師の僧正を裏切る者だなどと、さまざまに、誹謗し、呪詛する声がたかいという」

「もとよりの覚悟でございます。ただ惧れますことは、私の願いをおきき下さったために、この念仏門の平和をみだしては済まないと思うことです」

「心配をせぬがよい」上人は明るく笑って、

「おん身の非難の余波ぐらいで乱されるこの門であったら、億衆の中に立って、救世の樹陰となる資格はない」

と、いった。そして、

「しかしまた、世の風に、われから逆らうこともあるまい。おん身もこの際に、名を改めてはどうか。いくらかでも、人の思いも薄らごうし、また自身の生れかわった

という気持にも、意味がある」
「願うてもないことです。甘えて、お願い申しまする、なんぞ、私にふさわしいような名をお与え下さいまし」
上人は、唇をむすんだ。しばらくして、
「綽空」と力づよい声でいった。
綽空――彼は自分の今のすがたにぴったりした名だと思った。
「ありがとうございまする」うれしげである。
綽空は、まったく変った、ここへ入室してからの彼は、他の法門の友と共に、朝夕禅房の掃除もするし、聴聞の信徒の世話もやくし、師の法然にも侍いて、一沙弥としての勤労に、毎日を明るく屈託なく送っていた。どこか、今までの彼の相に、無碍の円通が加わってきた、自由さ、明るさ、宏さである、一日ごとが、生きがいであった。生きているよろこびであった。
法然は、綽空を愛した。何かにつけ、道場の奥から、「綽空」と呼ぶ声がもれる。
禅房の友だちたちには、熊谷蓮生房がいた。空源がいた。念阿がいた。湛空がいた。安居院の法印も時折にみえる。そして綽空の更生を心からよろこんだ。
一年はすぐ経った。冬になるとこの吉水の人々は、夜の炉ばたを囲んで、おのおのの過去や、教義のことについて、膝を交えて語るのが何よりも楽しそうであった。

二

皆、つつましく唇をむすんでいた。しかし、この無言はいたずらな空虚ではなかった。誰も声は出さないが炉のまわりの者はこれで充分に語り合っているのである。
じっと、炉の中の美しい焔に眼を落したまま――。
外には落葉の音がする。冬の夜の訪れが、しきりと、禅房の戸をがたがた揺すぶってゆく。
「綽空どのは、頬のあたりがすこし肥えられた」蓮生房がつぶやくと、炉をかこんでいる心寂や、弁長や、念阿や、禅勝などの人々が、そっと彼の顔を見まもって、
「ほんとに」といい合った。綽空は、うなずいて、
「ここにいて、肥えなければ嘘でしょう」
「初めて、お見かけした時は、痩せておられた」
「あのころの私は、形骸だけでしたから。――今はこうして炉に向っていても、魂までが、ほこほこ温もるのを感じてきます」
心寂が、まるくしていた背をのばして、
「誰にも、一度はそれがあったのだ――。わしなども」
恥かしそうに何か回顧する。
「そうそう」と、念阿がそれを話した。
求菩提の心にもえていたころの心寂には、こういう俗縁や市塵の中にいては常に心が乱されて、ほんとの往生境には入り難い。――こう彼は考えて、上人に、遁世を願った。上人はゆるされた、心寂は草鞋をはく時、

（いずれ、再会は極楽で）といって、立ち去った。
それから彼は、河内の讃良にながれていた。そこの奇特な長者の後家が、まことに信心のふかい善尼なので、彼の望みをかなえてやろうと、林の中に、一つの草庵をつくり、食物はあげるから、思うさま念仏してお暮らしなさいといった。心寂は、
（ここぞ、わが菩提林）と、鳥の音に心を澄まし、三昧に入っていたが、やがて、三年四年となるうちに、同門の人々はどうしたろうかとか、上人はご無事でおられるだろうかと、やたらに人間のことばかり考えられてきて、朝夕長者の住居から食べ物を運んでくれる小さい子供にまで話しかけてみたくなったり、雨ふるにつけ、風ふくにつけ、心は、かえって、世間にばかり囚われてしまって、まったく最初考えてきたような雑念なき俗縁なき清澄な菩提は求められなくなってしまった。
あわてて四年目に草鞋をはいてふたたび都の上人のもとへ帰ってきて、面目なげにその由をいうと、上人は、
（よい旅をなされた。学問があっても、智者でも、道心のない者には、その迷いは起らない。菩提へ一足近づかれたのじゃから）
叱られるかと思いのほか、上人は随喜されたというのである。
「いや、そんな昔ばなしをなされては、面目ない」と、心寂は、友の話をうち消して笑った。

三

「念阿どの」と、こんどは心寂から攻めた。
「他人のことばかり仰せられずに、ちと、あなたのことも、話していただきたいものじゃが」
「いや、わしにはなんの話もない。――それよりは、蓮生殿こそ」と隣にいる蓮生房の顔をのぞいた。
治承、寿永の戦いに幾多の生死の下を実際に歩いてきた熊谷次郎直実の話を、同房の人たちはよく彼の口から聞きたがった。だが、蓮生は、
「は、は、は、は」もう白髪まじりのまばらな髯の中で、坂東武者らしい大きな口をすこし開いて笑うだけだった。
いつも、こう笑うのが、彼の答えなのである。
でも今夜は、それに少し言葉をつけ加えて、
「この年になって、何の戦ばなし、お恥かしいことでおざる。てまえも、ここの上人にお目にかからぬうちは、いっぱしわれも坂東侍の強者と、大人びた豪傑気どりを持っていたものでおざったが、ひとたび、発心して、念仏門に心の駒をとめてからは、回顧のことども、すべて児戯のような心地がするのでおざった。なんといわれても、冷や汗が出申すのじゃ」といった。つつましく、数珠を爪ぐっていた禅勝が、
「なかなかおゆかしい」とつぶやいて、
「蓮生どのは、あのように謙虚には仰せられるが、わた

くしが、法然上人の教義というものを初めて存じ上げたのは、まったく、蓮生どののお手引でした。永年の間、天台の古学にも救われず、秋葉の蓮華寺に、ただ老い朽ちる私であった所を、そのころ、一筋に浄土門へ入って、名も恋西と申されていた熊谷入道どのにふとお目にかかり、吉水にかかる上人のおわすと聞いて、一途に都へ上ってきたのでございました。もし入道が熊谷の帰途に、私の寺にお立ち寄りくださらなかったら、あるいは、私は生涯ここで有縁のよろこびを皆さまと共に味わうことができなかったのではないかといつも思うことでございます」と、感謝していった。

綽空は、黙然と、人々の話を聞いていたが、ことに、熊谷蓮生と禅勝の話には、心をひかれて、

（自分にも、もしあの朝、安居院の法印と四条の橋で会わなかったら……）と今さらに、その時の機縁に対して、掌を合わせずにいられない気がする。奥で、咳声がきこえた。

「お目ざめか」上人の気配は、室を距てていても、すぐ弟子僧たちの胸にうつった。この寒気に、この間うちから喉を傷められているふうなのである。

「お寝みを障たげてはならぬ」

「お煎薬をわかそうか」思い思いに、人々は、炉のそばから冷たい室へちらかって行った。

屋根の下

一

年を越えて間もない正月の半ばだった。

白い驟雨が、煙のようにふきかけて暮れた宵からである。刻々と夜半にかけて、暴風雨はひどくなってきた。眠りについた人たちが、

「雨がもる」と起き出して騒ぎたてた。

綽空は、紙燭をつけて、室の外へ顔を出したが、すぐ消されてしまった。禅房の戸が、ふくらむように、がたがたと鳴っていたが、そのうちに、上人の寝屋の戸が外れて、車を廻すように、豪雨の庭へころがった。

「お師さま」

「上人様」まっ暗で、誰かわからないが、もう幾人もの弟子が、上人の室を案じて、そこに集まっていた。

屋根の一端が暴風雨にさらわれてしまったものと見えて、白い雨水が、ぶちまけるように梁から落ちているのである。もちろん、灯りは努力しても一瞬も持っていなかった。

綽空を初め、蓮生や、念阿などの弟子たちは、その暗い片隅に念仏の低い声がきこえたので、皆、その一所にかたまり合った。それが、師の法然だったのである。

せっかく、年暮のうちからすこしよくなったお風邪を

ぶりかえさぬように、弟子たちは、身をもって法然をかこみながら、念仏に和していた。
暴風雨はなかなかやみそうにもない。みりみりと、梁や柱がさけぶのだった。戸は、二枚三枚と奪われて行って、庭が、湖のようになっているのが豪雨の中にものすごく見える。
その中を、誰か、ざぶざぶと膝まで水に浸して歩いてくる者があった。
「綽空様」と、家のまわりを呶鳴ってあるいていたが、やがて、戸の外れたところから、
「綽空様はおられますか」と中をのぞいている。
頭からずぶ濡れになっているその男を、人々が見て、隅のほうから、
「おられるが、どなたじゃ」と、たずねた。
「性善坊でございます」と、その影はいう。
「おう」綽空はすぐ立ってゆこうとしたが、思いとまったように、法然のそばに坐ったまま、
「なんぞ、用か」といった。
「この暴風に、お変りもあらせずやと、お見舞いにうかがいました」
「よう来てくだされた。しかし、見るとおり、上人にも、お変りはない」すると他の人々が、
「町はどうですか」と、訊いた。
「いやもうひどい有様です。ここへ来る間にも、塔の仆れたのを見ました。門や築地の壊された所は限りもありません。粟田の辻のあの大きな銀杏の樹すら折れていました」

二

このひどい大風が明け方までも吹きつづけたら京の町はどうなることか。
丸木組みのいたって粗末なこの吉水禅房の道場などは、ひとたまりもあるまいと、人々は、上人のまわりに固唾をのんでいた。危険を冒して、その中を見舞いに来た性善坊はやがて、
「では、お暇いたします」ざぶざぶと、ふたたび豪雨の闇の中へ帰って行った。
上人は、自分の側から立たない綽空の顔を見て、
「垣の外に流れがある。常に来て案内を知る者ならば墜ちることもあるまいが、見てやりなさい」と、ささやいた。
「はい」綽空は、上人の思いやりをありがたく思いながら、廊下を伝わって行って、性善坊の影を、窓からさがした。
「綽空さま」性善坊は、まだそこに立っていた。篠をつくような雨を浴びて――。
ここの門で、師弟の袂をわかつ時に、決して、訪ねてくるな、会いにくるなと、かたく誡められていたので、常に、心にかけながら来ることができなかったのであるが、今夜の大暴風雨を幸いに、性善坊は、駈けつけてきたのであった。――でも、同門の人々や、上人の前

で、親しい言葉をかわすことができなかったので、心残りに、まだそこに佇んでいたものと見え、窓に、綽空の顔を見ると、とびつくように寄ってきて、昔ながらのことばで、

「お師さま！」と、濡れた顔を下からのぼした。

「上人のお心づけじゃ、そのあたりに、山水の流るる溝がある、気をつけてゆけよ」

「はい」

「そちは、以来、無事か」

「聖光院の御門跡もかわりましたゆえ、青蓮院の僧正におすがりして、尋有様と共に、僧正のお給仕をいたしております」

「弟もやっているか」

「静かに、ご修行でございます。しかし、近いうちに、慈円僧正には、ふたたび、叡山の座主におつきになられるようなお話でございますから、そうなると、滅多にお目にもかかれなくなろうと思われまする」

「わしのことは、くれぐれ、案じてたもるな、この通り、ひところよりは、心の決定を得て、体もすこやかに暮しておる」

「慈円様にも、御安堵のようにお見うけ申されます」

「こよいの暴風雨で、青蓮院のほうも何かと騒がしかろう。わしの見舞よりは、僧正のお身のまわりこそ――」

「はやく、もどれ」といいながら、窓をしめた。

三

「ひどいことでしたな」

「えらい暴風雨もあったもので」

「こんな大風は、もの心ついてから覚えがないわ」けろりと晴れた翌る日の青い空を仰ぎながら、町の人々は、倒壊した人家だの、流された橋の跡だの、巨木の薙倒された並木などを見て歩いていた。

吉水の禅房は、山ふところに抱かれていたせいか、比較的に、被害のすくないほうだったが、それでも、屋根は半分も剥ぎとられていた。

「降ったらすぐ困る」

「雨よりは、寒さが防げぬ。せめて、上人のお部屋でも先に」と、禅房の人々は、軒へ梯子をかけ、法衣の袂をからげて、屋根へのぼっていた。

「手伝わせて下さい」

「茅を持ってきました」

「雨戸を繕いましょう」信徒たちが群れてきて、米を炊いでくれたり、門を起してくれたり、思いのほかに、この損害はたちまち直されそうに見える。

下から揃えて送る茅を受け取って、屋根のうえでは、蓮生と綽空と、四、五人の者が、せっせと、屋根の繕いをしていた。梯子の途中にも一人いて、それを取り次ぐ。

綽空や蓮生は、もとより馴れない仕事であったが、弟

子僧のうちには、自分で人手を借らずに一庵を建てたというような経験のある者もいて、屋根は巧みに葺かれていく。

押しぶちを打ったり、茅の先を切ったり、綽空も働いていた。そのうちに、温かい握り飯も下からくる。食べ終るとまたすぐに作業にかかる。

誰の口からともなく、念仏の声がながれ初めた。屋根のうえにも門を起す群れにも、家の中に働いている者からも、念仏が洩れて、ひとつの明るい唱和となった。

庭先に、巨きな栂の木が泥水の中に倒れていた。他の樹も、あらかたは、根を剥きだしているのである。――見ると、そこに一人の体の巨きな僧が、毛脛をだし、袖をたくしあげて、まるで土工のように真っ黒になって働いている。溜り水に道をつけ、鍬で土を掘っては、一本一本、樹の姿勢を元のように起しているのだった。

その僧だけは、初めは、むッつりと汗と泥にまみれて黙っていたが、いつか他の人々の唱名につりこまれて、やはり、念仏をとなえながら鍬をふるっていた。

屋根のうえからふとその男を見て綽空は、あっと、意外らしい声をもらした。

気がついたのであろう、鍬をやすめて、下の僧も屋根を仰いだ。そして、

「……」何もいわずに、ただ、にこと笑った。以前の弟子の覚明なのである。

すると、綽空のそばにいた熊谷蓮生が、

「おう、太夫房」と、これは久しい前からの知り人らしく、屋根の上から声をかけた。

四

熊谷蓮生の毛脛が、屋根から梯子を伝わって降りてきた。

下にいた覚明は、泥を浴びた顔に笑みをたたえながら、鍬をそこに抛って、

「やあ」と、懐かしげに近づいてきていった。

「久しぶりだ、実に何年目だろう」

「十七、八年になる」熊谷蓮生も手を伸べて、旧友の手をにぎりしめる。

「貴公と初めて会ったのは、寿永の年か」

「いや、治承四年だ」

「貴公たちは、木曾義仲の幕下として、京師に入り、われらは、頼朝公の東国兵と共に、平家の本拠をついて都へなだれ入った。――たしかあの年だったかなあ」

「その以前にも、一、二度はお目にかかっていたが」

「なにしろ、久しい」

「変ったのう」

「世の中も、わが身も」

「夢だ、一瞬だ」

「しかし、お互いに、戦場を駈けあるいて、修羅のなかに、幾多の人を殺め、羅刹にひとしい血をあびて、功名を争った者どもが、こうして、無事安心のすがたを陽の下に見合うことができたのは、倖といおうか、めでた

いといおうか、思いもよらぬことだった」蓮生が、沁々(しみじみ)といって、樹陰の石に腰をおろすと、
「まったく！」と、和しながら、覚明もそこに身を並べていう。
「――これも皆、仏光のおかげだ。もし、いささかの発心もなかったら、俺などは、今ごろ、どうなっていたか知れぬ。けれど、俺は木曾殿がああいう亡滅をつげたので、流浪の身となったもやむを得ぬし、身の安住を求めながら心の安住も求めてついに仏門に辿(たど)りついたのだが、熊谷殿などは、俺とは比較にならぬほどの武功もあり、時めく鎌倉の幕臣として、これから大名(だいみょう)暮しもできる身を、どうして、武門を捨ててしまわれたのか。俺には少しわかる気もするが、世間の者は、ふしぎに思おう」
「それが一向、ふしぎでも何でもないのだ。今考えても、こうなるのが当然だった」
「そうかなあ」
「考えてみるがいい。功名に燃え、野望に燃え、物質の満足を最大な人間の行く先と夢みていたころなら知らず、年齢(よわい)をかさね、泰平に帰って、よくよく落着いて自己のまわりを考えてみると、そこには、修羅の声や、血なまぐさい死骸の山こそ失(な)くなったが、依然として、功利を争う餓鬼(がき)のような犬は絶えない。譎詐(きっさ)や権謀(けんぼう)や、あらゆる醜い争闘は、むしろ、血の巷(ちまた)よりは陰険でそして惨鼻(さんび)だ。そういう仲間にいれば、自分もまた、生涯その醜い争いに憂身(うきみ)をやつしていなければ、たちまち、他から陥(おと)しいれられてしまう。どうして、そういう所に、人間の安住があろうか。――かたがた、過去の罪業のおそろしさや、世観(せかん)の一転が、地位名誉をかなぐり捨てさせて、自分をこの吉水の上人の名を慕わせてきたのじゃ。なんの不思議もない、自然の歩みだった」

五

「なるほど」覚明は、大きくうなずいた。そして、熊谷蓮生の黒い法衣(ほうえ)のほか一物も着けない姿を見直して、おのずから頭のさがる気がした。
「その醜土から抜け出してみると、よくもまあ、あんな中で、たとえ半生でも送っていたと、俺も時々、過去をふり向いて慄然(りつぜん)とすることがある」
「して、太夫房」と、蓮生は、覚明の顔をまじまじと見て、
「貴公は、常々、法筵(ほうえん)でも見かけたことはないが、どうして、今日はここへきて手伝っているのか」
「いや、飛入りだ」覚明は、磊落(らいらく)に、頭へ手をやった。
「――実は、こういう場合でもなければ、師のお側へ近づけないし、師の房が、屋根の上で、あんな下人(げにん)のする業(わざ)をもなすっているのに、手をこまぬいて見ているわけにもゆかん。そこで俺は、誰に頼まれたわけでもないが、倒れている庭木を起して植え直しているのだ」
「ふうむ……。貴公の師とよぶ人は、上人ではないのだな」

「あれに上がって、屋根繕いをしている範宴少僧都――。いやここへ入ってから綽空と名をあらためたあのお方だ」
「ほ……。綽空殿の？」
「時に、頼みがあるが肯いてくれないか」
「わしに？　何か」
「ほかではないが、俺は、どうしても、師の綽空様のお側にいたい。けれどそれを師にすがって見ても無駄はわかっているので、きょうまで、控えていたが、師と離れている俺は、飼主を失った野良犬のようにさびしい。ともすると、せっかく、築きかけてきた信仰もくずれそうな心地さえする」
「そうか。綽空殿と共に、ここにいたいと願うてくれというのじゃな」
「そうだ」
「師弟の心情としてそうあるはずだ。待っておれ、綽空殿に、話してきてやる」
「いや」あわてて覚明は手を振った。
「綽空様からは、必ずとも、ここへも訪ねてくることならぬといい渡されているのだから、今日、俺がここで労いているのでも、あるいは、お叱りの種となるかも知れぬ。どうか、上人へおすがり申して、お声をかけて戴きたいのだ」
「ははは。木曾殿の猛将といわれた太夫房覚明も、法の師には、気が弱いの。よしよし、上人にお打ちあけして、貴公の頼みをとりなしてみよう」
「たのむ」覚明がふたたび鍬を持って立つのを後にして、蓮生は、上人のいる室のほうへ歩いて行った。そして、壊れたつま戸や屏風を立てまわして端居している法然の前へ行って、何かしばらく話しているらしく見えた。

六

「綽空どの」屋根を仰いで、念阿が呼んだ。
「――上人が、お召しですぞ」と、下からいう。
綽空は、屋根から下りて、流れで手足を洗ってから上人の室へ行った。熊谷蓮生がそばにいる。
「なにか御用ですか」
「うむ」上人の顔は明るい。ゆうべの暴風に禅房をふき荒されてかえって自身の風邪の気はすっかり癒えたような顔つきである。
「……太夫房覚明という者が労仕の衆の中におるそうじゃの」
「はい、見えております」
「おん身を慕って、この禅房に、置いてくれという頼みを、蓮生からすがってきた。なんといたそう」
「成らぬことに存じます」
「なぜの」
「綽空にはまだ、人の師たる資格ができておりませぬ。また、上人に給仕し奉る一沙弥の私に、付人などは持たれませぬ」
「じゃが……」上人は考えこんだが、すぐ白い眉をあげ

て、
「この法然がゆるすと申したらどうあろうか。念仏門の屋根の下には、階級も、事情もないはずじゃ。何ものにもこだわらず、あるがままに平等な姿であるのが念仏者じゃ」
「お返し申すことばはございませぬ」
「では、おまかせあれ」
「はい」
「蓮生、伝えてやれ」熊谷蓮生はすぐ起って、
「よろこびましょう」と、外へ出て行った。
　覚明は、雀躍りして、やがて綽空の前にひざまずいた。
綽空は、叱った。
「なぜそんな礼儀をする。上人のおゆるしによって、お汝も入室されたのだ。今日からは、いわば綽空とも同様な同寮の清衆であるのだ。この身に侍くなどと思う心をすてて、お身と共に、念仏に専念することじゃ」
「ありがとう存じます」覚明はそういわれた旨をよく体して、禅房の末座に加わって、薪を割り、水を汲んだ。
　念仏の屋根の下に、またこうして一人の信仰の友がふえたのである。暴風雨の破損もやがてすっかり修繕されて、冬の夜の炉べりは賑やかだった。
　生む力、殖えてゆく力、念仏門の信仰は、春の土壌のような無限さをもって、日月の光のとどかない所にも念仏の声はあるように弘まって行った。したがって、（ぜひ、上人のお膝元に）と、入室を願ってうごかない熱心な求道者も、断りきれないほど日々訪ねてくる。
　綽空は、同房の混雑に、その年のすえ、岡崎に小やかな草庵を見つけて、そこへ身を移すことにした。
　勿論、日ごとに、岡崎から吉水へ通って、上人に仕えることと易行念仏門の本願に研鑽することは一日とて、怠るのではなかった。

岡崎の家

一

岡崎の草庵の地は、松に囲まれた林の陰で、その松のあいだから白河の流れが透いて見えた。うしろは、神楽岡の台地である。近衛坂を下る人の姿が、草庵の台所から小さく望まれるのであった。

綽空は、毎日、その坂を越えた。吉田山から鳥居大路へ出て、吉水の禅房へ通うことが、どんな風雨の日でも、休みなき日課であった。

もちろん、炊ぎのことも、朝夕の掃除も、まったく一人でするのであって、まだ筧が引いてないので飲水は白河へ出て汲んでくる。

冬空の星を仰いで、吉水から帰ってくると、いつも夜はかなり遅くなった。それから薪をくべたり炊ぎをしたりするので、寂として独りで粥をするころには、もう、洛内のすべての灯が消えて、天地の中には、ここに粥をすする独りの彼のみが起きているのではないかと思われるような時刻になってしまう。

「はての？　……」ある日の夕方である。

綽空は、草庵の戸を開ける前に、ふしぎな思いに打たれて辺りを見まわした。

今朝、草庵を出る時は、落葉で埋まっているほどだった門口が、きれいに掃かれていて、しかもその落葉まで一所に集めて焼いてある。

裏へ廻れば、水桶には水が汲みたたえてあるし、板敷も拭き潔めてあるではないか。また、屋内へ入って見てから、綽空はさらに眼をみはってしまった。

燭の灯皿には、油がつぎいれてあって、付木の火を移せば足りるばかりになっているし、夕餉の膳までもそこにできていた。

「誰であろう」と、考えこんだ。

この草庵へ移る時に、実直に手伝ってくれた近くの農家の夫婦か――でなければ聴法の席へ来るうちの信徒の者か。

「いぶかしい」誰を挙げてみても、思い当る者はなかった。同時にまた、その人の思い出せないうちは、この夕餉の箸も、取ってよいか悪いかに迷わずにいられない。

だが、行きとどいた細かい心づかいは、すべて、好意の光であることに間違いはない。その好意に対して、徒らな邪推や遅疑を抱くべきではあるまい。綽空はそう解して、箸を取った。

翌る日もそうだった。次の夜も帰ってみると草庵は清掃されてあった。

それのみではない。薄い夜の具に代って、べつな寝具が備えてある。決して、ぜいたくな品ではないが、垢のにおいのないものであった。

二

それは、幾日かの謎だった。しかもほのかに、女性のにおいの感じられる謎なのである。

陶器一つにも、身に着ける肌着の一針にも、絶対に、女性の指に触れないもののみで潔浄を守っている僧の生活なのである。どんな微かにでも、女粉に触れたものはそれを感じる。なやましい移り香を感じる。

綽空は、その夜の具にくるまれて、この幾夜かを、ふたたび夢魔に襲われとおした――いや魔というべくは余りに和らかい悩ましさである。梨の花の甘い香いにも似ている、木蓮の肌理の細かな感触にも似ている、どうしても、この蒲団の綿は、女手でつつまれたものである――女の真ごころのように綿が温かい。若い一寒僧には、余りに温かすぎるのだった。

しかし、謎は謎のまま、幾日かつい過ぎた。そういう詮議だてさえしている遑のないほど現在の綽空は、吉水の法門がその日その日の心の梁であった、張りつめていた。

その日は、どういうこともなく、信徒たちの集まりもなく、師の法然上人も不在でありするので、まだ陽の明るいうちに、めずらしく岡崎の草庵へ綽空は帰ってきたのである。

すると、草庵に近い松林の小径で、ひとりの被衣の女に行き会った。ちらと、樹の間にそれを見たとたんに、綽空は、どきっと、妙なものに胸をつかれた。

すぐ、常に抱いている謎へ、

（あの女だ）と、いう囁きがのぼって、何か犯している罪に耳でも熱くなるような動悸が打ってくる。

そういう軽い狼狽を、綽空は、その女ばかりでなく往来でゆき会う女性にもよく覚えるのだった。その度ごとに彼は、自分の道念の未熟さを悲しむのであるが、二十年の難行道も、新しく享けている易行道の法の慈雨にも、これだけはどうにもならないものを感じるのである。そういう鍛えのある自分と、女にときめきを覚えさせられる刹那の自分とは、まったくべつな者のようにしか思えなかった。

（もし……）と、よほど、彼は声をかけてみようと思った。松落葉のうえを、音もなく歩いてくる女性は、ほかに避ける道もないので、彼の法衣のそばを、そっと、摺れちがって行こうとするのである。

が――女は、やや姿態を曲げてわざとのようにその時被衣を横にして顔をかくして通った。で、綽空も、（どこかで見たような？）と思いつつ、ことばをかけずに行き過ぎてしまった。

十歩ほどあるいてから振向くと被衣の女も、ちらとこなたを見て足ばやに行ってしまった。ふところから小鳥でも逃がしたように、綽空は心をひかれて、その影が、白河の河原の低い蔭になってしまうまで佇んで見送っていた。

三

――なぜあの時よびとめて、名だけでも訊いてみなかったか。

綽空は、草庵をとざして、夜の孤寂に入ってからも、瞑想の澄心を、それのみに結ばれてしまうことを、どうしようもなかった。

ほとほとと外を軽く打つ者がある。また悪戯な林の獣どもかと、しばらくすててておくと、

「庵の主はお留守か」明らかにそういう。

「――燈火の影を見うけて立ち寄ったものでおざる。苦しゅうなくば宿をおかしくださるまいか。決して、怪しい者などではありません」綽空は起って、

「旅のお方か」

「されば」と、戸の外で言葉をうける。

「さすらいの琵琶法師です」

「ただ今、あけて進ぜよう」戸を開けると、星明りの下に、一面の琵琶を負った盲人が杖ついて佇んでいた。こなたから声をあげぬうちに、

「はての？」盲人は小首をかしげて、

「あなたは、範宴少僧都ではないか」

「おう、加古川の峰阿弥どのか」

「やっぱり範宴どのか」

「今では念仏門の法然上人のもとへ参じて、綽空と名を改めておりますが、仰せのごとく、その範宴です」

「そうそう、そういう噂は疾く聞いていた。……しかし、ご縁があるのじゃのう、なんでも、この辺りに住まわれているとは承っていたが、よもやこの庵が、あなたのお住居とは思わなかったに」

「まず、お上がりなさい」綽空は、取りとめのない雑念から救われたような気がして、峰阿弥の手をとった。松の実を、炉に焚き足して、

「お久しいことでしたな」

「まことに」峰阿弥は、琵琶の革緒を解いて後ろへ置きながら、

「あなたは、ずんとお変りになりましたな。お体も健やかになられた。お心も明るくなった。そして真向きに現在のご信念に坐っておられる。祝着にたえませぬ」と、見えるようなことをいう。

けれど綽空は、この法師のすさまじい「勘」の力を知っている。目あきに見えないものすらこの漂泊人は見えることを知っていた。

「そうでしょうか。そうお感じになりますか」

「よう分ります。あなたの五韻の音声が数年前とはまるで違っております」

この通りな峰阿弥である。そう説明されてみれば、わずか四つの絃に、森羅万象の悲喜さまざまな感情を奏でて人を動かそうとする芸術家である以上、人間の音声をもって人間の健康や心境を聞きわけるぐらいな耳は当然に持たなければならないはずであるし、わけてこの法師のするどい官能からすればいとやすいことに違いなか

ろうが、綽空は、そういいあてられると、さらに、その奥の奥までを、透明に、見すかされているような気がして、恬然としておられなかった。

四

炉にくべた松の実は、ほどよい火になって、ほかほかと無言の二人を暖めた。峰阿弥は外の木枯らしに耳を澄まして、

「冬もよいなあ」と、しみじみという。

「行きなやむ霙の夕ぐれは辛いと思いますが、辿りついた家の情けで、こうして人心地のついた時、そして、家の主と共に話しながら炉の温もりに浸る時、やはり生きている欣びを覚えますわい」

「ですが、峰阿弥どの」綽空は、真面目な態度を見せて、こう改まった。

「私には、まだこの寂境の独り居が、ともすると、雑念の思いにふける巣になって、しみじみ、孤独をよろこぶまでにはいたらない。近ごろは念仏専念に、いささか心の安らぎはあるが――」

「ご無理もない……。人間じゃもの。なぜあなたは、もう一歩出ないか」

「出ないかとは」

「申しかねることじゃが、そのお若い血を、制えようとなさるか」

「……」

「わしのような破戒僧になり召されとはいわぬ。風雅へ逃避なされともすすめぬ。しかし僧侶の生活を離れて見て初めて僧侶の生活が分ったような気がします。大きな問題じゃ、まずその生活の根本義から僧侶は今の矛盾をすてて、大道に立ち直らなければなりますまい」

「私も考えているのです」

「人間の中の仏教でなければならぬ、あの世の浄土ではもう人が承知せまい、現世が極楽であり、現世が住みよく、楽しく、明るいものでなければなりますまい。その教化に立つ僧侶の生活はどうでしょうか。――わしがまずお手本じゃ、隠れてすることなら咎めぬが、人に見つかったが最後、女犯という、堕地獄という、破戒僧という、あらゆる鞭に追いまわされる。

そのくせ、高野の学文路にせよ、叡山の坂本にせよ、法城のある麓には必ず脂粉の女があつまる。その女たちの相手は誰か。また、寵童の行われるのも、僧侶のあいだに多いと聞きまする。おかしなことのようですが、考えてみると深刻な問題です、人間の第一義ですからな」

「……」綽空はそこにいるのかいないのか分らぬように黙然としていた。峰阿弥は、ふと話題を一転して、

「ははは。あなたとお目にかかるといつもこうした話だ。私に何かそういうことをいわせるものをあなたが感じさせるのじゃな。肩がころう。……そうじゃ、かかる夜こそ、一曲弾きたい、聞いてくださるか」

「望むところです。ぜひ、聴かせていただこう」

「何を語りましょうな」後ろの琵琶をひきよせて、峰阿

弥はその痩せている膝の上へかかえあげた。

五

「オオ寒！」風の子のように、冬の月の下を白河の河原へ駈け下りてきた足の迅い人影がある。

子どもでもなし、大人とも思えない、矮小で脚の短い男だった。頭の毛を、河童のように、さんばらに風に吹かせて、

「こん夜は、貧乏籤を引いちゃったぞ、仲間の奴らは、さだめし今ごろは、暖まっているにちげえねえ」洛内のどこかへ、急な用でもいいつけられて行ってきた帰りか、それは、天城四郎の手下のうちでも、一目でわかる例の蜘蛛太。

河鹿が跳ぶように、石から石へと、白河の流れを、足も濡らさずに渡り越えて、神楽岡をのぼりかけたが、

「おや？」と、立ちどまって耳をたてている——

「琵琶の音がするぜ。はてな、こんな所に邸はなし……」ふと見下ろすと、赤松の林の中に、ポチとかすかな灯があった。琵琶の上手下手を聞きわける耳のない蜘蛛太も、足をしばられたように聴き恍れていた。

「誰だろう？」好奇心も手伝って、——またその妙な音色にも釣られて——蜘蛛太は坂の途中から熊笹の崖を降りていた。

やがて出るや秋の夜の

秋の夜の

月毛の駒よ心して
雲井にかけた時の間も
急ぐ心の行衛かな
秋や恨むる恋のうき
何をかくねる女郎花
我もうき世のさがの身ぞ
人に語るな

この有様も恥かしや

「小督だな」平曲はちかごろ流行っているので蜘蛛太にも、それだけわかった。

忍び足して、裏の水屋の隙間からのぞいてみた。ぬるい煙が顔を撫でる。炉ばたには黙然と首をうなだれて聞き入っている人があるし、一人はやや離れて琵琶を弾じている。主客ともに四絃の発しる音に魂を溶けこませて、何もかも忘れているらしい姿が火に赤々と映し出されている。

「や？　……叡山にいた範宴だ、法然のところにかくれて、綽空と名をかえたと聞いたが、こんな所に住んでいたのか」蜘蛛太は、拾い物でもしたようにつぶやいて、そのとたんに、琵琶の音などは頭から、掻き消えていた。

「頭領も、知らないに違いない。こいつはまた、一杯飲める」松林を駈けぬけると、近衛坂の崖へつかまって、むささびのように迅こく登って行った。

火焔舞い

一

神楽岡から北へ十町ばかり、中山を越えて如意ヶ岳の裾にあたる、一望渺々と見はらされる枯野の真っただ中に火事かと思われるばかり大きな炎の柱が立っていて、そこに黒豆を撒いたような小さな人影がむらがっている。

この辺りは、洛外の端で、洛内を去ること遠い辺鄙な地なので、都の人は勿論用はなし、旅人もめったに通う路ではないが、もし道に迷った者があって、これこそよき人里と思いなどして、そこへ近づいて行ったらそれこそ飛んだ目に会うにちがいない。

なぜなれば、近づいて見るがよい。

そこに大きな焚火をしてかたまっている人間たちは、みな、羅生門の巣を追い出されてきたかのごとき異装怪異な男どもばかりであって、この寒い吹き研がれた冬の月の下に、野の枯草を積みあげて、人も無げに笑いさざめいている様子は、さながら、地獄絵に見る八寒の曠野に似ている。

「頭領、熱いのを、どうです」酒を暖めて、一人がいう。

「今夜は、酒はいくらでもある」と、べつな一人が、このよき夜を謳歌すると、

「ただ、不足は、女がねえことだ」誰かが答える。

「ぜいたくをいうな。きのうまでは、酒どころじゃねえ。近江くんだりまで仕事に行って、その仕事は物にならず、地武士には追んまわされ、警吏には脅かされ、そのうえ逃げこんだ三井寺の法師武者にゃ大薙刀をお見舞いされて、二日二晩、食うや食わずで、ようやく生命びろいをしてきたところじゃねえか。それを思えば、こん夜の酒は、どうせ百姓家から盗みだした地酒で味はわるいが、時にとっての天禄の美味っていうやつだ」

「理窟はよせ」と、かたわらの者が叱った。

もう少しろれつの廻らないのが、

「そうだ、俺ッちにゃ、理くつは禁もつだよ。その日その日を、こうやって、暢気にたのしく、してえ三昧に送れりゃあそれでいいんだ。なあ、頭領、そうじゃありませんか」

天城四郎は火より赤い顔をして、大きな酒の息を、氷のような月へ吐いて、

「芸なしめ、呑むと、寝言ばかり吐ざいている。そんなこたあ、泥棒商売に入る時になぜ考えておかなかったのだ。――人間のなしうることはすべて人間がしてよいことに天地創造の神様っていう者が決めておかれてあるんだ、それをして悪いならば、神様に苦情をいえ」

「そうだとも、だから俺たちは、したいことをする」四郎は、唐突に、

「汝たち、歌を謡いたかねえか」

「謡いてえ！」

「踊りたくねえか」
「踊りてえな！」異口同音である。
「じゃ、踊れ、謡え。――酒の尽きるまで、夜の明けるまで、騒げ、騒げ」

二

酒壺をたたく、鍋をたたく。
山刀を抜いて、突如、一人が踊り出すと、また二人、また三人、浮かれ腰をあげて、道化た舞をしはじめる。

行きたやな
八瀬の燈の
夕ざれば
呼ぶよ招くよ
逢いたやな
江口の舟の
君しおもえば
よぶよ招くよ
行いて何問わん
会うて何いわん
否とよ
ものも得いわず
ただ寝ましを
秋は長々し夜を
冬は戸ざして
春は眸も溶くる
夏は黒髪のねばきまで
世を外に
ただ寝ましものを

「あはははッ。つまらねえ歌を謡やあがる。だが、おもしれえや、わけもなくおもしろいぞ。もっと、底抜けの道化歌はねえか」四郎が、手をうってよろこぶと、図に乗って、
「あるとも！」と、焔をめぐり廻って、また舞いだした。

住吉四所のおん前にゃ
顔よき女体ぞおわします
男は誰ぞと尋ぬれば
松が崎なるすき男

舞いぶりがおかしいといって、一同は、やんやと手拍子をあわせて爆笑した。
盗人にも盗人の理窟があり哲学があるとみえて、ここにいる限りの人間どもは、こうして家なきを憂えない、妻なく子なく身寄りなきを淋しがらない、また、明日の食い物もなく、明日は獄吏の手にかかって河原のさらし首となろうも知れない一寸さきの運命さえも、決して悲しもうとはしない。
しかも、今の一瞬に、大満足をしているのだった。この刹那さえ楽しくあればよいとして――
ところへ。
野末のほうから風に乗って悟空のように素ッ飛んできた一粒の黒い人影があって、近づけば、それは子供か大

人かわからない例の蜘蛛太であった。
「頭領、行ってきました」新しく加わった仲間を見ると、連中は、彼の首っ玉にからみついて、
「ご苦労、ご苦労」
「さあ、飲め」蜘蛛太はその手や顔を払い退けて、
「頭領に話をすましてから飲むよ。酒はいいから、少し静かにしてくれ」

三

「どうだった、様子は？」四郎が、蜘蛛太に向ってこういった仔細は、明日の夜、仕事に入ろうと目をつけているさる長者の家構えを、敏捷なこの小男に、あらかじめ探りにやったものであった。
「だめですぜ、あの邸は」
「ふーむ、見かけ倒しか」
「そうでもねえが、五十日ほどまえに、こちとらがあの村は荒してあるので、長者の親爺は、腕のできる郷士を大勢召し抱えて、今度賊が来たら、村の者とも合図しておいて、一あわ吹かせてやると待ちかまえているんです。――そんな所へ押し襲けて行ってごらんなさい、これだけの人間が、半分も生きて帰るはずはない」
「そいつアいけねえ」天城四郎も、生命が惜しむべきものであることは知っていた。
「じゃあ、ほかはどうだ」
「あっちこっちと、見て廻ったがどこだって、戸じまりのゆるそうな邸はねえ。ここは、楽に忍べると思えば、金けも什器もねえがらん洞だし、ここには、みっしりと金がうなってるなと思うような邸には、今いったとおり、用心棒が頑張っているといったようなわけで……」
「だんだん、世の中が悪くなった……」四郎はやや興を失った。
「源氏や平家の有象無象が、討ッつ討たれつ、双六の賽みてえに天下の土地をあばき合っていたころには、こんな野原にも、金目な鎧や太刀を佩いた死骸が野良犬に食わせて捨てられてあったし、俺たちも、どこの邸へ火を放けようが、女をさらってこようが、金をかついでこようが、咎める奴はなかったもんだが、戦がやんで、侍が役人になって、百姓が豊年満作を貪るようになっちゃあ、もう、俺たちのほうは上がッたりで、すっかり仕事がしにくくなってしまった。――どうもこのごろの世の中はおもしろくねえ」述懐して、暗に乾児たちへも、このごろの収穫の貧しい理由をいって聞かせると、蜘蛛太は、小賢しい眼をかがやかし、
「頭領、そう落胆するにもあたりませんぜ。こんな時にゃいつでも用の弁じる金箱を頭領は持っているはずじゃありませんか」
「金箱を」
「忘れたんですか。――前の聖光院の門跡を」
「綽空か。あいつのことも、思い出さねえではないが、今では、法然上人の門にかくれているんではどうにもならねえのだ。俺は、いちど吉水へ忍びこんで法然房と問

答したことがあるが、あの上人だけは何だか怖い気がして、二度と吉水へ行く気になれねえ。それにあの吉水院の僧房には、平家や源氏の侍くずれが沢山いて、下手に捕まりでもしたら飛んだ眼にあうからな」
「ところが、そんな心配は御無用というやつですぜ。綽空は、ついここから、二十町ばかり先の岡崎に住んでいるんで」
「岡崎に？」四郎は、眼を光らせて、
「そいつは初耳だ。ほんとに岡崎にいるとすれば、汝たちにも、また美味い酒を飲ませてやれるが……」

四

大きな唇をむすび、顎をすこしひいて、熒々と邪智のかがやく眼をすえながら、四郎は考えこんでいた。そして呻くように、
「そうか。したが綽空がそんな所にただ一人で草庵をむすんでいるのはすこしおかしいぞ。聖光院の門跡の地位を捨て、吉水院の房にかくれ、またそこから一人で通うなどとは何か曰くがありそうじゃないか」
「ひとつ探ってみましょうか」賢しく蜘蛛太がいうと、
「そうだ、俺が出かける前に、彼奴の痛いところをつかんでおけば、なおさら都合がいい」
「じゃあ二、三日待っておくんなさい。きっと何か突きとめてくる」酒は乏しくなりかけたが、焚火の焔はいよいよさかんであるし、明日の的てもついたという理なので天城四郎初め元気づいて、なお蛮歌と乱舞をそれからも夜の四更にかけて続けていたが、やがて見張役の下っ端が、遠くから、
「警吏が来たっ」と、呶鳴ると、
「なに、警吏だと？」狩矢が、途端に二、三本、ひゅっと彼の耳のそばを唸って通った。
ばたばたと起って、いっせいに焚火の火を踏みにじるが早いか、暗澹たる煙の低く立ち迷う中を、見るまに、それだけの人数が一人も余さずどこかへ逃げ散ってしまった。その敏速なことといっては、到底、警吏などの及ぶところではない。
だが、警吏と見たのは、まったく手下の錯覚で、事実は、如意ヶ岳の尾根を通って、これから朝陽のでるころまでに峰へかかろうと隊伍を組んでゆく十人ほどの狩猟夫の連中だった。
そのうちの二、三名が、野の火をながめて、
「また土蜘蛛めが、この世をわが物顔に踊っているわい。一つ脅してやろうか」商売物の太い猪矢をとって、ひょっと四、五本お見舞申したのであった。
煙のごとくかき消えた賊の影はいったいどこへ行ったかと思うと、曠野のそれぞれな要所に潜りこむ穴があって、寒さをしのぐにも不足はなかった。
ぐっすりと寝たいだけは眠ったであろう、その翌る日、蜘蛛太はただ一人で、岡崎の綽空の庵から帰ってゆく、一人の被衣の女を見つけて、しめたとばかりにその後を尾行ていた。

五

幾日か後のことだ、綽空のすがたが夕方のほの明るい草庵の戸の前にもどってきて、例のごとく独り居のわが家へすがたを隠すとすぐに、がさがさと裏の林のあたりから落葉を踏む跫音と人声とが近づいて、やがて草庵の前に立ちはだかった天城四郎以下、数名の賊が、

「綽空、おるか」と、大声で内へいった。

「おう」と静かな答えである。

綽空はすぐ縁にすがたをあらわした。そこに、肩をいからせて立ち並んでいる者たちをながめても、かくべつな顔いろではなかった。

四郎は例によって野太刀のこじりを高く後へ刎ね、

「また、来たぞ」一言で相手を刺したつもりであろう、こういって、陰性な笑みを唇にゆがめて見せる。

綽空はわずかに顎をひいて、友でも迎えるようにいった。

「上がらぬか」四郎の左右に、これは四郎よりさらに獰猛な人相をそろえて、山刀の柄をにぎったり、拳をかためたりして示威していた手下たちは、案に相違した対手の態度にやや張りあいを失って、頭領の顔と綽空のすがたを見くらべた。

「話がついてから上がろうじゃないか。もっとも、話がつかなけれや、俺たちは、当分、ここへご滞在となるかも知れねえが」四郎の嫌がらせは例によってモチのように粘る。

「わしに、話とは」と、綽空。

「とぼけるなっ！」と、ここで四郎は特有な声に凄味と張りを急に上げて――

「この前、飯室谷の大乗院で会った時に、いいおいた言葉を忘れはしまいが」

「うむ」

「ここのとこ、職業が不じるしで、久しくうめえ酒ものめず、乾あがりかけている始末。そこでおもいだしたのがおぬしだ、金が欲しい、金をもらいに来た」

「いつかも、答えおいた通り、僧門の身に、金はもたぬ、この庵にあるものなれば、何なりと持ってゆくがよい」

「いや、ないといわさん、おぬし、手紙を書け」

「誰に」

「九条殿へ、あの月輪殿へ」

「月輪殿へさしあたって書状をもって申しあげる用もないが」

「あるっ」

「……」

「綽空、おぬしは、世間をうまく誤魔化したつもりだろうが、この四郎は騙されぬぞ。月輪の姫とのことで、ぼろを出すと叡山に逃げこみ、叡山もあやうくなると吉水へかくれ、そろそろ、世間のうわさが下火になったと思うと、またぞろ、岡崎の一ツ家に移っている。なかなかうまい！　だが四郎の眼力はそんな魔術にはかからぬぞ」

「何をいっているのか、綽空には一向にわからぬが」
「よしっ、その面の皮をひん剥いてやるから待て。蜘蛛太、てめえの見たことを、この売僧に話してやれ」
「へい」待ち構えていたように、蜘蛛太は手下の中から怪異な顔を出した。

六

そこで蜘蛛太が頭領の四郎にかわって野良犬がほえるようにいうことを聞くと、この草庵へ毎日のように通ってくる女がある、のみならず女は、綽空の留守には、洗い物をしたり夜の支度までして帰る。その帰るところを尾行てみると、九条の月輪殿のお館で、女は、姫の侍女の万野だということまで洗ってあるのだ――といって力み返るのだった。
「おぬしと、姫とが、きれいに手の断れたものなら、姫の侍女が来て水仕業の世話まで焼くはずはねえ。そうして、てめえは世間を甘くごまかしているのだ。どうだ、恐れ入ったろうが」止刀を刺したもののように四郎が言葉の結びを付けると、綽空はそれに対して、一言のいいわけをするのでもなく、
「いかにも、お汝らのいうとおりな事実はある。しかし、それは貧燈の一僧をあわれむお方の布施であるほかに何ものでもない」
「女と男の間のこと、何といおうが、俺たちは合点せぬ。それとも、俺たちのいい分に不服があるか」
「ない」
「ふん……さすがに返す言葉がねえわ」と、あざ笑って、
「しからば、月輪殿へ、手紙を書け。この男に応分の喜捨を頼むと。――話のすじはこっちでする」
「月輪殿に、何の科があろう、みな綽空のいたらぬことによる。綽空を責めよ、綽空の法衣なりと剥げ」
「ばかなっ、そんな破れ衣がいくらの飲み代になると思うか。――もうよし、くどい問答は切りあげて、また出直そう」もっと粘るかと思いのほか、四郎は手下を連れて、あっさりと引揚げてしまった。
しかし、それから四、五日後のこと。
どこへ行って戻られたのか、九条の月輪殿の門前に、一輛の輦がついて、その中から主の月輪禅閤が降りた姿を見とどけると、突然、物蔭から精悍な眼を光らせて走って来た天城四郎が今しも邸内に入ろうとする禅閤の法衣の袂をとらえて、
「待てっ」と、どなった。
禅閤はふり向いて白い眉毛の蔭からじろりと男の顔を見、すぐ何かを感じ取ったもののように、
「用事は、執事にいうてくれ」と落着いた顔でいった。
だが、驚いたのは、周囲にいあわせたこの館の小侍や稚子や牛飼たちで、
「こらっ、何するか」
「無礼者っ」隔てようとして立ち騒ぐと、
「うるせえっ」一喝して、
「めったに、俺のからだに触ると、蹴ころすぞっ。てめ

え達に用があって来たのじゃねえ、この間から、いくら使いをよこしても、ウンともスンとも返事がねえので、今日は自身で月輪殿に談合に来たのだ。黙ってひかえていろ」そして、たとえ、刃物沙汰に及んでも離すまじく示して、

「月輪殿、おれの談を聞け」と、喚きたてた。

すわ、九条殿の館の前に、何事かが起ったぞと、物見だかい往来の者が、一人立ち二人立ち、もう垣をなすほど集っていた。

七

供の侍は、ついにたまりかねて、

「おのれ、慮外な振舞いをなすと、六波羅の糺明所へ突き出すぞよ」四郎の袴腰をつかんで、月輪殿の側から引きもどそうとすると、振向きざま、

「何、おれを警吏へ引き渡す？　おもしろい、糺明所へでもどこへでも突き出してもらおうじゃねえか」

「いいおったな」組んで捻じ伏せようとすると、

「見損なうなっ」いきなり拳を侍の横顔へ見舞って、あっとよろめく腰を蹴とばした。そして、なおもかかってくる牛飼や家人たちを、ほとんど、人間視せぬほど蹴ったり投げ飛ばした揚句、そこに人垣をつくってわいわいと騒いでいる往来の者たちへ向って、

「おい見物人、めったに白昼は拝ませねえことにしている俺の面を、今日はぞんぶんに見せてやる、よく見覚えておけば何かの時の徳になろう、俺こそは天城四郎という賊の頭領だ」傲然と見得を切って――さらにまた、

「月輪殿へ忠義だてしてえ奴は、今のうちに、六波羅の警吏へ訴えてやるがいい。――だが一言断っておくが、俺が今日ここへ来たのは、決して、押込に来たのでなし、強請かたりに来たのでもない。ただ月輪殿に会って、談合したい事件があって、それも前々から手紙をよこしたうえで来ているのだ。ところが、なんのかのといって、会わせねえから、ここで当人を捕えたという仔細。――いったいこれが何の罪になるかよっ！　往来人に一つ聞きてえものだ！　しかもだ、その相談というのは、この館の愛娘と、さる坊主との間に忌わしい噂が立っている。その坊主とかくいう四郎とは、切っても切れない宿縁があるところから、その喧しい問題に、一つ思案の口を利こうと思うてやってきたのに――その親切気をも無にしやがって、この剣もほろろの扱いはどうだ。怒る方が無理か、木戸を突く奴が無理か」喚きたてて、暗に、事あれかしな群集の心理を煽動し、かたがた、自己の目的をとげようという四郎の狡猾な陰険なゆすりの手段は、思わず身の毛をよだたせる。

往来人は、彼にそういわれると、めったにそこを去ったら六波羅へ密告に行った奴と睨まれるかと、後難を怖れてただ釘づけになっていた。

しかし、その隙に、かんじんな月輪殿が、彼をおいて、門のうちへ隠れこんでしまったので、ふと、気がついた四郎は、再び火の玉のような怒気を燃やして、

「あっ、逃げやがったな」立ちふさがる家来たちを、縦横にふりとばしながら邸内へ暴れこんで、
「会わせろ、禅閤がどうしても会えないならば、姫に会おう、俺が何で来たかは、姫に話してやる、まず、侍女の万野という女を出せ」
前栽に突っ立ちながら、奥殿のうちまで鳴りわたるような声していつまでもどなっていた。
ところへ、誰か急を訴えたとみえ、六波羅侍が四、五人、馬で駈けつけてくるがはやいか、群集を追って、門前でひらりと鞍から降りた。
邸内にはまだ四郎のわめくのが、聞えているのである。

八

「まったくの四郎か」六波羅侍は、念を押す。月輪殿の家来は、
「まちがいございませぬ」ふるえながら答えた。
「よろしい、召捕ってしまうから心配いたすな」やがて後から殺到した捕吏の者を、館の外へ配置して、太刀の反りを打たせながら侍たちはずかずかと前栽のうちへ入って行った。
「あれだな」四郎の姿を認めて、六波羅侍の三名が佇むと、天城四郎は、奥殿へ喚いていたその赭ら顔を、こっちへ向けて、
「？　……」じっと無言になった。
「不敵な兇賊めっ、うごくなっ」呶鳴った侍が、逞しい体をいきなり打つけて行くと、
「畜生っ、六波羅へ告げやがったな！」呪詛の一声を、館のうちへ投げるが早いか、四郎は猛然と格闘をうけた。そして、
「野郎っ」と、相手に充分組ませておいて、ふところから抜いた短刀で、その侍のわき腹を抉りつけ、
「どいつも、近寄ると、こうだぞ」死骸をどんと突き放した。
「や、や」気を呑まれた他の顔へ、血潮で塗られた短刀を投げつけると、彼の体は、ひらりっ――と寝殿の前にある大きな松の根がたまで、風を孕んだように飛んでいた。
追いすがる間もない――するすると、その幹へ、四郎の姿は栗鼠のように迅く登っていた。
「おのれ」その下まで、侍たちが駈け寄った時は、四郎の身はすでに、一つの枝から大屋根の上へ跳び移っていて、
「馬鹿っ」と、下へ呶鳴りつけた。
言葉のうえのみでなく、顔つきにまで、その罵倒の意味を表現して、白い歯を剥きだしながら、からからと、大屋根の上で高くあざ笑った。
「てめえ達とは、体のできが違うぞ、天城四郎は、不死身なのだ、源三位の矢も、俺には通るまい」憎々しい見得を切って、大殿の屋根の峰を濶歩するように、手を振って、ばらばらと東の方へ翔けだした。
「捕れ」

「射ろ」騒ぐうちに、どこからどう失せたか、姿は見えなくなって、ただ門前の群集だけが、絵巻の妖怪を白昼に見せられたように、わいわいと騒ぎ立っていた。
「おもしろい男だ」
「悪党もあのくらいになれば、大したものだ」
「つまり、武家だの僧侶ばかりが、あまり威ばっているので、ああいう反逆者が生れるんでしょうな」
「たくさんは困るが、一人や二人は、あんなのもいたほうがいい」そんなことをいって容易に立ち去らない群集の中に、黒い法師の頭巾を頭からかむって天城四郎はいつの間にかまじっていて、
「盗賊は、まだ捕らぬか。はて、のろまな警吏だ」と、後ろへ供につれている童のような小男――蜘蛛太を顧みてにやりと笑っていた。

春信佳便

一

他人が窮すれば窮するほど、それを眺めて、おのれの快味に供えるのが、天城四郎の性格である。
まして。
月輪殿へ押しかけて行って見事に苦杯を舐めた彼は、それへ報うに、あだをもってしずにはいない。
あのことがあって間もなく、巷には誰がいい出すともなく、月輪殿に対して、はなはだ好ましくない風説がさかんに凡下どもに取り沙汰されて今や九条のその館は、市人の興味の的になっている。
どんなことかというに、いずれも取るにたらない中傷に過ぎないのであるが、衆口は金をも熔かすたとえに洩れず、それがいかにも秘密箱らしく、また、真をなして語りつたえられているから怖ろしい。
月輪殿の人格へ。末姫の玉日姫へ。その家族へ。
あらゆる嘘を飛ばして中傷の泥を塗るのであった。無論、その出どころは、四郎だった。
年を越えても冬空は蕭殺として灰色の暴威をふるっていた。建仁三年の一月の朝である。
綽空は、その朝――まだ暗いうちに岡崎の草庵を出て、白河のほとりを、いつもならば西へ下るのに、叡山

のほうへ真向きに歩いていた。
雲母坂へかかっても、まだ夜は明けなかった。
憮然として、彼はそこに立っていた。見覚えのある樹、見覚えのある石、このあたりの草は、かつて玉日姫の涙でぬれたことがある、万野の膝の下に敷かれたことがある。
暁闇の空で、大きく鴉が啼く。――綽空はまた、無言で山へかかった、力のある足どりである、この山坂を九十九夜通いつづけていたころのあの迷いを追っている足ではない。
びっしょりと、満身が汗になる。白い息を吐きながら、彼は、根本中堂の前に立った。そのころ、やっと雲は紫いろの海と化して、ほのかに、今日の太陽を生みかけている。
「……まだお寝みか」綽空は一つの僧房の裏に立って閉ざされてある戸をながめた。そこは、座主の寝所である。
やがて、中堂の鐘が大きく鳴る。汗はすぐ氷になって、綽空の肌を噛むように凍えさせた。しかし、綽空は凝然として佇立していた。
何気なく、彼の眼の前の戸をあけた僧は、そこに立っている人影を見て、びっくりしたように尋ねた。
「あッ、どなたでござるか」
「綽空にござります。座主お眼ざめなれば、お取次ぎくださいまし」
「お、範宴どのか」僧は、思い出して、いよいよ、いぶかしい面持ちをしながら、あわてて奥へかくれた。
すぐ戻ってきて、
「お通りください」と、いう。
すでに、清掃された一室に慈円は坐っていた。青蓮院を出て、慈円僧正は昨年から二度目の座主の地位について、この山にあるのであった。
「綽空か」久しく聞かなかったこの声を綽空は下げている頭の上に浴びて、
「はい……」しばらくは顔を上げ得なかった。

二

手をつかえて、顔を上げる前に、綽空はこもごもにわきあがる慚愧やら懐かしさやらで胸がふさがってしまうのだった。
九歳の童の時から子のように教えられ育てられてきたこの老師と会う時は、どういうものか、いつも御苦労をかけるようなことの場合のみである、済まないといってよいか、申し訳ないといっていいか、いやそんな生やさしい言葉ではいい現わせない感情なのである。
しかも、今朝、唐突にここへ来た用向きは、さらにこの老師にまたもや深刻な御苦労をわずらわすかも知れない問題をひっさげて来たのであった。いや、あるいは、場合によって叡山の座主たる老師をも敵とするかも知れない大事なのだ。
（どうお話し申そう）綽空はそれに思い惑う。
しかし、慈円はいつもと変らない。――幾歳になって

もまだ子供のように彼を見るくせがついている。
「見えたの、めずらしゅう」
「はい」老師の近ごろの健康のもようとか、時候の挨拶とか、また、自分が吉水へ入室してからのことどもなど、いうべきことも、詫びることも、山ほど胸にはあるのだったが、今朝はそれさえも長々と述べてはいられない綽空の気持であった。
顔を上げて、すでにここを訪おうと思い極めた時の決心を、今、磐石のように自身の胸に甦えらせて、
「今朝は、師にお願いがあって、参じたのでございます」と、いった。
語気が、異様な力を持って、慈円の耳を打ったと見え、慈円は、きらと、眉の下に眸を澄ました。
「む。……なにかの？」
「お驚きくださいませぬように……」すると慈円は和やかに笑って、
「おもとが、さようにまでいったことは、九歳の時、得度を授けてから今日まで、わしは初めて聞いた。よほど大願よな」
「大願。……真実、綽空が大誓願にござります」
「なんじゃ、それは」
「月輪殿のお末女の方、玉日姫を、わたくしの妻として乞いうけたいのでございます」
「ウウむ……」喉で何かを抑えつけたような慈円のうめきであった。さすがに動じない老師の面もただならない波立ちである。綽空はとたんにぺたっと両手をついて耳もとを茜のようにしているのだった。
「玉日を……妻に……。……妻にとか？」
「はいっ」
「……」慈円は大きく唇をむすんで天井を仰いでいるのであった。いつまでも、そうして、ふさいだままの眼であった。ポロ、ポロ……と綽空の顔の下では涙のこぼれる音がする。
やがて、慈円が、
「どういう決心で」重圧を加えるような低声でこう問うと、弦のごとく緊張つめていた綽空は言下に、
「この一身に、念仏門の実相を具現いたすために。――また、この身をも、念仏門の実光に救われたいがためにです」と、全身すべて信念の塊りのように構えて、そう答えた。

三

それなり慈円座主も綽空もじっと黙って坐っていた。ふたつの巌がそこへ生えているように。
――これは死を決して来たな。と、慈円は感じた。すくなくもそれくらいな覚悟がなければ今のことばは吐けないはずである。
――傷ましい。とも思い遣るのだった。きょうまでの経緯を何もかも慈円は知っている。そして、誰よりも案じている。誰よりも綽空の大成を祈っている。
――しかし。彼が今、突然にいい出した希望は、あま

りに問題が大きすぎる。綽空のあらゆる苦悶と仏法に対する内燃がここ数年前からその問題にあることは慈円もよく知っていたし、芽生えのころから彼を見ている師としての理解も充分持っているつもりであるが、さて、こう現実にその解決を迫られても、所詮、僧として、いわんや天台の座主として、

（よし）とも、

（よかろう）とも、いい得ることではない。けれどまた、綽空が、

（玉日姫をわたくしの妻に乞いうけたい）という率直な叫びをここでするまでには、実に、何年間の苦悩、疑問、自責、そして肉体との血みどろな闘いをもとげてきた上であって、決して、一朝一夕の思いではないことも分る。

そうした暗黒の彷徨から出離して、念仏門へ一転した綽空は、そこでも、ただ易行往生の教えだけに安んじていられなかったと見える。いや、自身がすでに信念していたある真理への「鍵」に対して、法然の教理からさらにつよい信念を加えてきて、いよいよ、

（こう行くのがほんとだ）

と、臍を固めに固めたあげくここへきたに相違ないのである。たとえ、自分が反対しようが、社会が挙げて拒もうが、彼は百難と闘っても、その誓願へまっしぐらに進むかも知れない。

――弱ったことだ。慈円は、たった一言をいうのに、こうまで深刻にためらったことはない。ものを思判する自分の脳髄が是非の識別をする力を失ってしまったのではないかと疑われるほどいつまでも考え込まずにいられなかった。

「――朝のおつとめのお邪げをいたしました。お暇申しまする」綽空は、そっと、縁のほうへ身を退らせていた。

慈円は、瞑目したまま、

「待て」といった。

「はい……」素直に、綽空はうずくまる。

「すぐ下山するか」

「いえ」しばらく間をおいて――

「登りましたついでと申しては憚りがございますが、根本中堂、山王七社を巡拝して、なつかしい飯室谷へも久しぶりに、立ち寄って参るつもりです」

「体を、大事にせい」是とも非とも、綽空の希望に対してはなにも答えないで、慈円は顔をそむけて眼をうるませていた。

四

「この梅も大きくなったな」綽空は、山王の社前にある梅の樹を見あげていた。

そこらの石、燈籠、すべてに懐かしげな眼をやって、

「二十年経った……」と、独り想う。

峰から東塔の沢へ出て、やがて飯室谷へ来る間の眼にふれる物も、すべて彼とは旧知の山水である。

――十歳の年から二十年の今日まで。

彼は、ひそかに、別れを告げていた。ことに長い間、自力難行の惨身を曝した大乗院の門を仰ぐと、いい知れない感慨につつまれて、しばらく、立ってそれを仰いでいた。

今や自分は、この自力難行道の床を捨てただけに飽き足らないで、さらに、すべての僧人が鉄則としている持律戒行のすべての古い殻を蹴破ろうと決意しているのだ。三十一歳までの清浄身を、擲って、現在の僧侶にいわせれば、汚濁の海、罪業の谷ともいうであろう、蓄妻噉肉の徒になろうという意志を固めているのだ。所詮、叡山は二度と自分を容れまい――容れる雅量があるまい――今日が別れである。あしたは、綽空一箇を法敵としてこの山は鳴り怒るであろう。彼はそう思いながら、飯室谷を去った。

だが――彼の信念がそうしていかに強く固まってさても、玉日姫を力で奪ってくるわけにはいかなかった。また、彼の夢みている大誓願も、彼女以外の女性では絶対にならないのである。綽空はまた、以前とはちがう苦悶に堕ちた。

（どうしたら彼女を獲られるか）それを考えることは、真理の影を追うよりも困難に思われた。誰よりも、人間として自分を知っていてくれる師の慈円ですら、黙して答えなかった。

「いっそ月輪殿へ、自分で――」と考えつめることすらある。しかし、それがいかに狂人に似た振舞であるかをも同時に思わずにはいられない。

今、玉日姫は、世間のうわさがうるさいために、西洞院の別荘のほうへひそかに身をかくしているというわさである。例の天城四郎が館を脅やかしてから侍女の万野もその後はふっつりと岡崎へすがたを見せない。おそらく、禁足を命じられているのであろう。

そこへは、近づき難いし、姫の便りも断ち切られたが、綽空の夢は、ほとんど、ある夜はそっと彼の肉体をぬけて、姫のすがたを見ることもあった。

ことに、一夜一夜、星の光も温かい春の宵となるにつれて――

ある朝だった。

綽空は、ゆうべの夢を、紙片に書きとめて、誰にも見すべきものではないとして、自分の手箱の底に秘めておいた。

行者宿報設女犯
我生玉女身被犯
一生之間能荘厳
臨終引導生極楽

＊

叡山から降りて来た一人の寺侍がある。一枝の梅に、文書を結いつけて、五条の西洞院へはどう行きますかと、京の往来の者に訊ねていた。

五

父の禅閤は、日課のように、九条からこの西洞院の別荘へよく通っていた。

そして、奥へ通ると、

「今日はどんな様子じゃな」と、まず声をひそめて、薬湯のにおいの中に寂としてかしこまっている侍女のものに訊くのが例であった。

昼も妻戸をほのぐらく垂れこめて、青金の砂子のみが妖美く光るふすまの隅に、薬湯の番をしている侍女たちも、そこを隔てた姫の部屋を憚るようにして、低声に答えるのであった。

「ゆうべは、常になく、ようお寝みあそばしました」

「……眠れたか」父の君は、それだけのことでもほっとしたように眉をひらく。

「食べ物は……」

「お食は、どうもまだ」

「すすまぬか」と、顔が曇る。

――やがて姫の病間に入ってゆくと、そこもまた、春の訪れをかたく拒んで、昼も蔀をおろし、鏡は袋に、臙脂皿や櫛は筥のうちにふかく潜められたまま、几帳の蔭に、春はこれからのうら若い佳人が、黒髪のなかに珠の容貌を埋めて、もう幾月かを病に臥しているのだった。

「どうじゃな」父の禅閤は、そういって、姫のそばに坐る。

姫は、眸で、

（え、え……）うなずいてみせるが、何ということばもなく、そのまま、眼をとじて、黙ってしまう。

閉じている姫の瞼が、すぐ泪をつつんでしまうことが父にはわかる。不愍――とすぐ思うのでもあったし、また、

（困ったものだ）という嘆息もつい出てくる。

いったい禅閤の君は、まだ法体にならぬまえは――月輪関白兼実として朝廟の政治に明け暮れしていたころは、非常に気も昂く強く、七人もいる息女たちのことにでも屈託などしたことのない性格であったが、いつの年であったか、最愛の長男が不慮の死をとげたり、また、政敵のために廟堂から職をひく身になったり、いろいろ晩年の境遇が変ってくるにつれ、その人生観にも大きな変化がきて、禅閤という一法体になってからは、すっかり性格までが柔かになって、子にもひどく甘くなってきて、自分でも、

（わしは子煩悩でならぬ）と、人にも語るほどだった。

わけても玉日は、いちばんの末娘ではあり、他の姉はみな嫁ぐべき所を得ているのに、この姫だけが、とかく幾ら縁談があっても、

（まだ――）とか、

（あの一族の家では）とか、容易に嫁ぐといわないでもう世間なみからいえば、遅い婚期になっているのでもあるが、せめてこの姫一人だけは、老いの身の側から離したくない気もするしで、盲愛といってもよいほど、父

の禅閤の君は、この姫が、可憐しくて可愛くてならないのであった。

六

「なんぞ、食べとうないか」父の君が、やがていう。
姫は、水藻の中の月のような白い顔と黒髪とを、かすかに、横に振るだけである。
「食べんでは、人間、生きておられぬぞ」
「……」
「若い身で、なんじゃ」そっと――病人の感傷に気がねしつつ――叱るのである。
「女子の楽しみ、人と生れたよろこび、すべての春は、これからではないか」
「……」
「気をとりなおして、すこし、食べたい物でも考えたがよい。医薬士もいうた、お汝のからだには、どこというて、病はないのじゃと。ただ、心がわずろうているのじゃと」姫は、じっと睫毛に白珠をためながら、
「でも、お父さま……」何かいおうとしたが、
「すみません」と、ただ微かに詫びる。
「すむも、すまぬもない。そんな気づかいがそもそもわるい。そうじゃ、もうこの別荘の梅林も、きょうあたりはだいぶ綻びていよう、そこの蔀を上げてみい。――万野」いたのかいないのかわからぬように、几帳のうしろで、じっと俯向いていた万野は、その時はじめて、
「はい……」と返辞をして、
「姫さま、すこし、戸外の光をご覧あそばしますか」
身をのばして、姫の顔へ訊いた。
（嫌……）というように、姫は、よけいに沈んだ顔いろを見せ、さらにまた、父へ、
「わたくしは、どうしてこう不孝者に生れついたのでございましょう」それから――よよと低くすすり泣くのであった。
禅閤は、なぐさめる言葉もなく、腕をこまぬいてしまった。押し出されるように太い息が出るのであった。
姫のこういう状態が、何に原因しているかを、この父の君は、薄々知らないこともないのである。――しかしそれは父子の仲でも口にのぼせない問題だった、もし口にするならば、姫の状態をもっと悪くすることが分りきっているし、父としてのいうべき意見もいわなければならない――。それが、禅閤はおそろしかった。
願わくは、姫が、何らかの動機でこのままその心のものを解消するか、忘れてくれれば――と祈るのであったが、事実は、反対に、日と共に、姫の胸には、その病源がふかく蝕い入ってゆくように思われる。
（何としたものか）ほとほと困りぬいているらしい父の禅閤の眉はまた、子をもつ親の苦悩を深刻に抉っていた。
と――次の室で、侍女が、
「万野さま。ちょっと……」と、小声で呼ぶ。
「お医士ですか」
「いえ、お文状でございます――禅閤様へ」

「わしへ」禅閤はふりむいて、この別荘へ、誰からの使いであろうかと疑った。
「そちらへ置け。今参る」そういって、姫の枕元からそっと起ちあがった。姫は、かすかに、弱い眸で、その父の顔いろを枕からじっと仰いでいた。

七

「文状は、どこへ置いてじゃ」東園の広い梅林に向っている一室へ出てきて、月輪殿は、眼をしばたたいた。多分、暗い病室から急に明るい陽ざしの前へ出てきたので、まばゆさに、眸がじらっとしたのであろう。
表の召使が、縁の端から、
「おてがみは、お館様へ、直々におわたし申しあげたいと、使いの者は申しおりまする」
「どこからじゃ、その使いとは」
「叡山の座主様から」
「ほ。……弟から？」といって、にわかに、なつかしそうに、
「通せ」
「いえ、もうそれに控えておりますので」見るとなるほど――縁の西側に、一人の坊官が庭上に屈まっていて、声のかかるのを待っている態である。
「お汝か、慈円からの使いは」
「はい。……畏れ多いことにござりますが、この文状ばかりは、直に、お渡しせいと、申しつかって参りましたので」
「大儀じゃった」梅の枝を、その寺侍の手から取って、
「やすんで行け」と、ねぎらった。
月輪殿は、その後で、召使たちをも退けて、ただ一人になってから心静かに文状を解いた、そして読みゆくうちに顔いろに沈痛な影がうごいてきた。明らかに当惑な――そして最大な苦悩を心のうちで揺りうごかされている眉だった。
「弟も、弟ではある」その文状には、こういう意味のことが書いてあった――。今ここに一人の青年が死か生かの岐路に立っている。見ごろしになし得ない仏者である自分にも、この青年をすくうて取らす力がない。青年とはいうまでもなく自分が九歳の時から手しおにかけて愛育した綽空であるが、なんとか、ご分別はないか――よいご思案はないか――。師たる自分からも満腔の念祷をもってご賢慮におすがり申す――というような内容なのである。
「弟も、弟じゃ……」月輪殿はふたたびこうつぶやいて、眼をふさいだ、脆い老涙が睫毛からはらはらと下る。
「その分別があるくらいなら、この身とて、こう苦労はせぬ。……弟は綽空がことしか知るまいが、わしは、現実に我が子の病躯を朝夕に見て苦しんでいるのじゃ」弟の慈円が、今さらそんなことをいって遣すことが、月輪殿には、むしろ不満だった。骨肉的な軽い憤りすらおぼえて、
「この身の苦悩は、それどころか」一門の長上という身

でなければ、愚に返って、よよと泣いてしまいたいほどな感傷に禅閤ほどの人も子のためにはつつまれるのであった。だが、その感情の波をしずめて、もいちど、常の平常さをもって弟の慈円の文状を見直すと、なるほど、辞句のうえではそれだけのことしか書いてないが、言外に、一つの大きな意義を伝えているようでもある。それは、窮まる所に通ずる道のあることを暗示しているのだった。

（なんらかのご分別はないか）という言葉は、決して、単にそれだけの言葉ではなく、なにか、兄の月輪殿を叡山から叱呼して励ましているようにも聞えるのであった。

八

親戚という名に繋がっていても、平常はめったに顔を見せない不沙汰者までが、今夜は一堂に寄ったのである。月輪殿の一門といえば、それぞれ顕栄の地位にあるか、社会的に相当な生活をしている者ばかりで、いわゆる上流人のみの一族なので、よほどの問題でもなければ、こうして皆が集まることはなかった。

「なんの相談と思うて来たら、玉日を、綽空とやらいう念仏の一沙弥に娶わそうと仰せらるるよ。月輪殿の言葉と思うて、誰も、遠慮していわぬらしいゆえ、わしが、親戚一同にかわって、真っ先に申そうならば、もってのほかな沙汰という他はない。わしは、一門のために、このよいの話には、承服できぬ」いつも親戚評議というと、重きをなす老翁が、一同の沈黙をやぶってこう意見を述べると、その尾に従いて、

「どうものう……」と、賛意を拒む色が、誰の顔にも濃くあらわれた。

「第一、僧が妻帯するなどということは、法外もない沙汰じゃ。それへ、末姫を嫁りなどしたら、月輪の一門は、気が狂うたかとわらわれよう」

「いかに、綽空とやらの家柄がよいにせよ、秀才にせよ――」

「まして、悪い噂がある折じゃ。姫がどう望んでいようと、家名には換えられぬ、一族門葉の者が、挙げて、世間から非難されても、かまわぬという決心ならやむを得ぬが」

「いったい、お身があまりに、玉日を、末姫じゃと思うて、可愛がりすぎるゆえ、こんなことも起るのじゃ」

「断念されい。皆が、この通りに不承知なもの――」と、誰ひとり、月輪殿の心を酌んで、それについて、方法なり策なりを考えようとする者さえなかった。

禅閤は、絶えず、沈黙して、親戚たちの詰問を浴びているほかなかった。自分から招いて相談を持ち出したことであるが、

「月輪殿も、少々、お年を召されたらしい。こんな、明白な分別がつかぬというのは、お年のせいじゃろう」などと親類たちから笑われたに過ぎなかった。

また、それに対して、禅閤自身も、押しきるだけの自

信がなかった。親類たちの言葉はみな彼自身が考えもし悶えてもいることなのである。そして、自分の常識が、やはり大勢の者の常識であることが分ると、彼はなおさら、手も足も出なくなってしまうのだ。

「断じて、さような考えは、おすてなさるがよい。なあに、姫の病気なども、若いうちにはありがちなこと。ほかに、よい智ができれば、忘れてしまうものじゃ」親戚たちは、釘を打つように、そういって立ち帰った。

当惑の闇が、幾日も月輪殿の胸から晴れなかった。西洞院の別荘へゆけば、そこにもまた、冬のままに閉した病間が、氷室のように彼を迎えた。

きょうも、その西洞院へ、姫の容態を見にゆくといって月輪を出た禅閤は、途中でなにを思いついたか、「吉水へやれい」と、輦のうちから供の者へ向って、唐突にいいだした。

九

吉水の念仏道場は、およそ三つの房にわかれていた。二つ岩の房（中の房）――松の下の房（東の新房）――吉水の房（西の本房）の三箇所である。

上人は多く西の本房に住んでおられた。月輪殿はもう幾度かここを訪ねているので、轅をそこへ向けて、「上人に拝謁申しあげた上、折入って、御垂示をねがいたい望みでござるが、御都合のほどはいかがでござりましょうか」と、供の者に訪れさせた。

――お目にかかろう。という上人の返辞であった。

しかし今は、随身の人々へ法話の最中であるからしばらく一室でお待ちねがいたいという取次の者の挨拶なので、月輪禅閤は、庭前に小さな滝の見える一間に入って、法話のすむのを待っていた。

春はもう去りかけている。滝つぼには落花の芥が浮いたり沈んだりしていた。どこかで、老鶯が啼きぬくのである。

「――ただ今までの法然の話にて、ほぼ、往生の要に、二つの道のあることをご会得召されたであろうと思う。往生とは、必ずしも最期という意義にはあらず、死にも非ず、文字どおり、往きて生きること、すなわち、往生なのでござる。――往きて生きんかな、往きて生れんかな。御仏の功力――大慈悲の恵みこそは――生きんとする者にのみこそ、始めて無辺の照光あるものでござる」彼方の道場から若々しい力のこもった法話の声がきこえてくるのだった。法然の声なのである。

月輪殿はそこに控えている間を、黙然と、うつ向いて耳を澄ましていた。

法然の声はさらにつづいてゆく。

「――しかしながら昨日まで、おのおのの歩まれてきた道は、自力難行の聖道門でござった。同じ住むを目的とするも、その道のいかに難く、いかに惑い多く、またいかに達し難き道門であるかは、つぶさにご体験あったことと存ぜられる。では、わが浄土門他力の御法はいかにといえば、かの竜樹菩薩も仰せられたごとく――仏法

に無量の門あり、世間の道に難あり易あり、陸路のあゆみは則ち苦しく、水路の舟行は則ち楽し――とあるとおりでござる。天親菩薩は、千部の論師といわれたお方なれど、往生の一段にいたっては、あまねく諸〻の衆と共に、安楽国に往生せん――と、一心に尽十方無碍光如来に帰命したまい、曇鸞大師は、仙経を焼きすてて、他力に帰し、道綽禅師は、大集月蔵経のうちに億々の衆生、行を起し道を修すといえども、まだ一人も得たるものあらず――と末法の世を喝破してある言葉を一読して、翻然と悟って、聖道自力の旧教を捨て、浄土他力の真門に入ったということでござる。その他、わが朝の先徳にも、空也、源信、良忍、永観などみな、習い研きたる智恵も行もすてて皆、念仏の一行に、往いて生れたる人々ではござらぬか。お疑いあるな、善人も悪人も、智者も愚者も、男子も女人も、ただ、南無阿弥陀仏とのみ唱えて、深く思い入れ給うならば、百人が百人ながら、往生には洩れぬものでござる――往いて生れざる者は一人もあるべきはずのものではござらぬぞ。この身は、煩悩悪業の身なればなどと、大慈悲光の下に、要らざる退身など持ち給うなよ。弥陀は、深業の衆生のためにと起したまえるこの本願にてあるものを、強悪の身とて、煩悩の身とて、なんの障りがありましょうぞ」

滝つぼの水音と共に、上人の遠い声は、とうとうと、月輪殿の胸の底へ流れこんでくるのであった。

十

そればかりでなく、月輪殿は、この念仏道場へ来ると、いつも不思議な一つの世帯というものを感じるのだった。

この法然上人を家長とする一つ軒の下には、今、随身の弟子だけでも八十八名いるといわれているが、その八十余名の前身を尋ねてみると、小松内府重盛の子の心蓮だの、無官大夫敦盛の子の法信房盛蓮だの、その他、栄華を極めた平家の人々の没落してここに剃髪している者がかなり多くある中に源氏の大将であった熊谷次郎直実のような人物も一つ法筵の弟子として在るのであった。ことに、直実の蓮生房と、敦盛の子の盛蓮とは、仇敵の間でさえあるのに、その二人がわけても親しげにしているのを見ると、まったくこの道場こそは、呉越の人間が、前身の怨讐なく、法然のいわゆる往いて生きている人々の浄土であることが、実証されているような心地がして、はた眼にも見よいし、また、人間はこうも和楽に生活のできるものであるかと、凡の世間に馴れた眼から見ると、一種の不思議をも覚えてくるのであった。

「――お待たせいたしました。上人のご法話が終りましたゆえ、どうぞ、お居間のほうへ」

一人の弟子僧が、やがてこういって、月輪殿を、奥へ導いた。間もなく、

「失礼しました」法然のすがたが現われる。月輪殿は、

「いつもながらお健やかで――」と、慇懃なあいさつを述べ、また上人のほうからも鄭重に会釈があって、しばらくは、さりげない四方山の話に移っている。

そのうちに月輪殿は、改まった面持ちで、

「実は、今日のご法談を、よそながらうかがっておりましたが、とりわけ、今日はなにやら身に沁みる心地がいたしました。しかし私は、はやこの老齢、それに、病もあれば、かかる有難いご法話を聴き得る余生も、そう長くはないと存じおります。……ついては、今生に思い残りのないよう、今日は、心の隅まで、お打明けもいたし、お尋ねもいたしてみたいと存ずるが、おさしつかえありますまいか」法然は、ふかくうなずいて、

「何にても、お尋ねなされ。この源空が知りたらんほどは、心を傾けてお物語り申しましょう」と、打ち解けた態でやさしくいう。

月輪殿は、ほろりと眼をうるませた。よほど、思いあまったものが胸に沈んでいることがわかる。上人は、見て取って、

「わしが呼ぶまで、誰も来るな。そこの廊架のつま戸も閉ててておかれい」そういって、附随の弟子たちを遠ざけた上――

「さて、この法然に、さまでのご談合とは、いかなる儀にて候ぞ。ご懸念なく、おきかせくだされい」と、膝をすすめた。

十一

「――余の儀ではございませぬが、上人はもとより、持律戒行の清浄身におわすし、また、八十有余の御弟子たちも、みな、おごそかに戒を守っている浄行の御出家のみと存じますが。……さるを、かく申す私などは」

月輪殿は、ふと言葉を切って――自分の長い政治的な生涯を心のうちで振り返るように――

「容こそ、染衣を纏っておりますなれど、蓄妻噉肉の俗に馴れて、いまだに、美食玉住の在家をふり捨てもかなわず、こうしてただ心と行いとに、大きな矛盾を持ちながら念仏を申しておることゆえ、上人の仰せられる念仏や、御弟子たちの称える念仏とは、おのずから功力が違うものではないかと思われますがいかがなものでござろうか」

「ご疑念とは、そのことですか」上人は、月輪殿の素直な問いをよろこぶようにうなずいて、

「いわれのないお疑いです。経には、十万衆生と説かれ、釈には、一切善悪凡夫得生とあるではございませぬか。僧と、俗との間に、何の隔てがありましょうぞ。あなたの唱うる念仏も、この法然の念ずる念仏も、一です、二いろはありません」

「――けれど、女人を避け、不浄を噉らわぬ清僧の念仏と、朝夕に、妻子の恩愛には惑い、酒肉や五辛の物味

にわずかな慰安をむさぼっている吾々のような不浄の口でいう念仏とは、どうしても、差があるように思われますが」

「――お考え違いである」上人は、胸をのばした。

「――常々、申すとおり、念仏門は、一切他力本願です、愚者悪者も、浄土に、洩らすまいというのが本願である道に、なんで、さような差別がありましょう、疑われるな、ただ、念仏さえ申せば、往生を得ること、法然が牢固として信じるところでござる」

「その御教えは、幾度かうかがって、自分では解っている気がしながら、時折、また同じような疑いに惑うのでござります、怖らくこれは私一人の疑いとは覚えませぬ。――なぜならば、ではなぜ、僧は妻を持たぬか、肉を忌むかということに考えいたるからであります」

「いと易いお質問じゃ、それらの行はすべて、修行の障りとなるために、自力を頼んで排した難行道の相なのです、他力易行の門には敢てないことじゃ、あるがままの相にまかせておくのみで、こうあれと強いることはすでに難行道になろう。自力門の修行は、智恵を窮めて生死を離れ、易行門の修行は、痴愚にかえって極楽に生れるところにあるのでござる。法然とても、好むままの生活をとっているに過ぎません、努めて、肉食を忌み、女人を避けている次第ではない、ただ、今のままが、気楽であるし、自分にぴったりしているために、容をかえないだけのことです」

「では……」月輪殿は、何か大きな救いの手の下へ、歓喜してひれ伏すように、思わず声を弾ませていった。

「御弟子のうちから、一人の若人をちょうだいして、私の末姫の女と娶合せたいと考えまするが、上人に、お言葉添えをしていただかれましょうや？　……」琥珀の珠でもあるような上人の眸が、和やかな皺の中で――何もかも知りぬいて――またいかにも本意そうに、にっと笑みをたたえていた。

「それは至極なお考えじゃ、法然も、骨を折りましょう。――したが、誰を、お望みか？」

十二

ひろい講堂に隣り合って、そこも広い板敷の僧房だった。

念阿だの、心寂だの、蓮生のような長老たちは見えないが、若い弟子僧たちは、そこの大きな炉を中心にして、大家族の母屋みたいに、閑談しているのが常だった。

「茶でもさし上げようかと思うているが、いっこう、お客間から、手が鳴らんのう」

「うむ、月輪殿も、きょうはだいぶお長座いことだ」そこへ、奥から一人の僧が、まだ生後やっと十月ぐらいな嬰児を抱えてきて、

「困った困った、米の粉を掻いてくれい」

「オオ、眼をさましたか」

「泣き出すと、黙らんのじゃ」

「盛蓮は、あやし上手よ、盛蓮に負わせい」

「わたしが、負いましょう」
「わたしが、負いましょう」僧房のうちで、いちばん年下の盛蓮が、その赤ん坊を負って、ひろい講堂のうちを、

ねんねん、寝たまえ
寝ねんぶつ
ねんねん、居たまえ
居ねんぶつ
立つも、あゆむも
ねんぶつに
浄土の、門では
何が咲く
いつも、ぼだい樹
沙羅双樹

子守唄をうたって巡っていると、くるま座になっている人々が、
「ははは、盛蓮がまた、でたらめを唄っておる」
「しかし、盛蓮も、いつか大きくなったな。――平家が今も盛んならば、無官の大夫敦盛の公達なのだが」
「あの盛蓮も、平家の没落後、路ばたに、捨てられてあったのを、旅の途中、上人が拾っておいでなされたのだそうな……」
「上人は、子どもがお好きだのう。あの乳のみ子も、四、五日前に、拾いあげておいでなされたのだし……」
「捨子が、捨子を負うて、子守唄をうたっている禅房などは、日本広しといえども、この吉水よりほかにない」
笑いさざめいていると、突然、奥の上人の室から、その上人と月輪殿とが、姿をそろえて、床を歩んできた。
「綽空はいますか」上人が見廻していう。
「はい、これにおります」隅のほうで読書していた綽空が、静かに、書物をおいて、上人の前へすすんだ。そして、両手をついた。
「なんぞ、御用ですか」

十三

上人は、いつも講義をする道場の壇におごそかに坐り、月輪殿は、その側へ、さらに厳粛な面持ちをして、坐っていた。
（何事を仰せだされるのか）と、綽空は、その前へ、手をつかえたままである。
上人は、静かに、僧房の者をかえりみていった。
「心寂や、蓮生など、これに見えぬ者も皆呼んで参るように。そして一同、ここへ集まってもらいたいが」
「はい」奥房にいた長老たちも、やがて、何事かとそれへ出てきた。すでに四、五十人のいあわす弟子僧がほとんどそこにずらりと並んでいるのだ。そして綽空一人が、一同の環視の中に平伏している。どうしても凡ごとでない容子なのである。
人々は、固唾をのんで、しいんとしていた、一同が揃ったと見ると、法然は、おもむろに、こういった。
「綽空――。ここにおられる月輪殿が、この法然を介して、おん身に、ひとりの妻を娶わせたいと、今日、これ

へ見えられての仰せじゃ。……どうじゃの、妻をめとる心があるか、ないか？」

じっと、居並んでいた弟子僧たちの顔いろが、無言の裡に、明らかに動揺しだした。あまりにも意外な師の言葉として、自分の耳を疑っているような顔もあるし、また、法然と月輪殿の心理を不審かって、二人の顔を横から額ごしに凝視している者もある。

「……」綽空はと見ると、彼は、血液のある石みたいに、五体を硬くし、耳は真っ紅にそめて、依然として、大勢の凝視を浴びたまま、手をつかえているだけだった。上人が、重ねて、

「そういう意志はないか」と訊くと、綽空は初めて身を上げて――そして再び幾分か俯目になって、

「望んでおります」と、答えた。

案外にも平常の声であった。

「うむ――」と、大きく息を内へ引くように上人が頷かれたので、弟子たちは、いよいよ、この師弟の心の底になにがあるのかと思い惑った。

「では、こちらのご意中を伝えるが、おん身に、娶わせたい女性というのは、月輪殿の末姫の玉日とよばるるお方じゃという。綽空には、かねて、存じおろうと思うが……。異存あるか、ないか」綽空は、体がふるえた。

わっと、泣いて、師の上人へも、姫の父なる人へも、素裸な自分というものを目に見せてしまいたかった。そのうえで、今日までの、また今日以後の、自己の信行を語りたかった。しかしさすがに、こみあげる感激に、眸が熱くなってしまうし、胸いっぱいな歓喜と同時に、三界の大世間を、一人の肩へ乗せて立つような重任も感じてくるし、しばらくは、答えることばが出なかった。

しかし、かねてより自分から望んで、やむにもやまれなかった大誓願である。綽空は、毅然と、胸を正していった。

「ありがとう存じまする。玉日のおん方のほかには考えておりませんが、あのご息女なれば、妻にもちたいと思います。仏陀も照覧あれ、私は、偽りなく、玉日のおん方が今日まで、好きでならなかったのでございます。どうぞ、お計らい下さいませ」

同房数十の僧たちは、呆然として、そういう綽空のひたむきな態度をながめていた。

同車篇

熊野犬

一

何という忙しなさ。――夏から秋へかけて、月輪家の人々は暑さを口にしている間もない。――盆と正月がいちどに来たようだとは、召使たちのぐちだった。

何十度の親族会議がくりかえされたかわからない。親族たちも一時は、

「木の端とさえいう僧侶に、姫をくれるような家とは、もはや交際いもせぬ」

とまで、いいだしたが、断乎として、秋には婚儀を挙げさせるという禅閤のうごかない意志をみては、

「それほどにいうならば――」

と、匙を投げる者があり、また中庸をとって、和を計る者もあって、どうにか、婚儀のことが、一決したのは、土用の暑いころだった。

叡山の慈円座主は、山を降りて青蓮院にあった。そこから、月輪へは絶えず使いが走るし、月輪から吉水へ、また、五条西洞院とも、絶えず、文書の往復が交わされたりして、あわただしい日の続くうちに、もう残暑の町を、婚儀の荷が、きのうも今日も、西洞院の別荘のほうへ運ばれて行った。

「さすがは、前関白の聟取、たいそうな調度じゃわえ」

「お式は、西洞院のほうでなさるのか」

「そうらしいて」

「お道具などは、ともかく、あの花のような末の姫を、わがものにする若法師めは、いったい、何という果報者だ」

「法師は、木の端からというに」

「ああ、俺も、木の端になりたい」巷の人々は、西洞院へゆく荷物の通るたびに、羨望の眼を辻から送っていた。

「もし、ちょっとお訊ね申すが……」と、その人群へ、錫杖を止めた山伏がある。久しぶりに、峰入りから都へもどってきたものとみえ、山伏は、髯をのばし、皮膚は、松の皮みたいに赭黒かった。

「はい、なんですか」一人の凡下が、剽軽にいう。

山伏は、するどい眼で、今通った婚儀の荷を振りかえりながら、

「何か、めでたい儀式があるというが、その聟殿は、何者でござるか」

「まあ、聞きなさい」

凡下は、手振りをして、

「九条様も、物好みでいらっしゃる。七人もご息女のあるうちでも、眼の中へ入れてしまいたいほど、可愛くて

ならない末姫を、どうでしょう、人もあろうに、法然上人の弟子の端から選り出して、それへ、くれるというわけなんです」
「その弟子とは」
「綽空というんです。――なんでも、氏素性はよい人だそうですがね。……それにしても」
「綽空？」小首を傾げて――
「幾歳ぐらいな男だろう？」
「三十一、二でございましょう。なんでも、そんな話で」
「それでは以前、青蓮院の慈円僧正につかえ、後に、叡山へ入った範宴少納言ではあるまいか」
「そうそう、前には、範宴といったそうです」
「うむ！」鼻腔でこう太く呻くと、
「そうか。やはり、そうだったのか！」
怖ろしい形相を作って、山伏は、無言になった。一匹の黒くて逞しい熊野犬を後ろにつれ、杖をこつこつついて、人混みから離れて行った。

二

わん――
足の迅い飼主に追いついて、大きな熊野犬は、尾を振って絡みつく。
「黒」と山伏は、呼んで、
「馬鹿な奴だ、おれのような宿なしに従いてきてどうする、帰れ」といい聞かせている。
しかし、杖で追われても、黒は帰ろうとしなかった。山伏はてこずりながら、
「帰れといっても、貴様も帰る故郷がないのか。この弁円と同じように――」
わん――
黒は、山伏の袂を噛む。山伏は旅の道から尾ついてきたこの三界無縁の犬を、さすがに、酷くも捨てかねて、
「その代り、黒、俺と一緒に、野たれ死をしても、俺を恨むな。……それでもいいのか、おお、それでも」じゃれる黒の首根っこを膝へ寄せて、山伏は、路傍の樹の根へ、どっかりと坐ってしまう。
「疲れたなあ……腹も減るし――」
蜩の声が雨のようである。四辺の木立は暮れかけているのだ。ふと、後ろを仰ぐと、寺院の山門が見える、そして、七、八名の学僧がかたまって、立ち話になにか論議していた。
「いよいよ、世は末法だ、僧が、公然と、貴族の娘と、結婚するなどという沙汰が、なんの不思議に思われないほど、仏法も、人心も、堕落してきたのだ」一人が、書物を抱えながら、眼を剥いていう。
他の僧も、肩をそびやかしたり、法衣の袂をたくしあげて、
「聞けば、法然はそれを、むしろすすめたというじゃないか」
「なんでも、大衆大衆と、庶民の低いほうへばかり媚びている俗教だからな。――しかし、法然はとにかく、綽

空のような、いやしくも北嶺の駿足といわれた者が、なんたる破廉恥か」
「僧の体面にかかわる」
「五山の僧衆は、黙認する気か」
「苦情をいっても、個人の意志でやる分には、どうもなるまい」
「仏誅を加えろ、仏誅を」
「どうするのだ」
「撲る！」
「まさか、暴力も――」
「さなくば、婚儀の当夜、大挙して襲しかけ、彼の破戒行為を責める」
黒の毛を撫でて、蚤を取っていた山伏は、不意に杖を立てて、
「黒っ、来いっ」と跫を早めた。
石運びだの、大工だの、屋根葺などの住む狭くて汚い裏町を、山伏は、布施を乞うて軒から軒へとあるいて行った。しかし、どこの家にも、近ごろは、念仏の唱えが洩れていて、修験者の経に耳をかす者がなかった。
「――お通り」とどこでもすげなくいわれる。山伏は、舌打をして、
「忌々しいことばかり聞く日だ」と、革嚢の小銭をかぞえて、なにか、油物をじりじり揚げている食べ物売りの裏口をのぞいて、
「飯を食わせんか。俺と、犬に、これだけで――」と、貧しい銭を手にのせて、揚物をしている女にいった。

三

椀に盛った玄米と、胡麻揚をのせた木皿とが、山伏の前に置かれた。
飢えている黒は、山伏の持つ箸へ向って、跳びつきそうに、吠え立てる。
「餓鬼めが、うるさいぞ」揚物を一つ抛ってやると、黒は、尾を振って噛ぶりつく。山伏もまた、がつがつと、飯を掻っ込み初める。
傍らには、彼よりも前に、床几に掛けていた二人の客があって、板を囲んで酒を酌んでいた。これもまた、貧乏そうな法師だったが、その一人がいい機嫌になって、気焔をあげていることには、
「べらぼうめ！　僧侶だって、人間じゃないか。吾々、人間たる僧侶を、木偶かなんぞのように、酒ものむな、女にも触るなどと、決めた奴がそもそもまちがっている。矛盾、秘密、卑屈、衒い、虚偽、あらゆる陰性の虫が僧院に湧く原因はそこにあるんだ。人間にできないことを人間がやっている顔つきしているんだから無理もないわさ！　俺は、前の少僧都範宴――今は吉水の綽空が、公々然と、妻を娶つということを聞いて、こいつはいいと思った。俺は、綽空に双手をあげて、賛礼する」
「しかり、おれも同感じゃ」と、一方の相手も、唾を飛ばして、
「東寺の鴉みたいに、ガアガア反対する奴もあるが、

そいつら自身は、どうだ！」
「成ッちゃあおらん。五山の坊主に、一人だって、ほんとの童貞がいるかッてんだ！」
「綽空は、むしろ、正直者だ」
「ああいう人間が出てこなければ嘘だ。俺たちが、日蔭でぶつぶつぼやいていても始まらん、行動で示すことは、勇気が要るが、そいつを、堂々と、実践しようっていうんだから愉快だ」
「見ようによっては、彼は、仏教の革命児だ、英雄だ」
「彼のために、加盞して、大いに、祝してやろう」杯を挙げて、交驩しながら、
「あはははは」
「わはははは」
「世の中が、明るくなった」
「出かけようか」銭をおいて、二人は、ひょろひょろ出て行った。
　さっきから黙って聞いていた山伏の顔には、なんともいえない不快な色が漲っていたが、ふと、後ろ姿へ、憤怒の眼を射向けると、ついと起ち上がって、外へ出た。
　黒はまだ、木皿に残っている飯や揚物を、ぺろぺろと長い舌で貪っていた。
「黒っ」口笛を鳴らして、山伏は走った。そして先へいい機嫌で歩いてゆく二人の法師の影へ向って、しっと、ケシかけたのである。
　わん、わん！　獰猛な声をあげて、黒はもう一人の法師の脛へいきなり咬みついていたのである。
「あ痛っ」
「畜生」その狼狽ぶりを目がけて、山伏は、杖を振り上げながら、
「外道っ」と、喚いた。
　二人が、道ばたへ仆れたのを見ると、黒と山伏は、後も見ずに、闇へ紛れてしまった。

四

　一枚の蓆を、山伏は、河原へ敷いた。四条大橋裏が、蛇腹のように大きく闇へ架かって、屋根になっている。
「寝ろ」黒の首っ玉をかかえ込んで、山伏は、自分も眠ろうと努めた。
　しかし、寝つかれそうもなかった。枕元に近く瀬の水音がしているからではない。橋の上を、時折、馬や人が通るからでもない――山伏のこめかみには青い筋がふくれていた。ひどく昂ぶっているのだった。
「あんな、酔いどれの法師を撲ったとて、なんになるか、俺は愚かな真似をした。俺の相手は、綽空ではないか」
黒へ向っていうようにつぶやく。
「俺は、かつて放言した。――一生のうちには、必ず貴様の上に立ってみせると。――だが容易に俺の地位は上がらない。二十年前に、彼奴と会った時は、俺は叡山の仲間僧だったし、彼奴はすでに、授戒登壇をゆるされた一院の主だった。またそれから十年後に、大和路の

旅先で出会った時には、彼は、もう少僧都範宴となり、南都にも聞えた秀才であったが、俺は、聖護院の端くれ山伏にすぎなかった……」黒を刎ねのけて、彼は、むっくりと坐り直した。汀に刎ねた魚の影を見て、黒は、ぱっと、水際へ走った。

「それから数年、俺は、大峰へ入り、葛城へわけ登り、諸国の大山を経巡って、役の優婆塞が流れを汲み、孜々として、修行に身をゆだねてきたが、それでもまだ聖護院の役座にさえ登れず、旅山伏の弁海が、やっと本地印可の播磨房弁円と名が変って、山伏仲間で、すこし顔が知れてきただけのものだ。――そして久しぶりに、都の様子を見に来てみれば、綽空めは、またぞろ、前関白家の聟になるとか、ならぬとか、いつもながら、問題の人物になっている」忌々しげに、弁円は、小石をつかんで、叩きつけた。

その昔の寿童丸――成田兵衛の子の成れの果て、播磨房弁円は、自分の幼少と、綽空の幼少時代とを、瞼に描き較べていた。

二十幾年の歳月が経っている――。綽空が、十八公麿とよばれ、自分が寿童丸といわれたころは、共に、一つ学舎へ通っていたものである。そして、彼が落魄れ公卿の子と嗤われ、ガタガタ牛車で日野の学舎へ通う時、自分は時めく平相国の家人の嫡子として、多くの侍を供につれ、美々しい牛車に鞭打たせて、日ごとに、学舎の門で誇ったことも覚えている。

それからは、平家の衰運と共に、すべてが、逆になってしまった。彼が、一歩ごとに、名と実力を蓄えてゆくのにひきかえて、自分は、どうだったか、自分の辿ってきた道と、現在のこの姿は――

弁円は、とても、眠られるどころではない瞳をあげて、強い眉毛の蔭から、星を仰いだ。

「俺は負けた、形において。……しかしそれは俺が懶惰だからではないぞ、俺は、この通り、修行しているのだ。しかし、俺には、あいつのような世渡りのお上手や才気がないためだ。この際、綽空の奴を懲らしてやることは、仏界の粛正になる、彼奴のような小才子が、権門にとり入り、戒律を紊し、世に悪風を撒くのを、俺は、黙視していられない立場にあるのだ。よしっ！　俺はやる！　俺は、身を挺して、この奸僧を追わねばならぬ使命をうけている！」何事か、決意したように、弁円は強くつぶやいた。

すると――満身をつつむ彼の毒炎に水をそそぎかけるように、暗い河原のどこかで淙々と、琵琶の音がながれてきた。

五

眠ろうと努めてさえ眠れないでいる所へ、耳近くで、琵琶を掻鳴らされては、なおさら眠れようはずがない。

弁円は、横になりかけたが、憤ッと、身を起して、「やかましいっ」と、音のするほうへ、呶鳴りつけた。しかし、琵琶は、やまない。超然と、平家を謡っている

のである。
「やめんかっ」といって、つづけざまに、
「こら、乞食法師！」と、罵った。
　すると――はたと、撥をおいて、
「なんじゃの、山伏どの」と、彼方でいう。
「眠りの邪魔になるからやめろというのに、聞えないか」
弁円が、権ぺいに叱ると、
「ここは眠る場所ではありませんが」と、琵琶法師も負けずにいい返す。
　弁円は、いよいよ業を沸やして、
「では、琵琶を弾く場所か」
「興がわけば、琵琶はどこででも弾くのです。しかし、眠りは、そういうものではありません。人間の起居には、おのずから、嗜みというものがあるはずです」
「生意気な」と、杖を横につかんで彼は起ってきた。逃げるかと思いのほか、琵琶法師は琵琶をかかえて泰然たるものである、撲りそうな人間を前にして、見えない眼でじっと、見ているのである。
「盲目か」弁円がつぶやくと、
「盲目は、お手前のことであろう、わしは、肉眼はつぶれているが心眼は開いている、いやはや、未熟な山伏どのじゃ」と、盲目は薄く笑う。
　見ると、この法師も、河原の橋下を、一夜の宿として明かす者らしく、石ころの上に菰を敷き、それへ薄汚い包みや持物を置いて、自分は、水際の石に腰をすえていた。加古川の教信沙弥の成れの果て――かの峰阿弥なのである。
「おれを未熟といったな。どこが、なんで、未熟かっ」
「されば――あなたは役の優婆塞が流れを汲む山伏ではないか」
「そうだ」
「樹下石上はおろかなこと、野獣や毒蛇の中でも平然と眠れるぐらいな修行がなくて、山伏といわれましょうか、峰入りは何のためになさるか、兜巾、戒刀、八ツ目の草鞋は、何のために身につけておらるるのか。琵琶の音に眠れぬなどとはいとおかしや。……思うにおぬしは、何か、腹にわだかまりがあるのじゃろう、はははは」心眼が開いているといったのも決して大言ではないかもしれぬ。
弁円は、肚の底まで見透かされたような気がして、ややしばらく、じっと峰阿弥の面を見つめていたが、
「ウーン、なかなか面白い理窟をこねる奴だ、それほど、人の心がわかるなら、俺がなにを思っているか、それも分るか」
「わからいでか」
「いってみい」
「おぬしは、綽空が、月輪殿の姫と婚儀を挙げることを怒っているのじゃ」
「ばかっ、それは今、俺が独り言に洩らしたのを聞いていたのだろう。そんな知れきったことでなく、俺が、それについて、なにをするか、胸で思っていたことをあてみろというんだ」
「わしは、陰陽師ではないから、そんな先のことは知ら

ん……」

六

峰阿弥は、語を次いで、

「だが、山伏どの、他人が眉目よい妻を娶るのを、嫉むものは、あさましゅうござるぞよ。どういうお怒りか存ぜぬが――」

すると弁円は、

「おれの怒りは、公憤だ、私憤ではない」

「ははは。その両方ではありませんか。野暮な青筋をたてるよりも、妻が欲しくば、ご自分もよい女房を持つのが一番よいではございませんか」

「だまれ、俺をそんな破戒無道な山伏と思うているか。ヘタ口をたたくと、金剛杖をくらわすぞ」

「なぜでしょう？　……」と峰阿弥は、癖のように、頭を傾げて――

「なぜ、妻を持つことが、破戒無道でございましょう、戒は人間が決めたもの、仏がお決めなされたものではありません」

「知らぬか！　蓄妻噉肉は、堕獄の罪にひとしい掟になっていることを」

「では、東大寺の明一和尚はいかがですか、元興寺の慈法和尚は堕落僧でございましょうか。遠く、仏法の明らかな時代に溯ってみますると、奈良朝のころには、明一や、慈法のような碩学で、妻を持たれたお方は、幾人もあったようでございます。続日本紀をお読みになったことはありませんか、あの中の延暦十七年の条に、太政官の法令として――

自今、僧侶ノ子ハ
一切還俗セシメテ
以而、将来ヲ懲ス

――と出ているのを見ても思い半ばに過ぎるものがございましょう。ために、滔々と、軟弱な弊風があったことも否めません。自力聖道門が、絶対力を礎いたのは、そういう時代の反動でございました。けれど、自力といい、他力と申しましても、道は一すじです、同じ高嶺の月であります、ただ、世道人心のあるところをよくよく見究めてやらなければ、億衆の手をとって、親切に、安住へ導いてやることはできません。ただ闇雲に、外面如菩薩の、噉肉外道の、自力絶対のと、社会が変っても、人心や生活の様式が推移っても、後生大事に旧学に齧りついているのは、俗にいう、馬鹿の一つ覚えと申すもので……。ははは、失礼なことを申しましたが……それでは進化がございません、いつまで、己が身一つ救えずに、うろうろと乞食するがやっとの行で、それでは、野良犬も修験者も、変りがないといってもよいくらいなものでございましょう」

「この、おびん頭盧めッ！」ぴゅう――と杖がとたんに唸ったと思うと、

「あっ……」と、峰阿弥は、俯つ伏した。

「生意気なっ、生意気なっ」つづけざまに、弁円は、打

ちすえた。峰阿弥の抱いていた琵琶は、糸が刎ね、海老尾が折れ、胴が、砕けた。

「黒っ。――さあ寝よう」吠えたける犬を抱いて、弁円は、元の場所で眠ってしまった。

……

白々と夜の明けてきたころだった、呼び起されて、弁円がふと眼をさますと、ゆうべの峰阿弥が、火を焚いている。恨みがましい顔もせず、にこと笑って、

「山伏どの、干飯が炊けました。味噌を舐ぶって食うと美味い、ここへ来て召食がらぬか」と、いうのである。

見れば、欠けた土鍋の下に、燻べているのは、砕かれた琵琶であった。

飯のにおいに、黒は吠える。弁円は、その首をつかまえて、

「餓鬼めっ、後で食わす、乞食法師の残りなど、食いたがるな」抱きしめて、再び、仰向けになった。

橋のうえには、もう、朝の人々が、往来していた。その中には、大身から贈る祝い物であろう、これ見よがしに僕に担わせて、月輪殿を訪れるらしい幾荷の吊台も通って行った。

不退の輦

一

庭造師が入って、古枝を刈ったり、病葉をふるい落したり、五条西洞院の別荘は、きれいな川砂に、箒の目が立っていた。

すぐ裏を行く加茂川の水には、もう、都から遠い奥の紅葉が浮いてくる。近くは、東山の三十六峰も真紅に燃えている秋なのである。

建仁三年の十月。綽空にとっては一つの到達であり、玉日にとっては忘れ得ない生涯の日が来た。二人は、婚儀の座に並んだ。

日の座と、月の座のように。いかに佳い対の夫婦であったろうかと、街の者は、ただ、想像に描いた。

しかも、当夜の華燭から七日七夜にもわたる招宴や賀車の往来の生きた絵巻を繰るにも勝る典雅婉麗な盛事は、藤原氏の栄えたころにも稀れなくらいであろうとさえいわれた。また、月輪殿は、この七日に、俗世の財を、傾け尽しても惜しゅうないといったという噂もつたえられていた。

聟の君である綽空もまた、必ずしも、この一法師の嫁とりにはふさわしくない豪華と盛大とを、固辞しなかった。

（――すべてこれ仏陀のわれに飾りたもう七宝珠玉）と、甘んじてうけている風であった。

さて。式の翌る日からは、貧民への餅撒きやら、施粥やら、寺院への勧進やら、それも済むと、新郎新婦は、やがて、新しい愛の巣へ、二人だけで移って住むことになった。

ところが――、かほどな財を費やしながら、かんじんな若夫婦の住む家は、べつに、新しく普請されてもいなかった。場所は岡崎の松林のうち――家は、綽空がいなければ、栗鼠が畳を駈けているあの岡崎の草庵なのである。

それも、屋根葺一人、入るではなく、まったく、元のすがたのままに。

「あれでは、新妻が、お可哀そうじゃよ」

「月輪殿は、いったい、何のために黄金をお費いなされたのか、どういう量見なのか、とんと、分らぬ」と、知己の者は、首を傾げた。

誰にも、わかろうはずはない――綽空と、玉日と、その父のほかは。

新妻が、身と共に、そこへ持って行った荷物といえば、一荷の衣裳と、髪道具と、そして、一輛の輦だけであった。その輦だけは、さすがに、今度の儀式に新調した月輪殿の好みのものだけあって、綺羅を極めた物だった。松林の中にそれを置くと樹洩れ陽に、螺鈿や砂子や緋の房がかがやいて、妖しいほど美しいのであった。

（わたしは、こうして暮そうと思うが、それは、嫌か）

（忌いませぬ）新婚の夜の誓いであった。

これは、綽空の希望した生活であり、盛事は、月輪殿の肚だった。共に、小乗な考え方ではなく、この婚儀は、わが娘、わが聟だけの生活ではなく、仏の旨を体してする対大衆世間への仏婚であり、また、天意をもってする天婚であると固く信じていたのであった。

べつに、召使をおく寝小屋もないので、朝になると、小禽のさえずる赤松の林の奥へ、西洞院から、牛飼や雑色が、ぞろぞろと、新郎新婦の草庵へ憚りながら、用を聞きにくるのであった。

二

姫は――いや新妻は――朝は夙く小鳥と共に起きて、ただ一人の侍女の万野をあいてに、林の薪木をひろい、泉の水を汲み、朝の家事に余念がない。

すがすがと、清掃された草庵の部屋に、やがて、ささやかな膳が出る。

茶碗が二つのっている。

綽空は、膳を見ても、それが、衆生の世界に見え、仏法を考え、感激が胸にあふれた。

箸も二つ、木皿も二つ、このうえの物はすべて二つの対であった。生きる営みが、すべて、二つという数から初まることは、この膳が語っているではないか――と。

日月。――この二つの下に生きる人間は、やはり、孤であってはならない、西行のごときさすらい人とならい

ない限りは。
彼岸へ、一人でわたれる者は、選ばれた者のみだ。衆生は、二人で棹さすのでなければならない。陰陽の波にのせて。
そのいずれにも徹しきれないで、混濁の汚海にあえぐ愚かな今の僧人よ！　衆生よ！
綽空は、箸をとりつつ、ひそかにこう思う。
（いかに、今朝の自分の姿が、安心と、満足とにかがやいているかを。なぜ、人々はこうなれないのか）飯を盛った茶碗の中へ思わず微笑んでいたのである。まばゆげに、それを見て、新妻の玉日も、白珠のような歯を、ちらと見せて、ほほ笑んだ。
「ははは」綽空の今朝の明るさ。体が、軽いのである。
太陽の下へ出て、人間と生れさせてくれたことを、感謝したい。御仏の足もとにぬかずいて、二十年の蒙をひらいてくれたことを心から感謝したい。草へも木へも、よろこびを伝えたい。
なおさらなこと、わがよき妻へはなんと、感謝しよう。
（おん身は、わが凡身を浄化するために、かりに、人間に添い給う観世音菩薩でおわすぞ）と、いおうか。それともまた、
（玉日、そなたはわしに救われ、わしはそなたに救われた、この結縁から、わしら夫婦は、何を生まねばならないか）といおうか。
しかし、胸がいっぱいだ、綽空は何も今朝はいえないのである。玉日はまして、俯向きがちだし……。
膳を、水屋へ運んで行った万野も、ひとりで、何か満足している。松の樹洩れ陽が、台所の棚にまでさしこんで、そこも、今朝から塵もない。
「お迎えに参りました」と、門口で西洞院から来た小侍と雑人が声をかけた。
「おお」われに返って、綽空は、妻へいった。
「今日から、日々、吉水へ参るのだ、そなたも、一緒に」
「はい」
「かねて、わしが、そなたに向って申し聞かしたことども、よく、胸にこたえておるか」
「わかっております」
「ここから吉水までは、道は近うもあれ、百難の障碍が必ずあるぞよ、不退の二字、胸に、わすれるな。いかなることがあろうとも、揺るぐな、躁ぐな、怯えまいぞ、綽空が、一緒だと思え、良人の力、御仏の御加護があると思え」雑人たちは、輦のそばで、牛飼をさがしていた。牛飼は、稚子と共に、牛を泉のほとりへ曳いて行って、のどかに、草を飼っているのであった。

三

「ご用意ができました」と、庵のうちへ雑人の一人がいう。
「おう」と、綽空は立つ。玉日も、庵を出る。
その日二人の装粧いは、晴の席へ臨むような盛装であった。わけても、新婦は、まだ華燭のかがやきの褪せな

い金色の釵子を黒髪に簪し、五つ衣のたもとは薫々と高貴なとめ木の香りを歩むたびにうごかすのだった。

「……」声でなく、眼で――お先に――というように良人へ羞恥の襟あしを見せて、輦にのる。

綽空は、その後から、新妻とならんだ。絢爛をきわめた新調の糸毛輦である。それへ、膝をつめあわせて共に乗った盛装の若い男女は、どんな絵の具や金泥を盛りあげても描きあらわせないほど華麗であった。随身の牛飼や雑人たちも、うっかり見恍れてしまうのである。

「進れよ……」綽空が、輦の上からいう。

「あっ」と、牛飼は、手綱で牛を打つ。八瀬牛の真っ黒な毛なみの背がもりあがった。巨きくて、鈍々と、しかし決して後へは退かない牛の脚である。――それが首を突きだして巨躯をまわすと、きりきりと、軌は土を掘って林の道を揺るぎだした。

「どう参りますか」わきに添ってゆく侍がいう。綽空は、それに答えて、

「――野川の御所から白河泉殿を西へ――二条末をのぼって、鳥居大路へ出る」

「ちと、廻り道ではございませぬか」

「かまわぬ、――鳥居大路からは十禅師の辻へ。そして祇園の御社を横に、吉水まで。悠々とやろうぞ」

「かしこまりました」――だが、野川の御所の曲がりから、もうその糸毛輦は人の目をよび集めた。加茂川原の向う側からさえ童や凡下が、人だかりを見て、ざぶざぶと水を越えて駈けてくるのだった。わけてもこの辺りには、吉田殿、近衛殿、鷹司殿などの別荘が多いのである。窓や、門や、路傍は、たちまちのうちに奇異な物へ瞠る無数の眼が光っている。

「なんじゃ？」

「なにが通るのじゃ？」河原で衣を晒していた女たちは、濡れた手で人混みを掻きわけた。脚と脚のあいだで、野良犬が吠えたてるし、嬰児が泣くし、物々しいことである。

「やあ、美しい上臈が、若い法師と、添乗りして、行くぞや」

「怪ったいな！」

「知らんかい、あれや、岡崎の松林に住んでいる坊じゃげな」

「では、綽空法師かよ」

「九条殿の法師聟じゃ」

「なんじゃ、法師聟が通ると？　……。ほ、それでは、あれが、嫁御寮か」

さても天下の大変でも往来に起ったように、町の凡下たちは、人にも見よと手を振ったり指をさして騒ぐし、通る先々の別荘や寺院の門前には、自失したような眼と、呆れたような口が、物も得いわず立ち並んでいた。

四

輦が、鳥居大路へかかると、もうその輦が、人を轢き殺さない限りは、後へも前へも動かせないような群集

だった。
「人前も無う、九条殿の法師聟と、その嫁御寮とが、一つの輦で通ってゆくぞ」
「気でも狂うたのか」
「果報すぎて――」
「いや、仏罰で」
「気ちがい聟！」
「破戒僧っ」
「地獄車よ！」追っても追っても、輦の後から蛆のように群集は尾いてくるのである、そして、辻にかかるほど、その数は増した。
花頂山のいただきも、粟田山も、如意ヶ岳も、三十六峰は唐の織女が繍った天平錦のように紅葉が照り映えていた。空は澄むかぎりな清明を見せて、大路から捲きあがる黄いろい埃が、いくら高く昇っても、その碧さに溶け合わないくらいであった。
輦の先に立ってゆく、牛方と、侍とは、額を黒い汗にして、
「退けっ」
「道を開け」
「往来の邪げする者は軌にかかっても知らぬぞよ」鞭を上げてみせたり、叱咤したり、一歩一歩、轅をすすませて行くのであったが、衆は、衆を恃んで、そんな威嚇に、避ければこそ、
「あれみろ！」と、指さして、町の天狗のように、わあわあと嘲笑う。
「あの、法師の顔は、どうじゃよ。真面目くさって、白金襴の法衣をまとうて清浄めかしているけれど――」
「夜は、どんな、顔することやら……」
「女性も、女性」
「よくよくな、面の皮よ！　二人ともに！」
そんなところではない。野卑な凡下の投げることばのうちには、もっと露骨な、もっと深刻な、顔の紅くなるような淫らな諷刺をすら、平気で投げる者がある。
そしてもう、十禅師の辻へ出ようとするころには、輦は人間で埋められて、一尺も進み得なくなっていた。
――が、綽空は、端厳なすがたを少しも崩してはいない。眉の毛一すじうごかさないという態度である。
余りにも、傷々しく思われるのは、玉日であった。被衣してさえ若い新妻は昼間の陽の下を歩み得ないほどなのが、そのころの深窓に育った佳人の慣わしであるものを。
しかし――こういう試練にかかることは、この人が良人ときまる前からの覚悟であった、父からもいわれ、綽空からもとくといわれた上で、はっきりと誓いしていたことだった。玉の肌を白日の下に曝すほどな辛さも、彼女は、辛いとは思わなかった。むしろ、嫁いでまもないうちに、良人と共に、良人の信行の道へ、こうして、忍苦をひとつにすることができた身を、倖せとも、妻の大きな欣びとも、思うのであった。

五

群集に加担もせず、また、その渦中に揉み罵られている輦の人にも共鳴せず、ただ傍観者としてこの成行きをながめている者は、

――どうなることか。

興味と不安とを併せて抱きながら、自分たちも、余波をうけて、人の怒濤に押しつけられていた。

すると、ひしめきあっている群集の後ろから、背のすぐれた大坊主と肉のかっちりと緊まった四十前後の痩せがちの僧とが、

「退け」

「邪魔だ」と、弥次馬を掻き分け掻き分けして、一心に、輦のほうへ近づこうとして焦っていた。

――誰か、熱鬧の人渦のうちから、その時綽空の輦を眼がけて、

「――堕落僧っ」と、石を投げた者がある。

一人の弥次馬が、暴行に率先して、悪戯の範を垂れると、火がつくように浮かされている人間の渦が、いちどに、

「わあっ」と、喝采をあげて、

「外道めっ――」とまた、石を抛り投げた。

ばらばらっと、牛の草鞋だの、棒切れなどが、軌や、簾へ向って、暴風みたいに飛んできた。

だらだらと、こめかみに、汗をながして弥次馬を掻き分けてきた大坊主と、もう一名の僧とは、

「ややや」と立ち淀みながら、法衣の袖を腕高くからげて、

「この慮外者めが」痩せた僧のほうが、側に、小石を拾っている凡下の頭へごつんと鉄拳を与えると、大坊主はまた、弥次馬の蔭にかくれて、今しも、輦へ向って、物騒な瓦の欠らを投げつけようとしているどこかの法師の顔を見つけて、

「この蛆虫ッ」と、腕を伸ばすが早いかその襟がみを前へつかみ寄せて、眼よりも高くさしあげると弥次馬の上へ、

「くたばれっ！」と抛り投げた。

群集は、わっとそこを開いて、四坪ほど大地の顔を見せた。投げられた法師は鼻の頭を柘榴のようにして、人のあいだへ這いこんだ。

大坊主と、痩せた僧は、その隙間に、輦のそばへ走り寄って、

「お師様っ」

「綽空様っ」轅にすがりついて、顔を、汗と涙でよごしながら叫んだ。

「おお、性善坊に、太夫房覚明か」綽空は、初めて、唇をひらいた。彼の眼にも、きらと、涙が光った。二人は、焔のような呼吸で、

「おゆるしなく、参りました。けれど、何でこれが他所事に見ておられましょうか。どうぞ、吉水の御門前まで、お供の儀、おゆるしくださいませ」性善坊がいうと、あ

の木曾殿の荒武者といわれた覚明も泣かんばかりに、
「おゆるし下されい。いや、おゆるしがなくとも、輦について参りますぞ」と、訴えた。

六

おうとも、否とも、綽空の答えを待っている二人ではなかった。轅の両側にわかれて、
「雑人、鞭を貸せ」覚明が、牛飼の鞭を奪って、百万の魔神もこの輦の前を阻めるものがあれば打ち払っても通らんと巨きな眼を瞋らすと、性善坊も、八瀬黒の牡牛の手綱を確乎と把って、
「それっ、易行念仏門の先行者が行く手の道を邪げして、あえなく、軌にむだな生命を落すなっ」と、叱咤しながら、むらがる弥次馬の影を打ちつつ、万丈の黄塵の中へ、むげに、ぐわらぐわらと輦を押しすすめた。
大地を鳴りとどろかせて迫る軌の音と、露はらいの二人の勢いに気押されて、群集は、足をみだしてわっと道をひらいたが、小石や、泥や、瓦のつぶては、悪戯から反抗へ、反抗から激昂へと、かえって、険悪なものを孕んできて、
「何をッ、外道の眷族めっ」
「通すなっ、その、穢れ車をッ――」
疾風か、大魔軍の征矢かのように、ばらばらと、輦の扇びさしや左右の簾や、性善坊の肩や、また、玉日と綽空の膝の近くへも飛んできて、弾き返った。

ついきのうまで、深窓のほか、生きている社会とはどんなものか、近づいても見なかった玉日は、さすがに、この凄まじい人間の数が激昂したり、面白がったり、煽動したり、また、耳にするさえ顔の赤くなる猥褻な言葉を平気で叫んだり――あらゆる能力をもつ大魔小魔を地へ降ろしたかのごとく、それらの大衆が、自分の輦一つへ向って、吠え、猛び、喰ってかかるのを眺めると、さすがに、女性のたましいは、萎えおののいてしまって、生ける心地もないらしいのであった。
じっと、俯向いたきりの顔は、紙のように白かった、釵子の光も、黒髪も、肩も、かすかに戦慄していて、そのまま、今にも失神して横に仆れはしまいかと危ぶまれる。
――玉日！　そんなことでどうするかっ？
玉日は、誰かに、呼ばれたような気がしてはッと我れにもどった。側にいる良人の声ではなかった。綽空は、岡崎の草庵を出た時からほとんど膝に組んでいる指一つうごかしていない。ただ、濃い眉に、揺るがない信念をきっとすえているだけだ。ここより後へは退く大地を持たない唇をむすんで、輦のまえの大衆に憑りうつっている大魔小魔の振舞いをながめているだけなのである。そして、その結ばれたままの唇から、微かに、
――なむあみだぶつ。なむあみだぶつ。なむあみだぶつ。
玉日は、恐怖のあまり、いつの間にか、片時も離してはならないものから離れている自分に気がついた。

――なむあみだぶつ！
――なむあみだぶつ！
彼女も、良人と共に、一念に唱えた。
そう唱えると共に、ふしぎな力がわいて、彼女は、蒼白に萎えていた面を、きりっと、真っ直に上げた。自分の力でないようなものが、その貌を厳然とささえた。
わんッ！　その時、犢のような一匹の熊野犬が、いきなり、輦の前に躍って鞭をあげた覚明の脚へ噛みついた。

七

「畜生っ」覚明は、噛まれた脚をあげて、黒犬の顎を蹴った。
きゃんッ――悲鳴をあげて、熊野犬は、薄赤い腹を見せてころがったが、その尾の端へ、勢いよく廻っている輦の轍が乗ったので、さらに、ふた声ほど、鋭く啼きたてて、横っ飛びに、群集の中へかくれこんだ。
そこに――その犬の逃げこんだ所に、一人の山伏の顔が見えた。聖護院に籍を持つ播磨房弁円である。
さっきから、群集の中にまじって、煽動したり、自分も怒号したりしていたのであったが、黒が、血まみれになって、足もとへ帰ってきたのを見ると、もう、理性のささえを失ったように、
「この野郎ッ」喚いて、輦のそばへ、寄ってきたかと思うと、腕をのばして、藤色の縁に朱の絹房の垂れているそこの簾を、ぱりっと、力にまかせて、引き千断った。
裂けた御簾の糸や竹が、蜘蛛の巣のように、弁円の兜巾へかぶさった。そして、輦のうちの綽空の横顔が、雲を払った月のように、鮮やかに彼の目に映った。
積年の憎悪と、呪いとが、弁円の踵の先から満身へ燃えあがった。彼は、輦のうちへ、唾を吐きかけて、早口に、
「堕地獄ッ」と、罵り、
「それでも、貴様、人間か、僧侶かっ。なんの態だっ、馬鹿っ、仏法千年の伝統を蹂躙する痴漢め！　こうしてやる！」杖を持ち直して、ふりかぶると、性善坊は後ろから組みついて、
「無礼者っ」投げようとしたが、弁円も強かに反抗した。かえって、性善坊のほうが危ないのである。覚明はそれを見て、
「おのれ」と、弁円の肩を、鞭で打った。
輦の上からその時初めてした綽空の声であった。
「――これっ、二人とも控えぬか」
「はっ……」
「他見すな！　道ぐさすな！」
「はいっ」
「轍にかかる石、雑草にひとしいもの、それらに関うな、惑うな。ゆくては、本願の彼岸、波も打て、風もあたれ、ただ真澄の碧空へわれらの道は一すじぞと思うてすすめ、南無阿弥陀仏の御名号のほか、ものいう口はな

しと思え。石に打たるるも南無阿弥陀仏と答え唾さるるも南無阿弥陀仏と答えるがよい。――見よやがて、この数万の大衆皆、それについて、南無阿弥陀仏を一音にとなえ奉る日のあることを！」

「笑わすな！」弁円が、ふたたび跳びかかろうとするのを振りすてて、

――なむあみだぶつ。

――なむあみだぶつ。

血にまみれた頭も拭わず、汗にまみれた顔も拭わず、性善坊と覚明は真向きに輦をひき出した。この声、この力、天地に響けとばかりに。

――なむあみだぶつ。

――なむあみだぶつ。

浄土万華

一

ちょうど吉水の道場には、その朝、月輪禅閤が訪れていて、上人としばらく対談してから後、いつもの聴法の席へまじって、他の三百余の学生たちと、上人の講義を聴いていたところであった。

「たいへんだ！」と、誰か、弾んだ声でいうのが講堂の外できこえる。

「――今、十禅師の辻で、人々が、戦のように騒ぎ合っているので、何事かと行ってみたら、綽空と玉日の前とが、この吉水へ参るとて、一つ輦に乗り、町を、華でやかに打たせてきたので凡下どもは激昂し、ひきずり降ろせの、打ちのめせのと、いやもう、乱暴狼藉、はやく、救いに行ってやらねば、ほんとに、あの二人は、これへ着くまでのあいだに、ぶち殺されてしまうかも知れぬぞ」はらはらして禅房の者へ告げ廻るのであった。しかし、屈竟な者はほとんど皆、講堂のうちに粛然と膝をつめ合って上人の熱心な講義に耳を傾けているので、その声を聞いても、顔色を動かしただけで起つ者はなかった。上人もまた、耳に入ったらしいが、それについて一言もいわなかった、月輪殿も、じっとしておられた。

「どうしたらよいだろう？　……一人や二人で行ったと

ころで、どうもならぬし」
二、三の者が門前でこうつぶやきながら、はらはらと眺めている間に、やがて泥土の戦場を駈け抜けてきたような糸毛輦と、摩利支天のように硬ばった顔をした二人の勇者とが、その轅について、ぐわらぐわらとこなたへ曳いてくるのが見えた。
「おお！」
「無事に、見えられた」思わず、門前に立っていた者は手を挙げた。
綽空は、すぐ道場へ入った。玉日も、その後に添って、良人と共に、そのまま講堂の中へ坐った。
朽葉色の法衣や、黒い法衣ばかりの中に、たった一人、彼女の装粧だけが眼ざめるほど鮮麗だった。
学生たちの眼が、どうしてもそれへ動かされずにいなかった。講義をしながら上人はそれを感じたであろう、粛然としていた中に、何となく、無言の動揺がながれ始めたのを。
しかし――。綽空と玉日のふたりだけは、いかにも、安心そのものの象であった、幸福そのものの相だった。他へ、何ら気の散ることなく、上人の講義の終るまで、心静かに、聴いていた。
その日の話は長かった。講義が終ると、月輪殿はすぐ玉日を、上人の座下へ連れて行って、紹介わせた。上人は、さも、満足そうに、
「おう……この女性でおわすか」と、慈悲の眼をほそめて、玉日の姿へ見入った。そして、独りうなずきながらまたいうのであった。
「まことに、仔細なき坊守よな。綽空の望みも、これで一つとどいた。弘誓の海はまだ遠いが、本願の大船は、ひとまず、陸に浪を憩うがよい……」

二

翌日も、若い夫婦は、きのうのように輦で吉水の門へ通ってくる。
雨の日も、風のふく日も、それからは、一日とて怠る日のない綽空と玉日であった。四百に近い諸弟子のうちで、この二人だけがいつも講堂で眼立った。老いたる沙弥たちは、
「健気なご精進よ」といったが、若い沙弥たちには、玉日の麗わしさと、綽空の幸福そうな落着きとが、とかく、眼に障った。うらやましいと思わずにいられなかった。そして浄土門の教義をめいめいが、もう一遍深刻な気持になって考え直し出したらしい容子なのである。
「よいことだ」と、上人はいわれた。
また、ある時は、講義の壇から、上人はこういう意味のことも洩らされた。
「この中で、法然房のことばを真に汲みとって、即座に、仏陀の恩寵を感じ、この世をば、この肉眼で、万華の浄土と眺め得られるものは、おそらく、綽空とその妻とが、第一であろう」――と。上人もまた、二人の境地を、心から羨んでおられるのだった。――もちろん、未熟な

若い沙弥のそれとは違うが。
　ああ、感謝。綽空の心は今、感謝でいっぱいだった。この幸福感こそ、念仏行者が、ひとたび、絶対の摂取にあずかるの時に、誰人でも、うけることのできる大悲の甘露なのである。ただ、それを汲み得ないで、人は好んで、未だに、聖道門の自戒や懐疑にさまようているだけなのだ。
　日の出る朝には、岡崎の草庵を二人の輦が出た、夕月のさしのぼる黄昏れには、二人の輦が、吉水から帰った。
　――そうして、毎日、欠かすことなく道に見ているうちに、町の大衆は、もう、怪しまなくなってしまった。二人の輦に行き会って頭を下げる者はあっても、石を抛る者はなくなってしまった。
「あのように円かに、夫婦が、一つ道を歩み、一つ唱名をして生活すことができたら、ほんに、幸福であろうに」と、凡下たちも、自分たちの、歪んでいる家庭や、倦怠期に入っている夫婦仲や、すさびかけている心をかえりみて、やがて、吉水の説教の日には、夫婦して打ち連れてくる者がにわかにそのころ殖えてきたという。
　しかしまた、浄土門を、呪詛する側の他宗の僧は、いっそう、彼を悪罵し、彼を嫉んだ。わけても播磨房弁円は、
「末法だ、末法だ」と、人に会えば、必ずその人に向って、綽空のことを、悪しざまにいい、もしその者が綽空の弁護でもすれば、敵のように喰ってかかって、その者が、
「まったくだ！　まったく貴公のいう通りだ」
　と、うなずかなければ、承知しなかった。
　今日も――輦の軌に轢かれて、尻尾を半分失った例の大犬の黒をつれて、五条の裏町のきたない酒売店の土間で、弁円が、そこの亭主を相手に、頻りと、悲憤をもらしていると、隅のほうで、さっきから黙ってちびりちびり飲んでいた野武士ていの男が、
「修験者どの」と、呼びかけた。そして、
「なかなか、貴公はおもしろいことをいう男だ、一杯献じよう」と、杯をほして、彼の方へつきだした。

三

「修験者は、どこの方人か」
「聖護院の御内」と、弁円は一語で答えて、
「――貴公は」
「浪人だ」
「平家の落ちぶれか」
「いや、源氏の――」
「源氏の侍が、浪人しているのはおかしいではないか。今しも、源氏の全盛は、ひところの平氏に取ってかわっておる」と、酒杯を返して、じっと、相手の顔を見すえた。その浪人というのは、天城四郎であった。
「武家奉公は、もう飽いた。それも、熊谷蓮生房のとは、すこし趣がちがうが」

「では、浪人して、何で衣食しているのか」
「大きな声ではいえぬが盗賊だ」
「え？」弁円は、四郎の大胆なことばに呆れたが、四郎は、泥棒を人間の正業と信じているので、憚るいろもなく、
「戦を起せば、人馬を殺し、平時になれば、権謀と術策を是れ事とする武家よりは、まだ、盗人のほうがましじゃないか。人間を殺したり泣かせる数からいっても、比較にならない。ことに、俺などは、涙もろい質だから、貧乏な人はいじめない。――例えば権門とかまた、綽空のような、天人倶に許さざる虚偽の人間に対っては、生命がけで、ぶつかってゆく」
「それで貴公は、俺に酒杯をくれたわけだな」
「どうやら、おぬしも、綽空の行為には反感を持っているらしいから、昵懇を求めたのだが」
「善いかな」弁円は、すっかりよい機嫌になって、そこの酒代も、自分で払って、
「出かけようぞ」
「遊里にか」
「いや、女になど触れたら、十数年、諸国の深岳で苦行した通力を一夜にして失ってしまう」
「あはははは、いかにも、おぬしは、修験者だったな、久米仙人のように、地へ堕ちては、困りものだ」
「ここで、酒をもらって行って、どこか、幽寂な所で大いに語ろうではないか」二人は腕を拉しあって、祇園神社の暗がりへと入って行った。どっかと石段に腰をすえて、
「おぬし、綽空と、どういう縁故があるのか」
「縁故ではない。怨恨だ。ひと口にいえば、互いに呪い呪われする宿命に生みづけられたのかも知れない――」と寿童丸のむかしから今日にいたるまでの身の上を弁円は語り終って、
「――しかし、今日では、彼に対する俺の憎悪は、決して、私怨ではない、公憤であると信じている。天にかわって、あの法魔綽空を誅罰するのは、自分に与えられた使命とまで考えておるのだ」
「これは、俺より上手な人間がいる。俺も、綽空には、仇をする一人だが、殺そうとまでは思わない、八十までも、九十までも、生かしておいて、どっちが、人間らしく生き通すか、あいつの体から、黄金を強請りながら、あいつと、生き較をしてみたいのだ」
「それもいい。――それもいいがあのような仏魔を、永くこの世に置くことは、取りも直さず、社会の害毒になるではないか」

四

「社会の害毒に？　――」と天城四郎は、弁円の思想の浅薄さをあざ笑うように反問して、
「そういうと、いかにも、この社会というものが清浄に聞えるが、どこにそんな清い社会があったか。藤原、平家、源氏、いつの治世でも、俗吏は醜悪の歴史を繰り返

し、人民は、狡く、あくどく、自己のことばかりで生きている。それが社会だ」
「そうばかりはいえぬ。それでは、俺たちは、何で、修験道に精進する張合いがあろう。そういう社会の中にも、真実を探し、浄化の功力を信じればこそ、吾々は、身を潔斎して、生きている」
「ははは。百年河清を待つという奴だ。なんで、この社会が、そんな釈迦や聖者のいうとおりになるものか。第一に、聖者めかしている奴からして、眉唾者が多いじゃないか。だが、おれはその眉唾者とも妥協するよ、だから、綽空も、生かしておかなければ、商売にならない」
「いや、俺の立場としては、断じて、生かして置くことはゆるされない。見ていてくれ、今にきっと、喉笛を掻っ切られた綽空の空骸が、往来に曝される日がやってくるから」
おのおの、信じるところは譲らないのだ。天城四郎にも信念があり、弁円にも弁円の信念がある。
（案外、話せない奴だ）酒の上で、いちど共鳴はしたけれど、心の底をたたき合ってみて、二人は、お互いに軽蔑してしまった。
「また、縁があったら、どこかで会おう」ぶつかり物は離れ物――ということばの通りに、二人は、あっさり別れてしまった。
――年は暮れて、元久元年になる。
岡崎の愛の巣では、若い妻と、法悦のうちにある綽空とが、初めての正月を迎えた。――玉日も、もう、草庵の水仕事にも馴れて。
七日には、二人して、粟田口の青蓮院の僧正へ、賀詞をのべに行った。尋有も、いよいよ健やかな勉学期に入っている。ただ思いだされるのは、養父の範綱――観真となって、老後を、孤寂のうちに養っていたあの養父が――もうこの時には、世にいなかったことである。綽空や尋有が、こういう欣びの法境に到らないうちに、夙く他界の人になっていた。
（養父がいたら、どんなに……）という良人の述懐を、若い妻は何度も聞くことであった。
二月になると、良人は、
「近くへ、旅に出たいが」と、妻へいった。
――淋しくはないか、と若い妻を宥わり思うのであった。元より沙弥の妻である。玉日は顔を振って、微笑んだ。
そして良人の立つ朝は、まめやかに、旅衣をととのえて、門口へ出て、笠を渡した。
「……二十日ほどで帰ります」どこへともいわずに綽空は、岡崎の松林から出てゆくのである。玉日は、良人のうしろ姿へ、掌を合せて、
「ご無事に」と仏陀へ祈った。――虫が知らすか、別れともない気がして。

五

今の法悦につつまれている身のしあわせを思うにつけ

て、綽空は、自分をして、今日あらしめてくれたものの恩を思わずにいられなかった。

父母、師の君の、慈育の恩。また、叱咤、鞭打の先賢の恩。

かぞえれば、叡山の雲にも、路傍の一木一草にも、ひざまずいて、掌をあわせたい恩を感じる——

わけても、彼の心に、今もふかく刻みこまれているのは、十九歳のころのまだ惨心傷ましい時代にうけた聖徳太子の霊告だった、年ふるたびに御宏恩の偉大さを思わずにいられない彼であった。この国土にあっての仏教であり、この国の人民たる一沙弥として、苦難もあり、試練もあり、今日の法悦もある身であった。これから先もまた、どう、生涯するにしても、その浄土仏国の建立のほかに、自分の使命があろうとは思えない。

太子は、それを、まだ真の闇だった若い惨心一穂の灯となって、暗示して下すった第一のお方だった。後の苦難にたえた力は、その時の灯りの力である。

難波江へ——岡崎を出た綽空が、まっすぐに、摂津の四天王寺へ向っていたのは、その宏恩に対して、今日の報告をするためであったにちがいない。

しばらく、四天王寺に停まっていた。そして、ふたたび草鞋の緒を結ぶと、足を、河内路へ向けて、二月末の木の芽時を楽しむように、飄々と、袂を東風にふかせてゆく。

「奴。……まだ気がつかぬ容子らしい」大きな黒犬が、彼の後からついて行った。その犬を連れているのは、いうまでもなく、播磨房弁円。

兜巾をあてた眉間には、去年の秋以来、狙けまわしている必殺の気がみなぎっている。綽空の後を尾けてくる前に、京の刀師に、その腰におびている戒刀も充分に研がせてきたくらいだった。

だが——京から難波津——四天王寺から河内路と、こう、往来の多い場所では、とかく、寄りつく機会が見出せなかった。やや淋しい並木などで、今だと、心を奮い起そうとした折もないではないが、なぜか、そんな時に限って、妙に気が怯む。——隙がないというか、あまりに、綽空の身が放胆に投げだされてあるのでかえって手が出難いのか、いつも、機を逸してしまう。

怖ろしい黒犬が、絶えず後になり先になりしているのを、綽空は、知っているのか否か、やがて、磯長の叡福寺へ彼の姿はかくれた。聖徳太子の御霊廟のある御葉山の松の丘へ——その松風の中へ。

わんッ！　黒が、山門の前で、急に吠えだしたので、「畜生」弁円は、そこからいちど、里の方へ逃げだした。そして、黒を遠い松林の奥へ荒縄で縛りつけて出直そうとした。

わん、わんっ、わんっッ——

彼の姿を見送って、黒は、発狂しそうに吠える。何となだめても畜生のかなしさである、弁円は、研ぎすました戒刀を抜いて、犬の鼻へ突きつけていい聞かせた。

「おとなしく、一晩、ここで待っていろ。——いいか、褒美には、後で、似非聖者の生き血をぞんぶん舐めさせてや

ろう」

六

まだ春は浅い、月は若い、肌寒い初更なのである。

山清水の溜井に垢離をとって、白い下着に、墨の法衣をつけ、綽空は、叡福寺の厨から紙燈芯を一つもらって、奥の御霊廟へ一人すすんで行った。

寂とした窟、その前の荒れ果てた、一宇の堂、昔ながらである、何もかも、ここだけは変っていない。

「アア！」思わず出た真実の息である、永い旅のさすらいから戻ってきた人間の子が、心の故郷へ立ち帰った時の感激にも似ている。

綽空は、胸の底から湧き出た声と一緒に、廟前の床にひれ伏していた。

日域ハ大乗相応ノ地
諦ニ聴ケ諦ニ聴ケ我教令ヲ

今も耳にある。十九の冬、この床に骨ばかりの身を坐らせて、七日七夜の祈念のうちに、夢ともなく、太子のおん姿を見、そして、壁に見出した御告命の文字を。

汝ノ命根応ニ十余歳ナルベシ
命終ッテ速ニ清浄土ニ入レ善信善信、真ノ菩薩

「おそろしいほどです。御告命に違いなく、範宴は死し、綽空は生れました。ああ、綽空はここに生れました。ひとえに、太子の御宏徳によるところです。今の私の法悦は喩るものもありません。そうです、お礼に参籠した今宵を記念として、ただ今からは御告命の二字をいただいて、善信と名乗ることにいたしまする。善信、善信、今の私はさながらその二字の相に現わされております」自分の歓びは、太子の歓びである。綽空は、信じて疑わない。

その歓びを、どういい現わそうか。

更けてゆく夜も忘れて、綽空は――いや善信は、紙燭を寄せて、懐紙に何やら筆を染めていたが、やがて、わきあがる感激を抑えようもなく、無我の声を、朗々と張りあげて、みずから書いた懐紙の讃歌を唱えていた。

仏智不思議の誓願を
聖徳皇のめぐみにて
正定衆に帰入して
補処の弥勒の如くなり
救世観音大菩薩

聖徳皇と示現して
多々の如く捨てずして
阿摩の如くに添い給う

……みりっと、後ろの床が歯ぎしりをするようにその時鳴った。

身軽に扮装った播磨房弁円が、研ぎすました戒刀を背なかに潜め、軒から洩れる月影を避けながら、そろ、そろ、と這いすすんでくるのであった。

大慈救世の聖徳皇
父の如くに在します
大悲救世の観世音

母のごとくに在します
……自作の讃歌をうとうていながら、善信の頬に白い涙のすじが止めどなく流れていた。随喜の甘い涙である。その歓涙に瞼(まぶた)は霞んで、御霊廟(みたまや)の龕(がん)は、虹のような光をぽっと滲(にじ)ませ、あたりには、馥郁(ふくいく)と、蓮華(れんげ)が舞う心地がし、その寂光万華(まんげ)の燦(かが)やきの裡に、微笑したもう太子三尊のおん姿が見え、亡母の吉光御前や、妻の玉日も、その辺りに在るがような心地がして、ありがたさに、われをも忘れて声をあげて、
和国教主の聖徳皇
広大恩徳謝(しゃ)しがたし
一心に帰命(きみょう)したてまつり
奉讃不退ならしめよ！
――刻、刻、刻、一瞬の間を刻(きざ)んで、彼のうしろには、鋭い刃が近づいていたのである。深沈と、夜は更(ふ)け、灯は白く、どこかで遠く、飢(う)えた野犬の声がきこえる。